

第30回 千葉県 建築学生賞 作品集

— 大学の部 —

小室 昂久 日本大学生産工学部建築工学科
近藤 俊暢 東京電機大学情報環境学部情報環境学科
赤堀 厚史 日本大学理工学部海洋建築工学科
下泉 浩太 千葉大学工学部都市環境システム学科
小島 帆南海 千葉大学工学部都市環境システム学科
山名 美月 東京理科大学理工学部建築学科
富山 瑛太 千葉工業大学工学部デザイン科学科
田中 章仁 千葉工業大学工学部建築都市環境学科
小野 詩織 日本大学生産工学部建築工学科
松本 竜太 千葉工業大学工学部デザイン科学科
山内 颯 日本大学短期大学部建築・生活デザイン学科
池羽 七海 明海大学不動産学部不動産学科
下野 真緒 千葉職業能力開発短期大学校住居環境科
小山 竜二 東京電機大学未来科学部建築学科
宇津 里緒奈 日本大学短期大学部建築・生活デザイン学科

黄 起範 日本大学理工学部海洋建築工学科
秋山 竜汰 東京電機大学情報環境学部情報環境学科
新井 育実 千葉大学工学部建築学科
今埜 歩 東京理科大学理工学部建築学科
石井 亨和 東京電機大学未来科学部建築学科
児玉 大樹 千葉職業能力開発短期大学校住居環境科
小池 翔太 千葉工業大学工学部建築都市環境学科
石井 康平 千葉大学工学部建築学科

— 高校の部 —

上谷 虹熙 千葉県立京葉工業高等学校
小田 瑞葵 千葉県立市川工業高等学校
小島 海月 千葉県立市川工業高等学校
水野 誉也 千葉県立市川工業高等学校
浅見 遊 千葉県立東総工業高等学校

作品展示

- 2018年3月 9日（金） 10:00-19:00
3月10日（土） 10:00～ 公開審査 高校の部
13:00～ 公開審査 大学の部
19:00～ 表彰式
3月11日（日） 10:00-17:00

会場

イオンモール幕張新都心グランドモール3階「イオンホール」
所在地：千葉県千葉市美浜区豊砂1-1

主催

千葉県建築学生賞協議会

公益社団法人 日本建築家協会（JIA）関東甲信越支部千葉地域会

公益社団法人 千葉県建築士事務所協会

一般社団法人 千葉県建築士会

一般社団法人 日本建築学会関東支部千葉支所

後援

千葉県、千葉県教育委員会

千葉市、千葉市教育委員会

NHK千葉放送局

千葉県ケーブルテレビ協議会

朝日新聞千葉総局

読売新聞東京本社千葉支局

毎日新聞社千葉支局

産経新聞社千葉総局

日本建設新聞社

日刊建設工業新聞社千葉総局

日刊建設通信新聞社東関東支局

目次

開催の報告と挨拶	4
審査総評	6
大学作品	8
審査経過	54
大学作品リスト	56
審査結果・なの花賞	58
高校の部 審査総評	60
高校作品	62
高校作品リスト・審査結果	72
審査委員プロフィール	74
協賛	78
主催者団体	79

開催の報告と挨拶



千葉県建築学生賞協議会 会長

中野 正也

新旧混成しながら進化する学生賞

節目となる「第30回千葉県建築学生賞」が3月9日～11日の3日間、イオンモール幕張新都心内の“イオンホール”において開催され、多くの方々にご来場いただき、大盛況のうちに幕を閉じることができました。ここ数年、この「学生賞」は千葉市の“きぼーる”で開催されてきましたが、施設の改修工事などの都合もあり、今回は新しい会場での開催となりました。

今年の学生賞は、大学の部に7大学12学科から選抜された23作品、高校の部に3校から5作品が展覧されました。大学の部の23作品というのは、前回、前々回の17作品をはるかに超え、私の知る限り、最も多い出展数になっております。これは、「千葉県建築学生賞」という卒業制作展の趣旨に賛同し、協力いただけた新たな大学・学科の参加によるものであり、これまで継続的に出展いただいている大学・高校も含めまして、改めて感謝申し上げたいと思います。

今回、『歴史ある千葉県建築学生賞の、第30回という節目の“会長”を任せていただいたからには・・・』という張り切った気持ちで、2つの新しい試みに取り組みました。

“ひとつめ”は、(これまでの会場が使えないという事情があったとはいえ)「新しい会場として、商業施設であるイオンモール幕張新



都心グランドモール内「イオンホール」で開催する」ということで、結果、冒頭で述べたように、例年の数倍となる1000人を超える方々にご来場・見学頂き、大盛況なイベントとなりました。また、その半数の500人以上の方々には、丁寧にアンケートを記入していただいたことから、作品を興味深く見ていただけたことが感じ取れました。

そして「ふたつめ」の試みは、「高校から大学までの公開審査と表彰式、懇親会までを1日で実行・完結する」ということです。公開審査になって今回で10回目となりますが、これまでは、開催期間の3日間を、「①初日は展示」「②2日目に大学の審査と懇親会」「③最終日は高校の審査と表彰式」というプログラムにしていたのですが、今回は思い切って「②と③」を合わせ、土曜日のみ1日で実行するという形式に変更してみました。この意図については、コンパクトでスマートなイベント運営など幾つかありましたが、一番は、『メインイベントである大学の部の公開審査に、関係者全員が参加(見学)してもらいたい』という想いから、このような改革にチャレンジしてみました。

まだまだ改善すべき点はあるものの、これまで最終日にしか来場できなかった高校生や来賓の各団体の会長、指導教員の先生方など多くの関係者の方々が公開審査の場に参加していただけたことは、とても良い結果につながったと思います。特に、進学して数年後には大学などで卒業制作に取り組むであろう高校生達に、大学生の発表・

公開審査をじっくり見学する機会を作れたということは、大変有意義なことだと思います。次回以降もこの形式については継続していきたいと強く思っておりますし、関係者の皆様にもご理解・ご賛同いただけるものと期待しております。

今年度も千葉県や千葉市、主催の建築関連4団体と、報道各社や協賛いただきました企業や個人の方々のご支援によって、この「学生賞」というイベントを開催することができました。そして、「大成功」に終わることができた大きな要因のひとつには、『イオンホールでの開催』が挙げられると思います。この場をお借りして改めて感謝申し上げます。また、この「学生賞」の運営は、主催の建築関連4団体から出向していただいている実行委員、協賛企業のメンバーや歴代出展者メンバーなど、総勢50名を超える方々のボランティアによって成り立っています。特に今回は、「新米会長」であったが故に、実行委員の皆様には、例年以上の多大な協力をいただくことになってしまったことをお詫びするとともに、深く感謝申し上げます。

最後になりますが、次回も新たな気持ちで、そして記憶に残る「第31回」として開催できるよう、これまでを継承し、良いバランスで新旧混成しつつ、さらなる改善・進化に挑みたいと思います。

審査総評



千葉県建築学生賞協議会 審査委員長

中野 正也

評価の難しさと気づきの面白さ

公開審査形式となって今年で10回目を迎えた千葉県建築学生賞の審査会。私自身が審査員として参加させていただくのは5回目となりますが、いつも、「これだけの異なる大学・学科から選抜されてくる出展作品を同じ土俵で評価し優劣を決めるのは難しい、というかそもそも無理なのでは？」と思いながら審査しております。そんな無理を承知の状況の中でも、順位を付けて評価しなくてはいけないので、とりあえず自分なりに“ふたつの評価軸”を決めて審査に挑んでいます。

ひとつめは「その場所(状況や環境も含め)でしかできない提案なのかどうか」、ふたつ目は「あたらしいことにチャレンジしている提案なのか」。このふたつの点において、作品ごとに重み付けを変えながら判断するようにしています。根拠のはっきりしない、なんとなくの“個人的な共感”も多少は影響していることは否認ませんが、今回は審査委員長という立場でもあったため、できるだけその個人的好みの感覚は出さないよう、特に意識して審査を行いました。今年は7大学12学科から23作品の出展があり、おそらく過去最も多い学科数・作品数になったのではないかと思います。作品数が多くなった一方、全体的な印象としてはナイーブな作品が多く、力強く・インパクトのある作品という点ではやや物足りないという感じがしましたが、2011年の東日本大震災後の学生の反応、その後の2016年4月の熊本大震災に対する反応として振り返ってみ



ると至極当然で、むしろ学生として健全な傾向なのだ捉えています。

さて、公開審査全体については出展者含めオーディエンスの方々の評価に委ねさせていただくとして、個人的には充実して楽しい審査だったと感じております。学生の作品を評価する立場の審査員は、その見識や意見などに対し、「逆に学生やオーディエンスから厳しい目で評価されている」ということをそれぞれ意識しながら、公開の場で発言をしてくれました。特に昨年と比べると、今年はそれぞれ審査員が評価するポイントを明確にした発言が多かったように思います。その結果、審査員同士の評価や価値観の相違による議論が白熱しました。

特に8作品に絞り込む二次審査の段階では、予定よりかなり多くの時間を費やしてしまい、表彰式など後の進行スケジュールへの影響について、一部の関係者の方々にはご心配をおかけしたと思います。しかしながら、これこそが価値観の異なる審査員が集まる公開審査の醍醐味であり、良い審査ができた捉えております。また、審査の過程で多くの“発見や気づき”をいただけたのは、やはり公開審査ならではのことであり、心の中で「なるほど」とその面白さを堪能させていただきました。

さて、作品について少し触れておくと、全体の中で気になった作品は、今埜歩さんの「@街並玄関孔」と石井康平さんの「@振る舞いを紡ぐ-変わりつつある商店街の未来-」の2点。それから次点として小島帆南海さんの「@めんめを育てる-南海トラフ地震での津波に備える孤児院の提案-」でした。いずれも先に述べさせてい

ただいた視点で高く評価をしたのですが、これらは全て二次審査に残っていたので、多くの審査員からも同様に評価を受けた秀作なのだと思います。

『その場所でしかできないことなのかどうか』という点について、この3作品は全てその場所との丁寧な対話を経て作品につなげているのですが、その中で特に今埜歩さんの「@街並玄関孔」が、個人的には最も印象に残る作品でした。場所との対話で汲み取った事象を、空間の提案にまで昇華し展開することに取り組んだ唯一の作品だったのではないのでしょうか。また、『あたらしいことにチャレンジしているか』の観点においても高く評価できる作品でした（残念ながら三次審査の上位5作品には残れませんでした）。余談ですが、イベント終了後の搬出作業の時、この作品の巨大な模型が半分に分かれる姿見て、「この断面（模型）を見せていたら、ほかの審査員の気持ちを引き寄せられたかも!？」と、少し口惜しい気持ちを持ちました。

最後に、全ての出展作品は、それぞれ異なった着想から導き出した独自の素晴らしい提案であったと評価しています。ただ、審査当日にも伝えましたが、「この審査メンバーで、あえて選ぶとするならば」ということで選ばれたのが、今回の受賞作品だと思っています。楽しい審査をさせていただきありがとうございました。出展者の皆様の今後に期待したいと思います。これからも頑張ってください!

最優秀賞

JIA 全国大会出品

2018年6月23日に行われました
「JIA 全国学生卒業設計コンクール」にお
いて「1次審査通過者」となりました。



小島 帆南海

おじま ほなみ

千葉大学工学部都市環境システム学科

めんめを育てる

—南海トラフ地震での津波に備える孤児院の提案—

高知県にある栄喜漁村では自助を促す災害教訓「めんめばちばち」が子供たちに継承されていた。この言葉は、津波へのハード対策を望まない住民を100年周期で起こる南海地震から守ってきた。しかし、現在の栄喜は子供で溢れるかつての賑わいを失っており、「めんめばちばち」の消滅が危ぶまれると共に、住民の避難意識は薄れてきている。また、別の問題として、現在の日本では、親と離された孤児が信頼できる人との愛着形成がないことから精神的な自立ができていないことが問題となっていた。このような孤児を「栄喜」という集落での人のつながりの中で育てることを提案する。これにより、孤児の自立と栄喜の防災意識を取り戻す。

見た瞬間から柔らかな色使いで丁寧に描かれた計画地の状況やイラストに目を奪われるとても綺麗な作品である。高知県の漁村を伝える途絶えがちな親から子への自助の言葉「めんめばちばち」を伝承すべく社会問題化している児童養護施設不足に替わる津波に耐える孤児院の提案である。こどもの生活空間となるめんめの家は高学年が低学年を見守れる配置構成として1~2階の吹き抜けを通して内部様子がうかがえるよう工夫されている。北向きの個室の配慮と、津波発生時には港からこの施設の避難ルート確保が欲しいところではある。みんなの家はオープンキッチンを中心としたプランで子ども、職員、住民が食事を通じて交流が図れる場として設計され南の眺望や明るい通路を軸に各居室を繋げるゾーニングとなっておりここでも交流をメインに考えられている。

防災機能として津波から守る構造配慮があり一見すると木造では津波に耐えうるのが難しいように思えるが、柱脚をステンレス支柱土留めにロックアンカーを施工しており対策を講じているのが伺える。

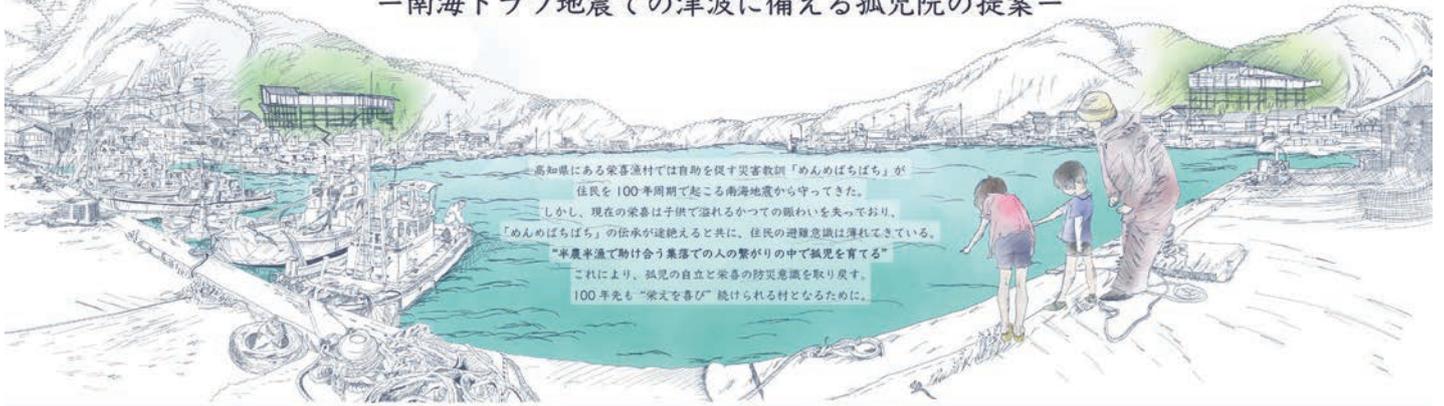
めんめの家とみんなの家を250mの水平近い距離に対峙させ視覚的に互いにそこに生きる人々の生活がわかるように計画されているところが絶妙で適度な距離感となっている。ふたつの建物の行き来により子どもと職員、住民がその度に挨拶をしこの地域に溶け込んでいく様子が想像できる。家族を離れひとり寂しい子どもと人口が減り衰退していく漁村、自助から共助へ地域コミュニティを活性化させる提案を建築として考えられているところが素晴らしく秀逸な作品である。



審査員：蒲生 良隆

めんめを育てる

—南海トラフ地震での津波に備える孤児院の提案—



高知県にある築港漁村では自助を促す災害教訓「めんめばちばち」が住民を100年周期で起こる南海地震から守ってきた。しかし、現在の家は子供で溢れるかつての賑わいを失っており、「めんめばちばち」の伝承が途絶えると共に、住民の避難意識は薄れてきている。「半農半漁で助け合い兼落着きの人の繋がりの中で孤児を育てる」これにより、孤児の自立と家畜の防災意識を取り戻す。100年先も「家畜を喜び」続けられる村となるために。

「めんめばちばち」から見る築港地区 敷地分析

めんめばちばち
高知県高土小笠原町築港地区において、観から手へ継承されてきた災害教訓
「津波が来たら舟の（舟）へラババと逃げなさい」
「自分のことは自分でせよ」

半農半漁で自立した生活を送ってきた築港地区。住民は「自然災害にハードで対抗しても無駄」と考え、築港地区が現在の南海地震を乗り越えた一要因として、自然の教訓「めんめばちばち」の存在が挙げられる。以前は村全体で子供を見守ってきた築港地区だが、現在は子供がいないために「めんめばちばち」の伝承が途絶えており、住民からは「生き残っても振り身の代りがない」といった自助意識の低下が図られる。また、今後発生するとされる南海トラフ地震では、最大15mの津波浸水高が予測されている。

精神的自立ができない孤児の現状 - 社会問題 -

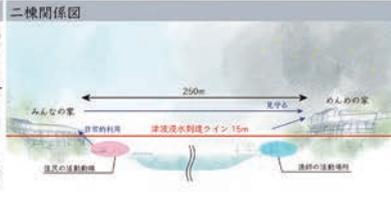
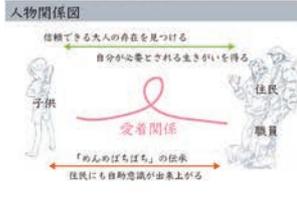
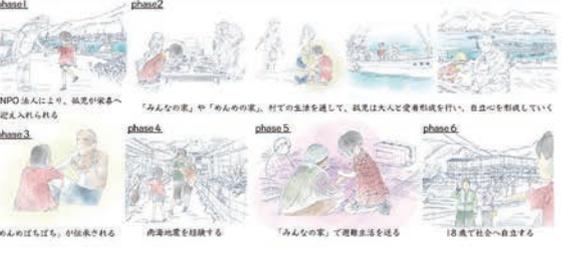
近年、児童養護施設に入居する子供の理由として多いのが親からの虐待である。親から虐待を受けられなかった子供は養育者と1対1の関係が理想だが、現在の児童養護施設職員は一人当たり18人の子供の面倒を見る業務である。このため虐待できる大人との愛情形成が上手くできず、基礎的生活能力や仕事に対する意欲が低い、自立心が形成されていない大人になることが多く見られる。
孤児が自立するためには、信頼できる大人との愛情形成と自己管理能力が必要とされる。

築港で築かれる「自助意識」と「自立心」- 提案 -

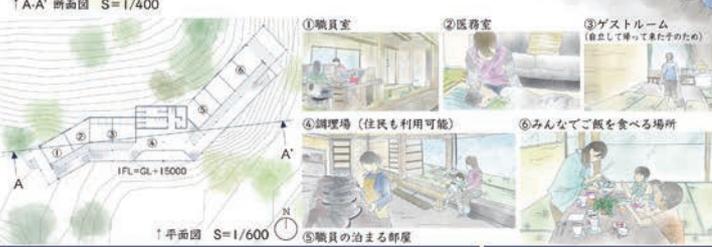
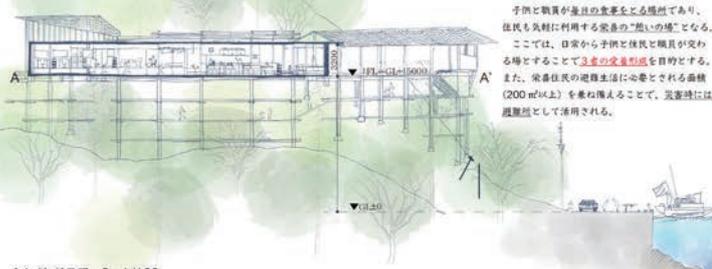
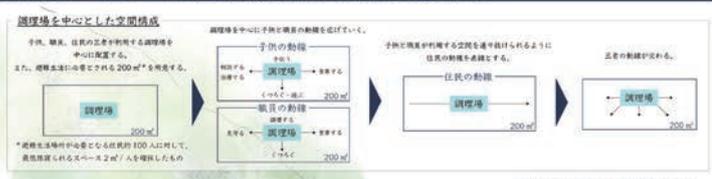
築港地区に「自助意識」、施設に「自立心」を形成するために
①住民と職員と子供が愛情関係を築く場を
②子供が自己管理能力を身につける場を設計する。
また、③は災害時に必要な物資を備えている
避難生活場所として機能する。

①みんなの家
用途 食事する 泊れる くらつろぐ 子供 相談する 遊ぶ etc.
②めんめの家
用途 洗濯する 勉強する 掃除する 入浴する 遊ぶ etc.
築港地区の時間差別行動と滞在場所の分析を基に、
①期間に住民が利用する動線上に配置
②深夜に活動する滞りの滞在場所付近に配置

築港での孤児の成長



みんなの家 - 常時：愛着形成の場 ⇨ 非常時：避難生活場所 -



アクセス方法



非常時の利用法



めんめの家 - 常時：孤児の自立心を育てる場 ⇨ 非常時：一時避難場所 -



懸け造構造



優秀賞

JIA 全国大会出品

2018年6月23日に行われました
「JIA 全国学生卒業設計コンクール」にお
いて「1次審査通過者」となりました。



小野 詩織

おの しおり

日本大学生産工学部建築工学科

・・・テミル。

人生をリセットする探索と思想の水族館

人間は、試行錯誤しながら生きていく中で、原点回避すること
で新たな道を開いている。新しい体験を行うことで自分を
探し人生を見つめなおす空間を提案する。

敷地となる、福島県いわき市にある塩屋崎灯台は希望の光を
照らしつづけている。提案するものは、同じくいわき市に“ア
クアマリンふくしま”内の「生まれると死ぬ」のテーマを抽
出して構成される水族館の分館とする。

また、この水族館は探索空間と思想空間で構成されている。
迷路のように上下に入り組んだ探索空間で、人間は孤独へと
引き込まれ、8つの思想空間で、「視覚・聴覚・嗅覚・触覚」
をとぎすますことで、現代社会に対してストレスを持つ来館
者の心をリセットさせる。

本案は私が最後まで最優秀に相応しいとして押した案である。審査経過のなかで高い評価コメントをその都度発信していたので、ここではあえて厳しい意見を述べ、作者のさらなる成長を望むところだ。まず、人間の人生と心の問題を根底から見つめ直すという、とてつもない奥深い空間に挑戦しているながら、「・・・テミル」というギャップのあるネーミングだ。試行錯誤の行動としてあえて狙っているとも言えるが、私には、提案の深層深いグレーの表現とも同調しつつ、もっと詩的な言葉を見つけることも出来たのではないかと思う。

また、福島県いわき市の選定、塩屋崎灯台の保存再生、水族館という探索空間の設定は的確だと思うが、果たして、

「水槽のなかに社会がある」のだろうか。すべてが社会の縮図であるから、間違っていないが、「建築のなかに社会がある」という方向に持っていく方法もあったのではないか。さらにその中で迷路に漂わせるのではなく、建築側から、一定の秩序と誘導が欲しかった。迷路に入り組んだ探索空間の中で、見つめ直す空間を見つけられずに、さらなる孤独へと引き込まれ（つまり、リセットするどころか）よりストレスを強化してしまうというパラドックスもあり得る。

作者は、建築が、意図とは違うネガティブな方向に陥る可能性を含めて、再度見つめ直し、今後、さらなる洞察を深めて、設計に取り組んで欲しい。



審査員：鳴海 雅人

優秀賞

JIA 全国大会出品



石井 康平

いしい こうへい

千葉大学工学部建築学科

振る舞いを紡ぐ

—変わりつつある商店街の未来—

テーマパークのような観光地化が進む埼玉県川越市一番街商店街。かつて城下町として賑わい、住みながら商っていた商業の構造は変わりつつあり、外部資本店舗が参入しつつある。変わりつつある商業の構造に対応した街区の構造が必要であると考えられる。

町の賑わいから取り残された住民と、外部資本、観光客の関係を再編し、住民の生活と観光が寄り添う町の在り方を提案する。歴史的町並みにおける街区内部を改修し、裏通り、宿泊施設、デッキが住民と観光客の振る舞いを紡ぎ、新たな町の在り方として輝き続ける。

表層的な評価が先行し、テーマパーク化しつつある川越市一番街商店街。そんな商店街のありかたに違和感を感じ、本来の街の人々の暮らしを通りに表出させることによって、魅力的でかつ持続性ある商店街の活性化手法を提案したユニークな良作である。通りに面する店舗裏手に広がる「暮らしの空間」に観光客を招き入れるため、通り抜け可能な通路を店舗内に整備し、かつ暮らし空間に同居させるように宿泊施設を設けることによって、“地元の人達”と“よそも”の交流を促すことを意図している。その交流は、観光による経済活性のみならず、

川越の人々の自己成長や地域の繋がりを強固にするに違いない。魅力的な商店街の源は「人」、その指摘は正しいと感じた。



審査員：関谷 和則



01. 敷地：埼玉県川越市一番街商店街

01-1. 敷地概要

川越一番街は城下町その歴史の遺構が残る。現在も観光地として賑わう商店街である。急激な観光地化が進んだことによるテーマパーク化が著しく、南北に並ぶお店の姿は変わりつつある。表の豪華絢爛な装飾と裏側の生活の機能が残る歴史的居住空間という二面性を持つ。そんな一番街商店街の歴史と現在の生活と観光の関係に注目し、かつて賑わいとともにあつた住民の生活と観光という賑わいを再構築する必要があると考えた。

01-2. 商家の衰退と外部資本の参入

かつての一番街一帯は、外部資本不足や高齢化などが原因で減少している。店舗分はマンションに貸し出され、外部資本が参入しつづらり、今後、外部資本店舗の数は増え続けると考えられる。

01-3. 商業形態の変化に伴う表裏の分析

かつて商家は住みながら商っていたが、外部資本にテナントとして貸し出すことで、都市構造が変わり、表の商店街の賑わいと裏側の居住空間が分離していった。店舗と居住空間は使用する主体が異なることにより、見えないうちで互いに遠くなる。

01-4. 問題提起

01-4-1. 表層的な保存と線的な観光の場

線的な賑わいの広がりでなく、裏側を巻き込んで的に広がっていくことで、歴史的空間の本質を捉えた観光地へと転換する必要があるのではないかと。

01-4-2. 住民の生活と商業の乖離

外部資本が参入し、変わりつつある街区構造に新たな関係性を創り出すことで、生活と商業の関係を再構築し町全体が一体となって歴史の遺構を後世に残すことができるのではないかと。

①住民の生活と商業の乖離が起こる表裏の境界に、住民と外部資本の関係を再構築し、**表裏をつなぐ余白が両者の振る舞いを許容する裏通り**

②空き家が増え衰退が起こる居住空間に、住民と観光客の新たな関係性を提案し、**街区全体へと賑わいが広がる宿泊施設とデッキ**

↓

二つの提案が、住民と観光客、外部資本の新たな関係性を生み出し、町全体が一体となって歴史の遺構を後世に残すための物語を描く

全体アインメイト

03. 建築序論

03-1. 平面ダイヤグラム

外部資本の参入によって分断されている店舗を改修し、表と裏を繋ぐような表裏の接続点を設ける。

表裏の境界部を減築し、店舗と住宅の振る舞いを許容する余白としての裏通りとハイパックススペースを計画する。

居住空間内部へとデッキが伸び、空き家やフロアを宿泊施設へと転換する。デッキが賑わいを紡ぎ、生活と観光が共存する。

03-2. 断面ダイヤグラム

表通りと同じレベルで表裏の接続を通し、一階の店舗はアプローチャ空間へと変える。

表裏の境界部を減築し、一階レベルに住民と外部資本を許容する余白としての裏通りを設ける。住民と外部資本の振る舞いが寄り、セミプライベート空間となる。

インフラとしてのデッキが居住空間内部まで伸び、観光客の動線が二階レベルで立体的に構成される。

03-3. 部分構成

「裏側の空間性を読み取り再構築する」

既存化した空間要素を、生活と観光が共存するように再構築する。

03-4. 既存平面図

04. 1F 平面図



06. 2F 平面図



05. 住民と外部資本の振る舞いを許容する裏通り

05-1. 余白が振る舞いを許容する

裏通りへと振る舞いが溢れる

05-2. 環境装置としてのグライド

既存の密集した町家構造を減築しグライドが採光、通風を確保する。風は店舗内、住宅内を抜けて熱によって上昇気流を生む。

07. 賑わいが街区全体へと広がる宿泊施設とデッキ

07-1. 空き家の解体とデッキを許容する空間

町家スタイルを残しつつ解体しデッキを許容する

07-2. 振る舞いの立体的交差

張り出したデッキが向かい合う

C-C' 断面図

05-3. 裏通りはセミプライベートな空間へ

バックヤードが裏通りへ拡張

商店街、対面しつながらプライベートな工房

木部と通風を確保するデッキスペース

既存の建物を解体し「アトリエ」が生活空間の一部に

A-A' 断面図

B-B' 断面図

07-3. 住民と観光客が寄り添う町へ

会所的な庭に宿泊施設、住宅、工房の賑わいが表出

店舗一階部分から裏側部分へと階段でアプローチャする

中庭が観光客と一階の住民を関係的に繋ぐ

特別賞

市民賞

なの花賞



山名 美月

やまな みづき

東京理科大学理工学部建築学科



月と海のリズムと呼応する助産院

新月・満月のとき大潮は起こり、それは出産と必然的なつながりをもつ。宇宙のリズムに身を任せ、人間がもつ本来の自然のリズムを取り戻す空間を演出する。

宇宙のリズム

月の満ち欠け



月の満ち欠けは地球と太陽の位置関係によって決まる。月自ら光る天体ではなく太陽の光を反射して輝き、新月→上弦の月→満月→下弦の月と見かけの形が日々変化していく。周期は29.5日。

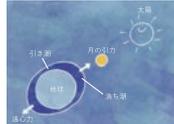
自然のリズム

月と生命の関係



月の満ち欠けのサイクルは女性の月経のサイクルと同じで、妊娠や出産に影響する。新月・満月のときに出産が多く、助産院では月の満ち欠けカレンダーを参考にお産が行われる。

海の満ち引き



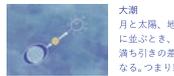
海の満ち引きは月と太陽の引力によって起こる。太陽は月よりもずっと遠いところにあるため、海の満ち引きは月の引力が最も影響する。月が近い海では、月に引き寄せられて海水が盛り上がり満ち潮に。反対側にある海は引き寄せられる力が弱くなるため、海水が取り残され満ち潮に。その間にあたる海は海水がへるので引き潮に。これは1日に2回、宇宙のリズムに沿って発生する。

海と生命の関係

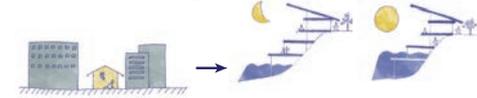


1分間に深呼吸する回数 18-人間の1分間の呼吸数
36=平均体温
72=平常時の心臓の脈拍数
144=平常時の血圧の範囲
288=赤ちゃんがお母さんの胎内にいる日数

人間と海のリズムには奥深い関係があり、海を感じるとリラックスするのは必然的。



提案1：自然のリズム × 助産院



現代社会は自然のリズムとかけ離れた生活。最も自然のリズムとのつながりを大切にするべき助産院。月の満ち欠け、海の満ち引きを取り入れた空間を創出。

提案2：建築 × 助産院

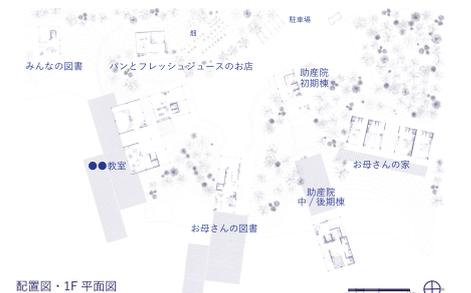


助産院と自宅の行き来。1日3時間の散歩が必要とされる妊婦さんだが、街を歩き回るのは心身ともにしんどい。助産院建築そのものが妊婦さんに適した運動をアワードする。



敷地

敷地は愛媛県西条市の海沿い。穏やかな瀬戸内海と山に囲まれたのどかな敷地。計画助産院と連携する総合病院は車で10分程のところにある。



配置図・1F平面図

月と海のリズムと呼応する助産院

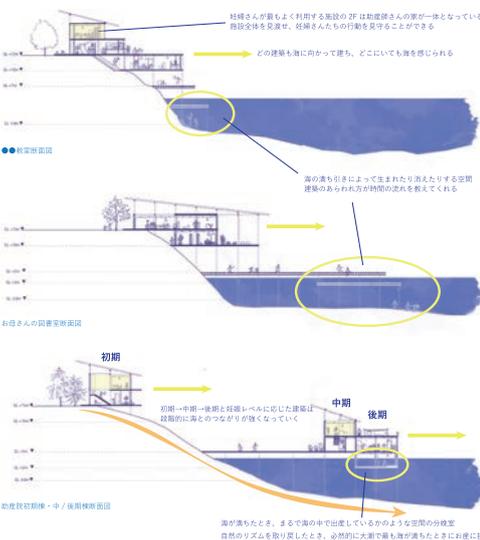
新月・満月のとき大潮は起こり、それは出産と必然的なつながりを持つ。

助産院での出産は自然分娩が主流で、お母さんが持つ本来の自然のリズムで赤ちゃんを産む。しかし、現代社会の中では自然のリズムとかけ離れた生活がなされ、自然なお産が行われているとは言えない。

女性が赤ちゃんを産むというこの神秘的な時間を、建築によってより魅力的なものにしたい。宇宙のリズムに身を任せ、人間が持つ本来の自然のリズムを取り戻せる空間を考える。具体的に、宇宙のリズムである月の満ち欠け・海の満ち引きを取り入れた空間の創出、さらに助産院建築そのものが妊婦さんに適した運動をアフォードする空間を提案する。

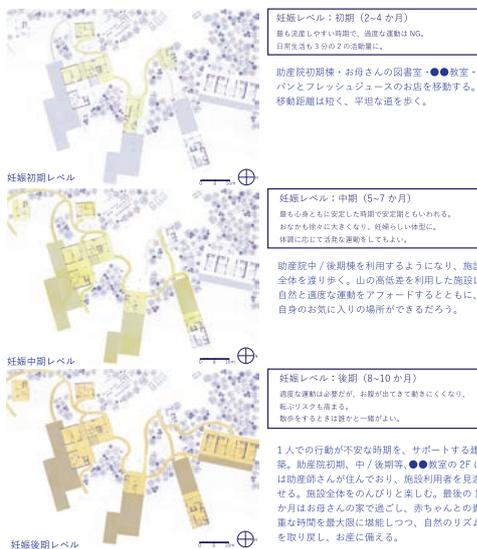
月と海のリズムによって変化する建築

月の満ち欠け、海の満ち引きによって生まれる建築空間は刻々と変化する。建築が時の流れを知らせるとともに、自然のリズムを取り戻すきっかけとなる。

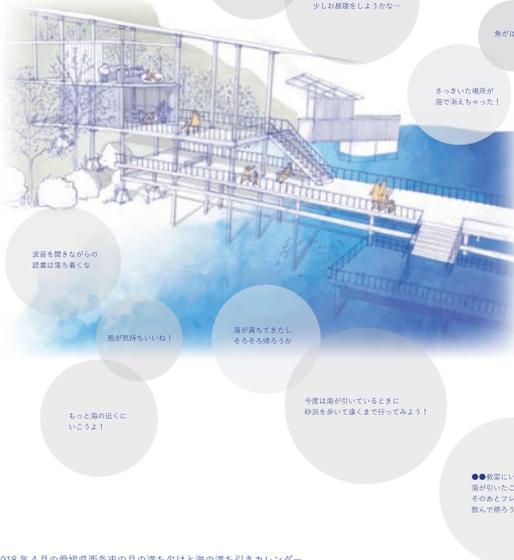


妊娠レベルに適した運動量をアフォードする建築

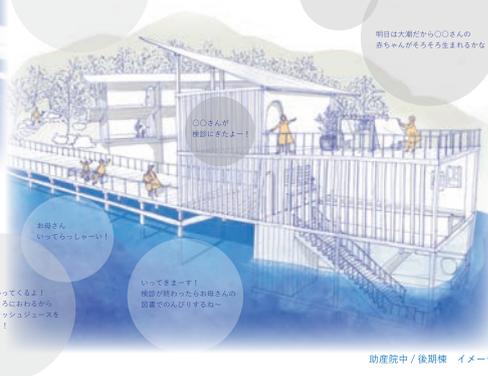
妊婦さんが自身の体調や妊娠時期に合った建築を利用する。自身に必要な建築を渡り歩いたとき、それは自然と適度な運動量をカバーし、自然のリズムを取り戻すきっかけとなる。



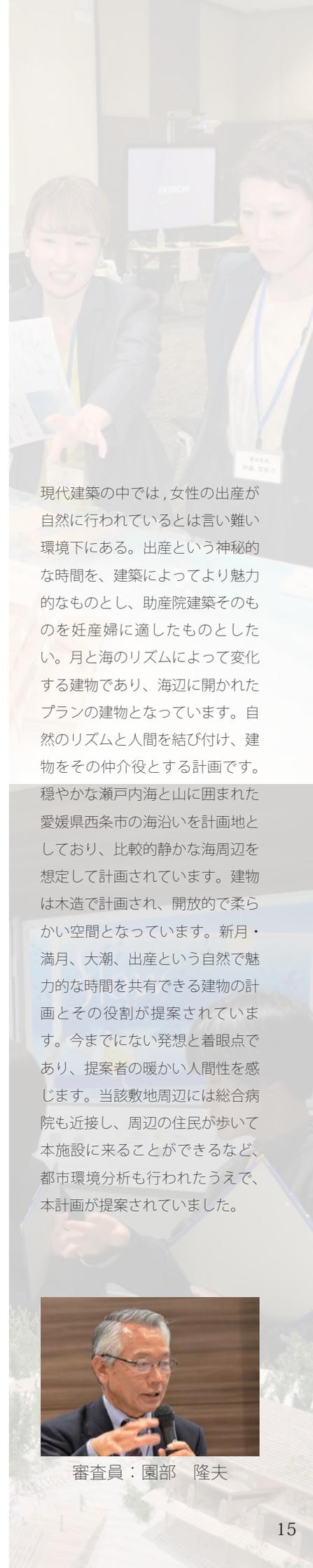
お母さんの図書 イメージ



女性が赤ちゃんを育み・産むというこの神秘的な時間を月の満ち欠け・海の満ち引きの自然のリズムに合った建築がより魅力的なものにしてくれるだろう



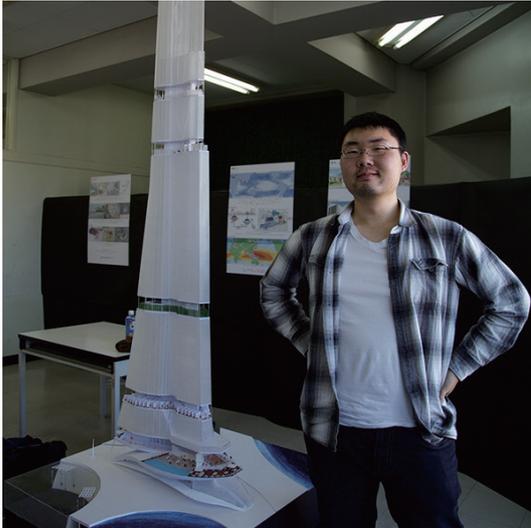
2018年4月の愛媛県西条市の月の満ち欠けと海の満ち引きカレンダー



審査員：園部 隆夫



特別賞



黄 起範

ふぁん りの

日本大学理工学部海洋建築工学科

塵海の廻都

海洋ごみで成長する洋上都市の提案

日本ではあまり取り沙汰されない海洋のプラスチック汚染問題
その実情は深刻で、太陽光と波浪により劣化・粉碎されたマイクロプラスチックが生態系に取り込まれることで生態系の下位から上位へと悪影響は蓄積されていく。

つまり我々の食卓にも上がっているということだ。

これは他人事ではなく、我々の身近に迫った危機の話である。
海洋のプラスチック汚染は深刻で、太平洋だけで1億トンが漂っているという。

しかし見方を変えれば海洋を漂うプラスチックごみは資源として見ることもできる。

その資源をもとに今後普及するであろう3Dプリンターと海上ならでの環境から建築を考える。

ゴミ山から金鉱山へ、海洋ごみから成り立つ農業都市を提案する。

海に浮遊するプラスチックゴミで、海上都市をつくらうというグローバルな視点で取組まれた非常にユニークな作品である。集められたゴミを材料に、海上に構台を構築し、3Dプリンターによって500mの超高層を構築してゆく。夢物語ではあるが、浮力と海水を利用したビル建設プロセスが綿密に計画されており、数十年後には実現できるのでは、とワクワクさせられるロジックが展開されている。

超高層ビルの建つ人口島全体が風を受ける風車の羽の形状とし、海上ながら風力で発電を可能にしたり、養殖場を併設したりと、人口爆発や食料の奪い合いが起きると言われる未来を変えようとする意志とデザインが、素晴らしい。



審査員：関谷 和則



小室 昂久

こむろ たかひさ

日本大学生産工学部建築工学科

烈風のマディーナ

大地を纏い広がる街

現代の都市像について思う。高度な建築流通システムのおかげで世界のどこでもガラスとコンクリートの建物をつくるのが可能となった、場所の個性を失い均質化する都市像に、人々は果たして魅力を感じるだろうか。提案の敷地は砂漠という特殊な地域、大地が剥き出しのこの土地に風景を纏う建築を提案する。多面体の建物が繋がりながら増えていくことで地表面の上にメッシュ状の構造物を作る。このメッシュが砂漠の地表に新たな生活空間を作るきっかけになると考えた。斜めの壁は砂を纏うことで原風景の中に溶け込み、穴や影の形が変わることで、この場所が刻んだ時間の流れを映し出す、「砂漠の力を受け入れ、新たな都市像を創る建築・都市-マディーナ-」の提案。

その環境にある「風景を纏う」という発想や着眼点には大変関心が高く、興味深いものがあります。こうした特異な地域に見合う建築の形式を発見し、提案することは何かしら今までにない新しいカタチが生まれることも多いと思います。メッシュ状のボリュームが積み上がり空間を形成していく、さらに、ガラスやコンクリートから離れ、現地で集積し、構築できる砂を外壁として扱うことで、その環境に適したデザインを創り出そうとしたところは評価したいし、デザイン力を感じます。ただ、もう少し掘り下げて欲しかったのは、そこにいる人たちは、

この環境に満足するのであろうか？この地域で抱える社会的な問題がこの施設により、解決の糸口につながるであろうか？、もう一步、何かに気づき、その地域の問題を解決出来、ここで過ごす人々が喜んで、利用できる建築となることができたら、上位の評価を得れる総合的なデザイン力、情熱、プレゼン力であったに違いなかったと思います。



審査員：磯野 智由

烈風のマディーナ - 大地を纏い広がる街 -

設計主旨

現代の都市像について、高度な建築流通システムのおかげで世界のどこでもガラスとコンクリートの建物をつくる事が可能となった。場所の個性を失い均質化する都市像に、人は呆れて魅力を感じなくなる。

建築の意地は砂漠という特殊な地域、大地が崩れ出したこの土地に風を纏う建築を提案する。多面体の建物が集まりあがることで地表の上にメッシュ状の建造物を作る。このメッシュが砂漠の地表に新たな生活空間を作るきっかけになること。

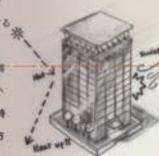
崩れかけた砂を纏うことで烈風の中に取り込み、穴や部の形が変わること、この場所が長い時間の流れを映し出す。

「砂漠の力を受け入れ、新たな都市像を創る建築 - 都市・マディーナ -」の構築。

① 都市像の在り方とは・・・

高度な流通システムのおかげで、どこでも同じ建築が建てることができる。

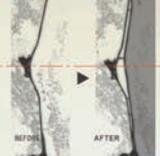
土地のアイデンティティは希薄し、環境への影響も大きい建築は場所と密接な関係を持ち、その土地に適した建ち方を考えるべきだと考える。



② 人口増加と運河増設、新都市計画

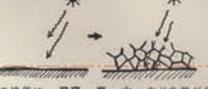
第2スエズ運河の完成にともない運河沿いには都市をつくる計画ができる。

しかし計画される街はガラスやコンクリートを使ったジュネリクシティばかり・・・



③ 砂漠の脅威から空間を守る手法

人類最初の建築は、洞窟、崖、山、など自然が作る凹凸や横穴を利用したシェルターであった。アイデアとして日差しや強風を遮るメッシュ状の地盤が地表面に生活環境をつくるきっかけになると考えた。



④ 大地を纏う建築の提案 IDEA

外部に対して砂漠の砂を付着させる建築は住空間を日差しや砂嵐から守る。地面と同じテクスチャは原風景に溶け込む。現地材の自然素材からなる建築は時間と共に色や形を変え、時代の伝達装置になる。



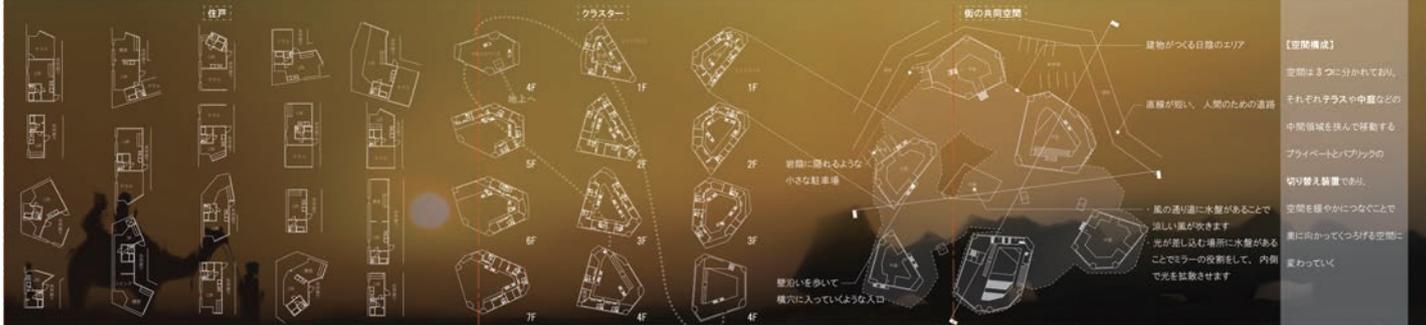
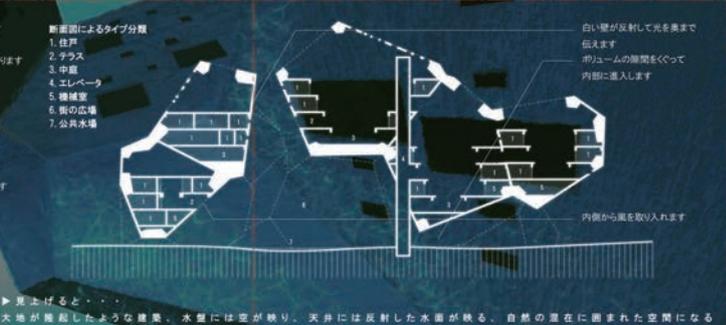
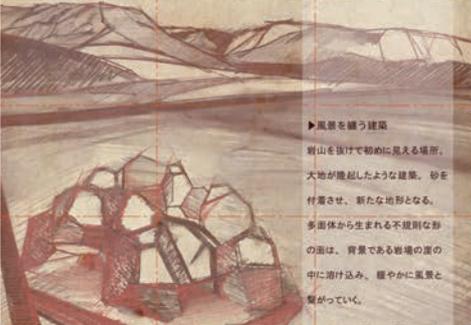
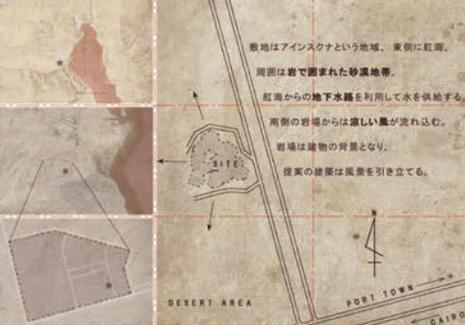
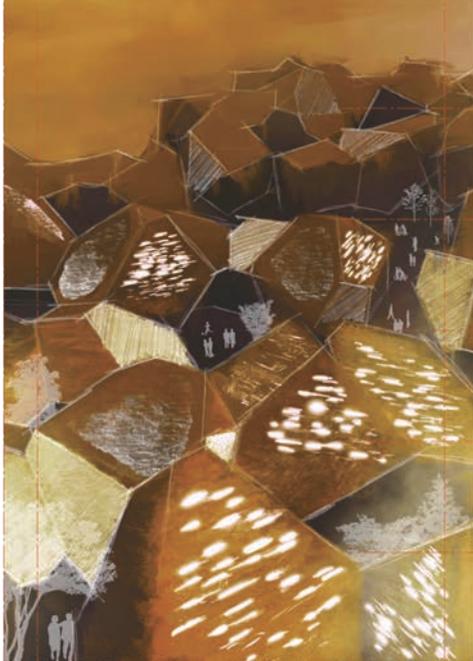
⑤ 建物ではなく、都市として成長する

鉄骨のフレーム
すり鉢状のクラスター
斜めに増えながら成長する



⑥ 強烈な光や風をフィルターを通して取り入れる

砂を集める壁
風は内側から取り入れ、光は間接光で取り入れる





近藤 俊暢

こんどう としのぶ

東京電機大学情報環境学部情報環境学科

人間の棲

無数の空間的アフォーダンスを含む地形

近年の都市空間では、機能を優先した合理化や最適化によって、空間の厚みがなくなっているように感じる。機能を優先した空間は、人にとって使いやすく、分かりやすい。一方、無駄や曖昧さなどが排除されたため用途と生活が一对一で対応する空間がありふれている。そのため、計画された用途を超えた活動のためにスクラップ&ビルドが繰り返されているのではないだろうか。そこで、あらゆる場所に用途が張り付けられた都市空間に用途が決まっていまい曖昧な空間をデザインする。“すでにそこにある”という地形的な建築には様々な用途が現れ、また、スクラップ&ビルドの輪から外れることで空間的、時間的に奥行きを備える可能性に満ちた建築を目指す。

「機能を優先した合理化や最適化によって、空間の厚みがなくなっているように感じる」という作者の問題意識は正しい。私もそう思う。しかし、その課題の裏返しの回答、つまりその厚みの出し方、厚みのある空間のつくり方に、あたかも結論ありき(最終形ありき)の焦りを感じる。特に、空間構成や形を方向づける初期段階において、「内側に外側を割り込ませる操作」そして、「(尖塔のような)起伏の強調とその重なり」となり、いわば薄い根拠で、すべての方向を定めてしまったのは早々な感じがした。その結果、そこに立ちあがった建築は、ガラス破片が散りばめられた

ような造型となり、緊張状態が続き、わたしには、そこに住む人のカオスと混乱と、特に子供からお年寄りまで、安心やセキュリティやプライバシーとは対極の距離感を感じた。快適で優しく、親近感が沸く豊かな奥行きと厚みがある建築とは決して言えない。多様なプログラムの創出とその形態操作のトレーニングならば、やむを得ない。作者のこれからの成長を願い、あえて厳しい意見を述べたが、「空間的、時間的に奥行きを備える可能性に満ちた建築」とはどのような空間の質を持つのか、今の時代に照らして、さらなる追求を願うものである。



審査員：鳴海 雅人

人間の棲 ー無数の空間的アフォーダンスを含む地形ー



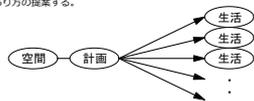
1.都市空間の構造

近年の都市や建築空間は合理化や最適化によって、空間的な厚みを感じづらくなっているように思う。合理化・最適化された空間は、人にとって理解しやすく、生産性の高い、用途に対して分かりやすい効果が見込まれる。そのため、かつての地形は平に均され、空間機能をはっきりと分化し、空間機能が整理整頓されている。その結果、都市空間は単純なものになりがちであり、中でもスックラップ&ビルドのサイクルによる合理化・最適化は用途と空間が1対1の関係になりがちであり、空間をさらに単純化する。



3.提案

“すでにそこにある”空間の中で、その場所性や特徴からプログラムが決定していく建築を提案する。このような建築には様々なプログラムが現れ、空間的奥行きが生まれる。そしてスックラップ&ビルドの軸を外れることで、時間的奥行きを積み重ねていく。無数の空間的アフォーダンスを含む空間の提案から、建築の新たなあり方の提案する。



4.敷地

設定した敷地は東京都港区の埋め立て地域である。周辺にはオフィスビルやホテル、マンション、飲食店等が建ち並ぶ。このような平坦で地形のない、そして多機能な人工的な環境の中に、地形のように存在し得る建築を考えることにする。



2.目標とする空間

空間に厚みを持ち、様々な活動を許容する建築を目指す。それは、空間に曖昧さを内包し、多様性・柔軟性に富む建築である。あらゆる空間に用途が振り付けられた都市の空間に空っぽな空間を生み出す。森や洞窟のように空間的奥行きと時間的奥行きを持ち、可能性に満ちた豊かな空間を目指す。

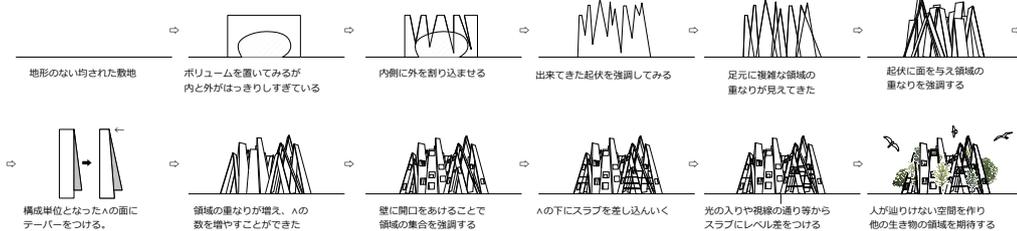
空間的奥行き + 時間的奥行き = 目標の空間

- プログラムの多様さ
領域の集合
複雑・動線
エレメント
- その場の記憶
過去・未来の気配
変化・不変性

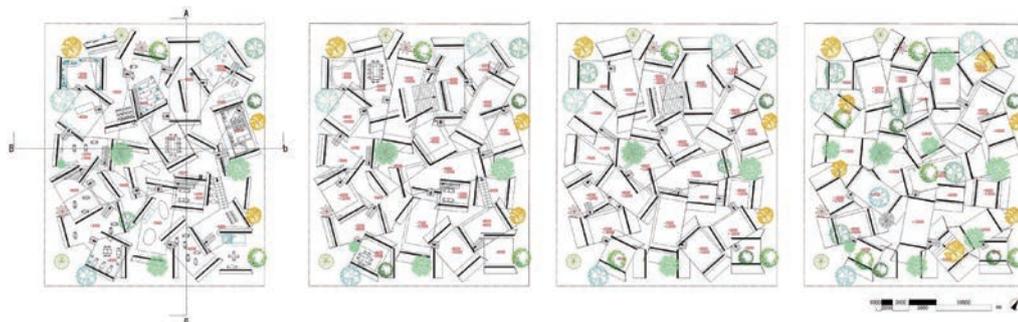


森や洞窟のような自然の空間には空間的奥行きと時間的奥行きが備わっているため空間に厚みが生み出ていると考える。また、廃墟のような空間にも時間的奥行きに加えて空間的奥行きを感じることができ。

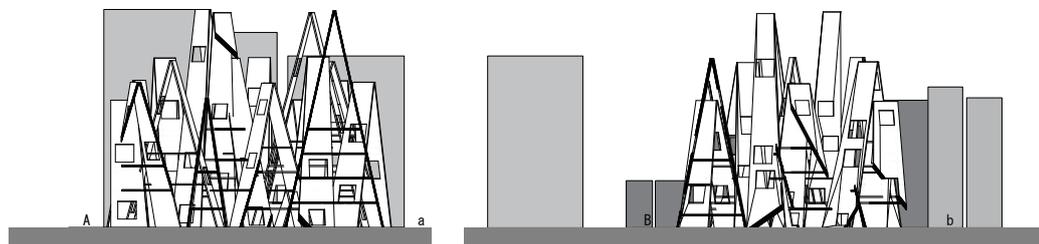
5.ダイアグラム

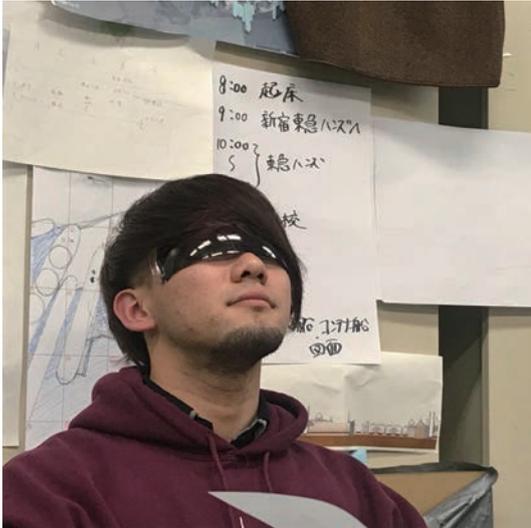


6.平面図



7.断面図





赤堀 厚史

あかぼり あつし

日本大学理工学部海洋建築工学科

新都の船壁

バングラデシュにおける新たな複合施設の提案

南アジアに位置するバングラデシュは自然災害大国であり、多くの被害を受けている。特にサイクロンと洪水は被害が甚大であり土地が削られ道がなくなるという事態が引き起こされている。また、同国は国土の半分以上が海拔 5m 以下であり海面上昇による被害も著しい。こうした被害に対し同国の防災管理は整備が十分に施されていないのが現状である。さらに、同国には世界各国から集まる廃船の解体場がある。解体は国で行われているビジネスであり、今後も廃船の量は増え続けると予想される。本提案では防災を目的に考えると同時に廃船を利用した豊かな生活の場としての複合施設を提案する。

発展途上国における廃船の解体という負の行為に着目し、それを新たな社会資産に変換する提案である。

環境的にも安全性においても大きな問題を抱えた廃船作業は、貧しい社会であるがゆえに成立するマイナス面である。一方、解体途中の廃船の美しさ、特にその構造美は印象的である。この正と負の同時存在に気づいたことが、この卒業設計につながったのであれば、その感性は大事に育てて欲しいと思う。

また、世界中の海を動きまわっていた船がその生命を終え、大地に固定され、新たな都市機能を与えられた姿を書き込

んだ配置図は、建築や土木的な表現を越えた、作者の獨創性を強く感じさせる。

しかしながら、廃船を、新たな堤防・シェルターであり、汚染水の浄化機能を持つ都市建築に昇華させるには、さらに深く考えデザインすることが重要である。その検討に時間をかけて、より深化した提案を見せて欲しかった。



審査員：安田 俊也

■ 建築計画 コンテナ船：詳細断面図

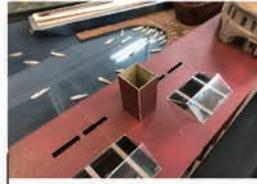
■ 美術館

使い古された機械が展示された美術館



■ 煙突

船内に滞留した熱エネルギーを排出する役割



■ 礼拝堂

バンガラディッシュ伝統建築様式であるモスクの大空間を内包する礼拝堂



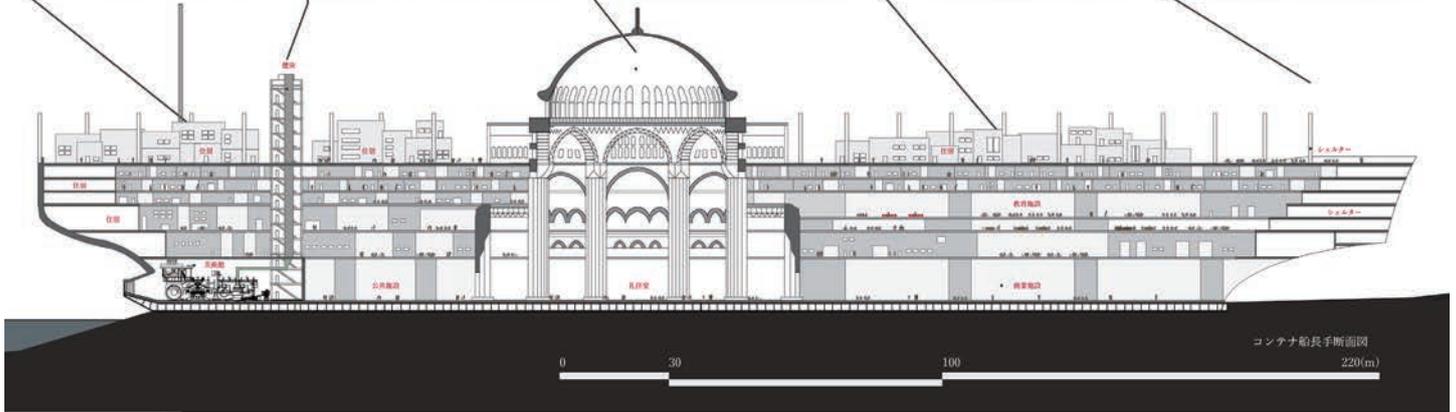
■ 商店街

人々の生活や営みが混ざり合う商業空間



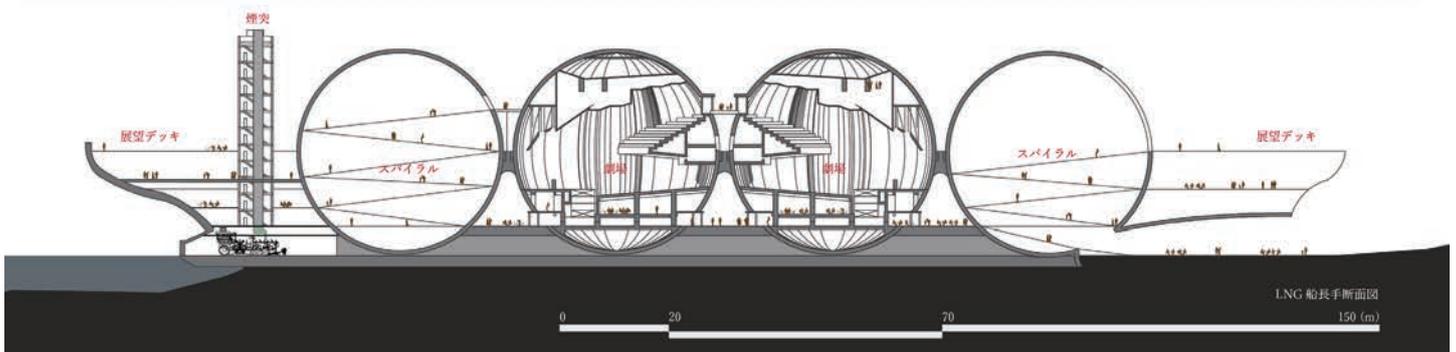
■ シェルター

通常時は教育施設として利用し、非常時にシェルターとして使用される



コンテナ船長手断面図
220(m)

■ 建築計画 LNG 船：詳細断面図



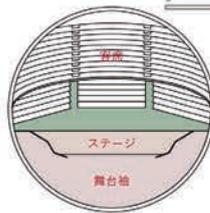
LNG 船長手断面図
150(m)

■ 劇場：平面図

液体ガスタンクを再利用した円形型の劇場空間
タンク同士の隙間を利用した裏方スペース



LNG 船平面図 S=1/250

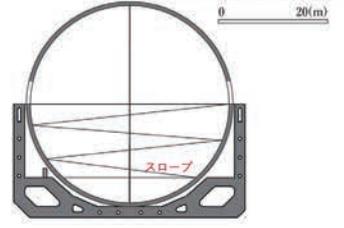


■ スパイラル：断面図

地上から甲板へ繋ぐ螺旋状のスロープ
円型に切り取った開口部が大きく光を取り入れる



LNG 船縦手断面図 S=1/250



■ 建築計画 シーンバース&模型写真





下泉 浩太

しもいずみ こうた

千葉大学工学部都市環境システム学科

Seamless Market

ベッタウンに開かれた卸売市場の提案

これまで都市の裏側で私たちの食の流通を支えて来た卸売市場であるが、近年の流通構造の変化や食嗜好の変化によってその必要性（存在意義）が問われ始めた。

地元で過ごすことの少なくなり地域への愛着が少なくなった人々の多いベッタウン船橋において、限られた人が、限られた時間だけ利用する「閉ざされた」空間である卸売市場を、いつでも、だれでも利用できる「開かれた」空間とすることで卸売市場を都市の裏側から引っ張り出し新たな価値を生み出す。

船橋駅から徒歩10分の既存公共卸売市場を、市民にもっと開かれた場にするべきと計画された建替え提案である。卸売市場全体を「丘」と捉え、半地下に卸売市場を配置することにより、レベル差を活かした海老川と連続する良質な緑化空間を創出している。

市民農園を設け、食を通じた協業を通じて市民間交流を活性化させるアイデアは、東京近郊で起こっている人々

の繋がり減少を是正する策と感心した。市場の大屋根のデザインを工夫し、丘との連続性がより強化されると、さらに魅力的な市民空間が展開できると感じた。



審査員：関谷 和則

Seamless Market

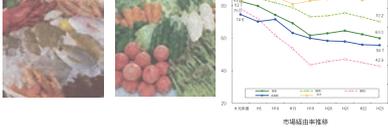
—ベッドタウンに開かれた卸売市場の提案—

これまで都市の裏側で私たちの食の流通を支えて来た卸売市場であるが、近年の流通構造の変化や嗜好の変化によってその必要性が問われ始めた。地元で過ごすことの少なくなり地域への愛着が少なくなった人々の多いベッドタウン船橋において、限られた人が、限られた時間だけ利用する「閉ざされた」空間である卸売市場を、いつでも、だれでも利用できる「開かれた」空間とすることで卸売市場を都市の裏側から引っ張り出し新たな価値を生み出す。

Step-1 背景

卸売市場の衰退

卸売市場は、生鮮食品の流通拠点として全国に整備され、日本人の豊かな食生活を支えてきた。しかし、近年では食事の簡易化による生鮮食品消費の減少や、市場外流通の増加によって卸売市場はその取扱高を減少させ、衰退の一途を辿っている。



Step-2 リサーチ

開かれていく卸売市場

船橋市地方卸売市場における一般開放性についての調査を行った。船橋市場は中央卸売市場から地方卸売市場へ転換をきっかけに、実需者の生鮮食品への理解醸成を目的としたイベント等を定期的にを行うようになっていて一方で、一般客の日常的な利用は少なく、未利用空間、未利用時間有している。



徐々に一般の人々も利用できるように

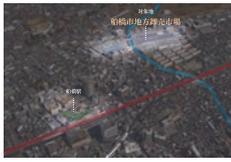
Step-3 対象地域

東京のベッドタウン 千葉県船橋市

船橋市は千葉県西部に位置しており、都心へのアクセスの良さからベッドタウンとして栄えてきた。一方で、昼夜間人口比率の低さも知られるように、船橋では多く都内で多くの時間を過ごす人が多く、「船橋都民」と揶揄される言葉が生まれており、船橋への愛着の少ない人も多い。

昼夜間人口比率	
千葉県	89.5% 46/47 位
船橋市	84.2% 1658/1901 位

対象地 船橋市地方卸売市場



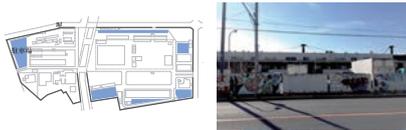
駅から徒歩10分ほどの好立地にあり、市場の周囲には住宅に加え、学校等もあり多くの人が暮らしている。また、市場内を南北に川が流れており、自然を感じられる空間も存在する。

閉ざされた市場

市場内部には地域の食を安定的に供給するための独特な活気ある活動がおこなわれているが、船橋市場は「閉ざされた空間」となっており地域との関わりが見られない。

1. 都市との物理的距離

市場の周囲は駐車場や建物が配置されており、外から内部の活動を感じることができない。



2. 市場ならではの独特な活気

市場内ではベッドタウン船橋ではなかなか見ることのできない独特な活動がおこなわれているが周辺からその雰囲気は感じられない



3. モビリティ優先の空間

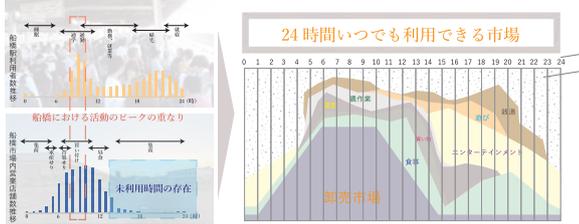
市場内では様々なモビリティが行き交っており一般の人々の利用には危険が伴う



市場を開く

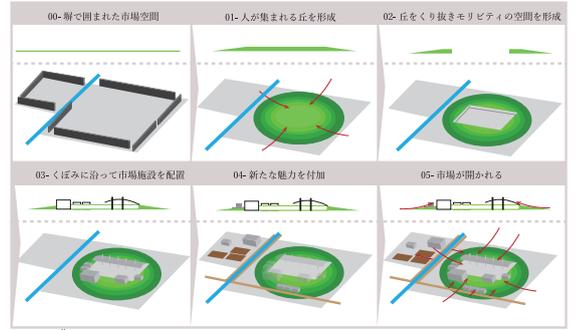
時間操作 - いつでも -

船橋市民に多く存在する都内への通勤者が地元船橋にいる時間は夜から朝にかけてであるが、その時間帯に船橋で行える活動は少ない。そこで、早朝から営業を行っている卸売市場を地域に開くことで船橋市民に地域での活動を行える場を提供し、朝をきっかけに一般の人々が気軽に立ち寄れる場としてこれまで利用されてこなかった日中から夜の時間にかけてもアクティビティを生み出すことで「いつでも」利用できる卸売市場を目指す。



空間操作 - だれでも -

卸売市場は効率的な食の流通のために様々なモビリティのための空間が構成されており一般の人々に対して排他性を有していた。そこで、開かれた卸売市場を構築していく作りため歩行者のための空間を作りその中にモビリティのための空間、すなわち市場空間を生み出す。歩行者のために生み出された空間の存在が排他性を消し、市場を「誰でも」利用できる場とする。



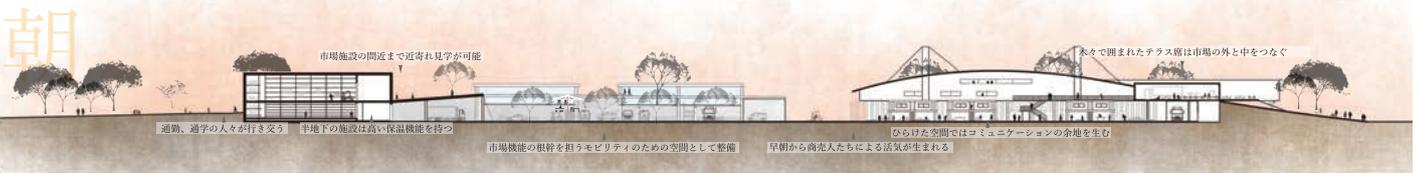
船橋市場の一日



配置図兼平面図

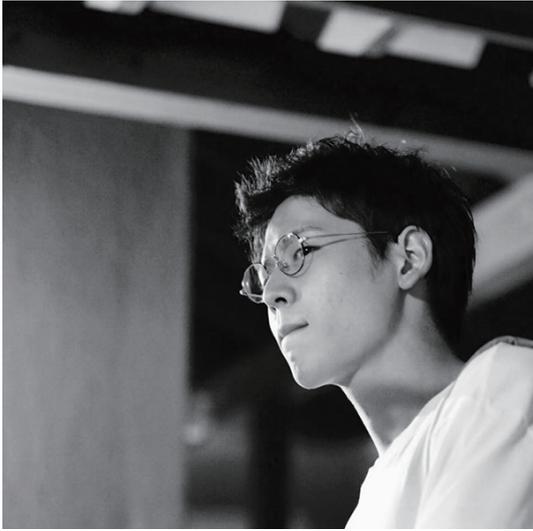


A-A' 断面図 1/1000



B-B' 断面図 1/1000





富山 瑛太

とみやま えいた

千葉工業大学工学部デザイン科学科

新宿区立大久保小学校建て替え提案

小規模校の魅力を引き出す形

国内の少子化により児童数が減少し、学校の小規模化が進んでおり、全国の小学校の45%が小規模校になっています。また、学校施設の老朽化も進んでいて建て替えを余儀なくされる現状です。これから増えるであろう「小規模小学校」に着目し設計提案を行いました。機能を最低限に絞り学校施設を小さくすることで、学校の中の人と人の距離を近くし、より多くのコミュニケーションを誘発を促します。また、学校を小さくしたことで空いた面積を地域住民に還元し、地域に対する学校の価値の向上を狙います。人数、面積が小さいからこそ学校が豊かな空間になるよう設計を行いました。

都内の学校では、小規模化が進む実状をしっかりとリサーチし、空間性豊かな教室群や、多目的な空間が出来上がっていたと思います。立体的に空間をとらえることで子供の視覚的な展開や行動性を上げる活動的な空間ができていたと思います。少し惜しいのは、折角の改修を提案するのであれば、付帯する施設も合わせて学校全体として、校舎、体育館、プール、校庭をどのように関連づけて学校を創る

のかも見てみたかったと思います。校庭も都内の学校ではどれくらい確保できるのかはもう一つのテーマであり、小規模化による校舎の縮小とより関連付けて、新たな学校の魅力をつくれたらよかったですのではと思います。



審査員：磯野 智由

新宿区大久保小学校建て替え計画

—小規模校の魅力を引き出す形—



小さい学校という選択

国内の少子化により児童数が現象し、学校の小規模化が進んでいる。そこで国は、標準規模に戻すために学校の統廃合を進めている。しかし、統廃合後すぐ小規模化してしまう学校も少なくない。

これから増えていくであろう、小規模小学校に合わせた学校施設規模を考え設計を行った。

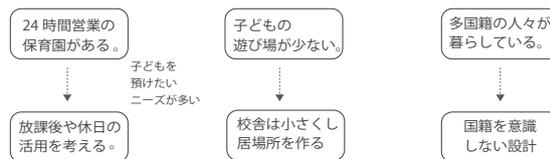


少ない面積で豊かな体験を

A. 面積を地域に還元し、学校の価値を上げる

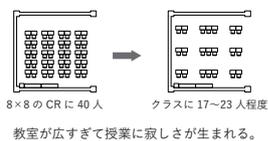
校舎面積を半分以下まで小さくし、休日は地域の方々も利用できる多目的棟を設けた。多目的棟は普段、大きな音が出そうな授業や、ランチルームとして利用されることを想定している。

敷地まわりの特徴から考えたこと



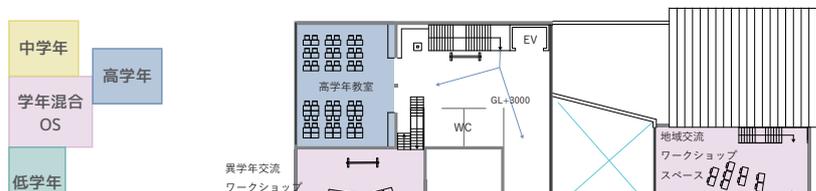
B. 教室面積の再計画

近年大久保小学校の学年の人数は20~40人で変動している。学年40人を上回るのは年に1学年程度で、クラス人数は15~40人まで学年により幅があるため、CRの面積を可動式の壁により調整可能とする。



C. 異学年の交流を意識した配置

低、中、高学年を1つのグループとし学年混合オープンスペース（以下OS）を配置していることにより、異学年間の交流が増えることを狙っている。また、同学年のつながりを床レベルを分けることにより断つことなく繋げている。





田中 章仁

たなか あきひと

千葉工業大学工学部建築都市環境学科

アーティストのための音楽ホール 響心堂

近年、物理的な欲から体感的な欲へと人々が移行している中、音楽業界でもその動向がある。しかし、「事業仕分け」が制定され、大規模な会場が次々に閉鎖や建て替えの危機に会い会場の不足が問題になり、現在でもその余波が続いている。本設計ではその会場不足を低減させるために「音楽の街」である渋谷に音楽の発信拠点を築く、そしてその拠点から発信されたアーティスト（音楽）が街に、都市にと拡大、展開されていくことで問題は軽減され音楽の持つ力が多くの人々に「響心」させていくことであろう。

音楽の発信拠点となる場所としての役割を持たせるため、音楽ホールを設計することが重要となる。そのため設計手法として空間を形成する要素に音響特性と構造システムをハイブリット化させることで新たなホールのあり方の提案をする。

渋谷に音楽の発信拠点を築き、そこから発信されたアーティストが都市に拡散してゆく。ライブ活動の場所が減少している現状を分析し、音楽の持つ力が多くの人々に「響心」させてゆく拠点を作することを提案しています。音響シミュレーションを通して、建物形状、架構計画が考えられています。本建物は、主にジャズやロックを演奏することを前提条件としています。どこか、オペラハウスに似た形状となっていますが、この形状は、あくまでも検討を重ねた結果であると説明されていました。提案されているホールの用途が主にジャズやロックであり、倉

庫のような形状でも、人工的な（電氣的な）音響処理で対応できることから、音響シミュレーションの結果を反映するとすれば、主たる対象をクラシック、オペラまで広げて考えても良かったのではと思われました。音響計画を正面から取り上げ、デザインに反映していったプロセスには努力の跡が伺われ、建物模型もしっかりと作りこまれていました。動画を利用したプレゼンテーションもわかりやすかった。



審査員：園部 隆夫

アーティストのための音楽ホール - 響心堂 -

設計趣旨

近年、物欲から体感的歌へ移りゆく中で、音楽業界にもその影響があり、ライブやフェスと言った場所で観客と演奏者が一体となる快感に惹かれる人々が増加しているため、ライブ回数等もそれに比例している。しかし、「事業仕分け」による会場の不足が問題となった2016年問題がピークとなり、そのころからは収まりつつあるが現在でもその余波が続いている。

本設計の提案ではその問題を解消するための第一歩として「音楽の街」となる渋谷に音楽の発信拠点を築き、そしてその場所から発信された音楽が街全体、都市全体へと発展していくことで問題も軽減し、音楽の持つ力により、人々の心に影響し、渋谷を中心とした大規模な「音街」が形成される。

コンセプト

コンセプトとしては「新たな音楽の発信拠点を築く」ということなので、対象を演奏者であるアーティストに設定し、その場所に来れば音楽活動の全てが行うことができ、さらに一般の人々にも利用を広げることで新たなアーティストの育成にもつながる。具体的には、アーティストのための音楽センターなるものを設計し、音楽する人、音楽の好きな人、音楽に少しでも興味がある人々がそこに集い、音で通じ合い、拡大させていくための原点を創り上げていく。

上記を具体化していくために、音楽ホールを設計する上で重要な音響特性を要素に取り入れて構成していく。さらに構造的要素もそこに導入することで、構造に音響的特性を持たせる建築ことで新たなホールのあり方として提案する。

ダイアグラム

①形を形成する要素として音響的特性を利用するわけであるが、それを具体化すると屈曲線がでる。



②この屈曲に柱を落とす。



③屈曲部ぶんにさらに分類させる。



④③のモデルを連続させる。



⑤ホールの大空間を造るため短手方向にアーチを導入する。



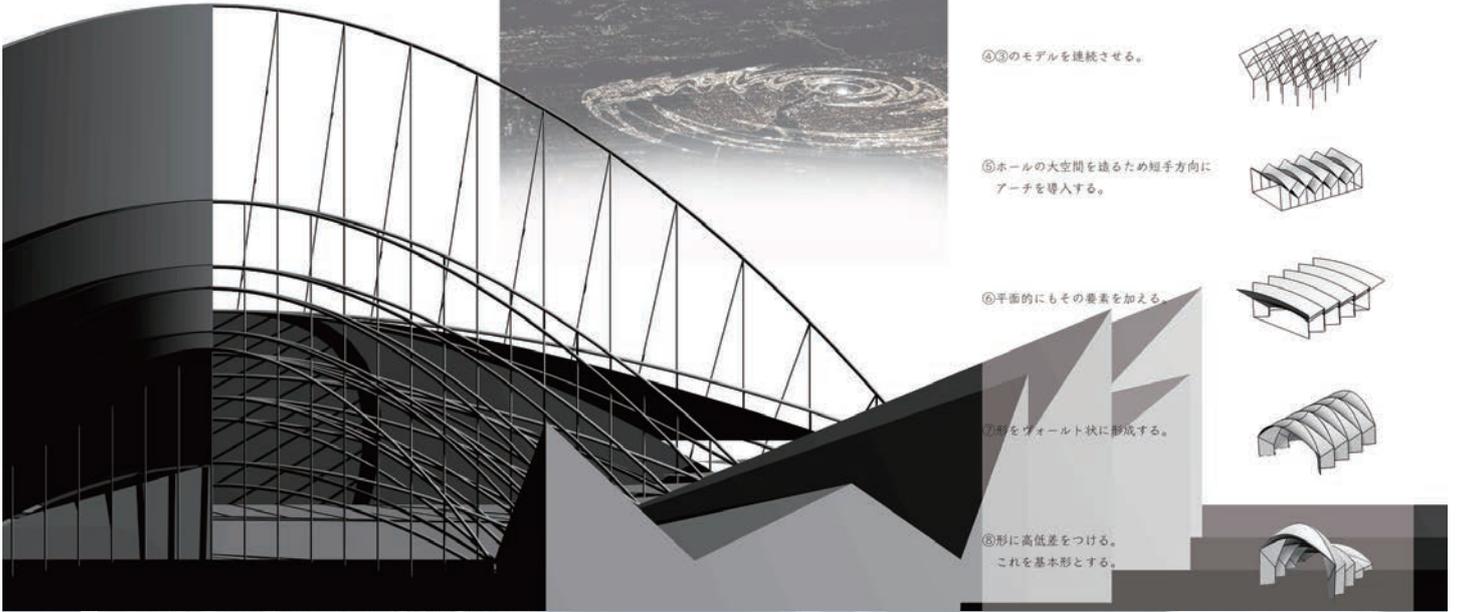
⑥平面的にもその要素を加える。



⑦形をヴォールト状に形成する。



⑧形に高低差をつける。これを基本形とする。



音響計画

本来、音楽ホールは一つの楽器とも言われ、空間的に音が拡散され響き渡らなければならない。そのため、音楽ホールではどの席にも音が届くことを重要視している。

(1) 音響特性について



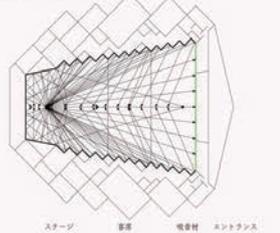
音響特性とは音の反射を利用し、壁や天井の角度を変え、拡散要素にすることである。ドーム型だと音が一点にしか集中しないため拡散しないので音がホール全体に響かない。

(2) 断面構成



・ランダムに屋根が配置されており、大きく分断。
・ステージ側の屋根は鋭角で全体的に低くするパターン。

(3) 平面構成について



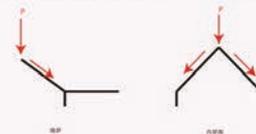
○壁面角度が45度の場合
・音の反りの感覚がほぼ均一である。
・ステージ後部も音が届いている。
・ロングパスエコーの問題がある。

構造計画

本設計での構造計画では音響計画の音響特性の具現化されたものを構造的に組み立てて設計している。そのため音響計画をしながら構造計画の検討も同時進行で行った。

(1) 端部と内部の構造について

エントランスや搬入口の端部の材が飛び出しているため、かかる力が大きい内部側の鉄骨はバスケットハンドル型のように隣り合わせて力を分散させているため負担が半分で済むが端部は片方しかないので大きくかかる。



(1) 壁面のコンクリートについて

ホール左右のコンクリートの作用としては、鉄骨のみの場合、鉛直力の力に対してはアーチがあるため強固だが、水平力に対しての力に弱い。面剛性としての機能を折板構造にすることで、水平力に対する構造を作ることができる。

(3) 方杖の役割とアーチのスラスト処理について。

方杖の役割は上部のアーチから下部のアーチへと力を受け渡し支える作用を持っている。下部のアーチはコンクリートがある程度負担はしてくるが、上部のアーチとアーチが隣接する点までのスパンを支えるために必要になってくる。

アーチの端部にかかるスラスト力を抑制することに関しては、断面図をみるとよくわかるが横に他の機能である部屋自体が抑える仕組みになっている。このように建築全体でスラスト処理を行っているため自重に関しては過剰すぎるほど強固にすることができる。





松本 竜太

まつもと りょうた

千葉工業大学工学部デザイン科学科

熱海の玄関口となる、コミュニティの拠り所

地域コミュニティの活性化。近年各地で求められている大きなテーマの一つである。人やモノの繋がり、地域性や場所性が重視され、経済を支えるための商品を乱立するまちづくりから、「そこにしかないもの」が求められる方へ時代の流れがシフトしたのである。

現在熱海市には、生涯学習の仕組みはあれど、活動を行う場所が足りていないことや、高い高齢者率による将来にかけての人口減少、世代間交流がない、観光客の居場所はあるが、地域住民の居場所が少ないなど、問題が多くある。土地利用のされ方についても、未だに高層の建物が着々と建設されていき、居場所が増えそうな気配はやはり感じられない。この現状を踏まえ、先の熱海を考えるため、あえてホテル街に敷地を選定した。熱海の地域コミュニティを育むための複合型学習施設を提案した。

地域におけるコミュニティの希薄化は都心、地方に関わらず各地域が直面している問題である。自分達の地域に関わる事は住民自身で解決していく事が大切にも関わらずその意識すらないのが現状だ。

この作品は「観光客のための街」になっている地方都市を「地元住民の街」としての側面を再度意識させ、埋もれてしまった地元住民の居場所を作り出す建築である。敷地はあえて観光の拠点となる場所を選定しているところが、地元住民のための街にしたいという作者の意図を明確にあらわしているようで深い。

また地形を生かした建物配置とうねり道のような地域特性を現した形状は街そのものを体で感じられ、断面的にも地形の美しさを損なわない非常に素直な提案である。うねった形状により、海の景色、街並み、建物の中心に配置された庭、庭越しにみえる建物内での活動、と移り変わる景色がこの建物を散策する楽しさを生んでいるのが良くわかる。この建築が文字通り「玄関口」となれば地域住民の活気に溢れた賑わいある街として観光業にも相乗効果を生むかもしれない。



審査員：伊藤茉莉子



山内 颯

やまうち はやて

日本大学短期大学部建築・生活デザイン学科

わんどの庭

—海・工芸・人が結ばれる場所—

青森市は、水上交通の青函連絡船、陸上交通の新幹線の開発を中心として生活・交流の場を増やしてきた。青森港湾域ではウォーターフロントの活性・整備の一つに、地域性を活かした来訪者との交流や市民の生活拠点としての場が求められている。本計画は、青森の活力である「ねぶた」をはじめとした創作文化や技術継承など多様な表現発信の育成を提案することから始まる。ひとつながりの湾岸域は、段状にレベル操作されたランドスケープにより親水公園を創出させ、屋根による内外関係や視線・動線の連結操作により建築の構成を行った。そして、わんど（人々）は多彩な活動を能動的に結び、暮らしの「要」として愛される庭（場）となり発展していく。

青森といえば夏祭りのねぶたが頭をよぎる。ハレの日街は祭りで賑わい踊り手とともに彩られた大型のねぶたが街を練り歩く風景が想像される。今回の提案は船、鉄道、車の交通の3つの交通軸の接点に計画された地域を生かした建物群と親水公園の創出により来訪者との交流と市民の生活拠点として多彩な活動スペースの提案である。陸上から緩やかに段上に海までつづくデザインが先端の水上ステージを見れるように屋根の高さを工夫している。地域の工芸品のガラス工房、津軽凧製作、手芸教室などに通い同じ共通の趣味以外の人との交流、文化

の技術継承を建物の高さ大きさにより内の建物から屋根だけの中間領域を生成することにより各施設とのバランスを見ながら地形も含めてデザインされている。階段状のランドスケープと各施設の繋がり方や平面プランとそのボリュームやなぜ三角形の屋根なのかを表現するように出来ればもっと良い作品となったであろう。短期大学での出展でありこれから建築をさらに学び社会に飛躍することを望みます。



審査員：浦生 良隆

わんどの庭

—海・工芸・ひとが結ばれる場所—



concept
 青森市は、水上交通の青函連絡船、陸上交通の新幹線の開発を中心として生活・交流の場を増やしてきた。青森湾湾域ではウォーターフロントの活性・整備の一つに、地域性を活かした来訪者との交流や市民の生活拠点としての場が求められている。
 本計画は、青森の活力である「ねぶた」をはじめとした創作文化や芸術継承など多様な表現発信の育育を提議することから始まる。ひとつながりの湾岸域は、後援にレベル操作されたランドスケープにより親水公園を創出させ、屋根による内外関係や視線・動線の連続操作により建築の構成を行った。そして、わんど（人々）は多様な活動を能動的に結び、暮らしの「要」として表れる庭（場）

Context / 青森湾のウォーターフロントと地域特性

青森湾のワンド

青森湾は、古くから商船の寄港地であり、青函連絡船による本州と北海道を結ぶ重要な役割を果たしてきた。また、この地区は市場や商店街が共に発達し、市民の日常生活に欠かせない場所であった。

約40年に渡るウォーターフロント開発が進み、新たな青森湾が誕生した。開発に伴い、公園整備や駅前開発により豪華な建物の集積が可視となり、市民の憩いの場に加工海外からの来訪者が増加する背景をもつ。

■3つの交通軸の結節拠点

- 青函連絡船** → 海の玄関口 (海の駅) 豪華な客船・観光船・ダイヤモンドプリンセス等 八甲田線青森駅→青函連絡船の歴史・歴史の継承 青森湾内海 → 湾内公園を中心とした親水公園 青森・岩手・秋田・大館・弘前市の海の玄関口 青森湾・灯台一帯上でウォーターフロントの創出
- 陸上交通** → 海の玄関口 (鉄道駅) 八甲田線 → 鉄道の結核 (海の駅) 青森駅駅前第一広場・公園による生活拠点 東北・北海道新幹線の開通に伴う都市の結節拠点
- 自動車交通** → 自動車交通 (道の駅) 自動車社会 → 市民利用による自動車交通 国道1号線→青森から山形県までの自動車交通 道庁庁舎・観光局による観光と駐車場

8つの拠点施設

- ① JR青森駅
- ② フェスティバルシティ AUGA 国際商業施設→現在・市役所分館
- ③ ねぶたの館 わらわぜ 青森ねぶたの歴史や実物展示
- ④ A-Factory 県産品を使用した食卓や土産物 観光土産店、ねぶたの製作舞台
- ⑤ 新青森駅前 老舗店舗が立ち並ぶ商店街の青森ベイブリック
- ⑥ 交通軸・土木資料 (夜景)
- ⑦ 青森湾新中央埠頭 大型客船の停泊場 (海外客船地)

Key-concept / わんどの庭を形成するデザイン

■コミュニティデザイン：湾岸につくる活動交流の拠点づくり

湾岸に水がたまり、地形を形成するように、わんど（人々）が一つの場所に来ることで新たな交流拠点を形成する。

■コミュニティデザイン：海・ひとと工芸が結ぶカタチ

青森で大切に守られてきた場所と伝統工芸が海で展開される。人々が集まりデザインされた地形や、海からの形や音、風を受けて新たなものづくりの楽しさをうむ。

■コミュニティデザイン：産（公園）

青森で大切に守られてきた場所と伝統工芸が海で展開される。人々が集まりデザインされた地形や、海からの形や音、風を受けて新たなものづくりの楽しさをうむ。

■ランドスケープデザイン：平面計画

防波堤を基準に直行グリッドを配置。グリッドに合わせて様々な四角形（場）を配置。頂点を結びレベル差の地形（湾曲：ワンド）の生成

■ランドスケープデザイン：断面計画

湾域を取り囲むように親水公園を形成する。水際との境界線は隔たっていた。舞台・階段・椅子等へ利用者の屋外活動のアフオーダンスが生まれ公園は都市とつながる

■タイムデザイン：対比する場の展開

情熱 夏 → 静寂 冬

ハレ（非日常） ← ケ（日常）

朝 → 夜

Potential / 青森がもつ地域性/文化・工芸・人

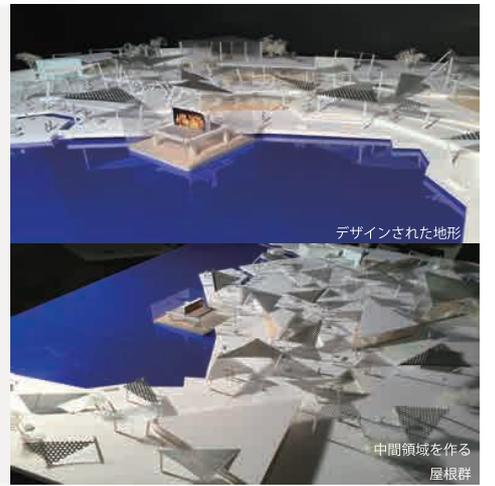


シンボルの「ねぶた」をみる人々

表現の場所としての水上ステージ

津軽凧を製作し 伝統工芸に触れる

親水公園



多様な活動風景





下野 真緒

しもの まお

千葉職業能力開発短期大学校住居環境科

大きな樹

トイレは日常生活になくはない存在である。しかし、公園に設置されている公衆トイレの世間のイメージは「汚い」「臭い」「危ない」など、良いイメージとはいえない。老若男女、障害、国籍を問わず利用される地域の交流の場である公園には「綺麗」「衛生的」「安全」などのイメージが当てはまるようなトイレを設置すべきだと考えた。

公園には、四季折々の花や木がある。そのような自然を崩さなような公衆トイレとして、クスノキの樹形を取り入れ、公園のシンボルとなるような形にした。また子供が安心して利用でき、様々な人にとって利用しやすい公衆トイレ計画する。

夜間の公園をほのかに照らすのは球形のトイレであり建物自体が照明装置となっている発想はとても面白い。人は明るいところが安全と感じるので犯罪がおこりにくようにとの設計意図がうかがえる。通常閉鎖的になる1ヶ所の出入口トイレを2方向から入れるように工夫されさらに上方へと開放感を持たせ犯罪が起こりにくく設計されているところ配りがみてとれる。手洗い、洗面スペースもあえて外部に配置しているがルーバー状の目隠しにより曖昧な空間としての演出がされており手洗いだけでも気軽に子どもができる提案が素晴らしい。 本体の骨

組みでは水平軸が協調されているのもう少し自然に溶け込む工夫が欲しいところである、また完成した後のトイレをいかに綺麗に保つか、この公園に集うみんなが率先して綺麗に保つ仕組みなども建築を通じて出来るように提案していればもっと良い評価が得られたと思われる。建築を学んでまだ二年と浅い中にも清掃用具室からの動線や小便器の配置などディテールを考えた設計であった。これから伸びていく設計思考力に魅力があり将来がとても楽しみである。社会に出てからの活躍を期待しています。



審査員：蒲生 良隆

大きな樹

トイレは日常生活になくはならない存在である。しかし、公園に設置されている公衆トイレの世間のイメージは「汚い」「臭い」「危ない」「怖い」「暗い」など、良いイメージとはいえない。

公園は老若男女、障害、国籍を問わず利用される地域の交流の場にもなっている。

近年、洋服が汚れる。遊具で落ちたら怪我をする。掃りが遅くなると危ないから。という理由から子供を外で遊ばせない親が増加しているとよく耳にする。

親が安心して子供を外で遊ばせないのは公衆トイレのイメージと類似するものがあるのではないだろうか。

そこで、公衆トイレのイメージ改善及び、公園利用者増加のため、「綺麗な」「衛生的」「安全」「安心」などのイメージが当てはまるようなトイレを設置するべきだと考えた。

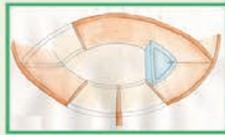
公園には、四季折々の花や木があり、自然豊かな場所である。そのような自然を崩さぬよう、クスノキの樹形をモチーフにした。

公園内の木々に溶け込む形と、ランドマークとなる存在感をだすことにより、公園のシンボルとなり、人々の待ち合わせ場所となるような公衆トイレを計画する。

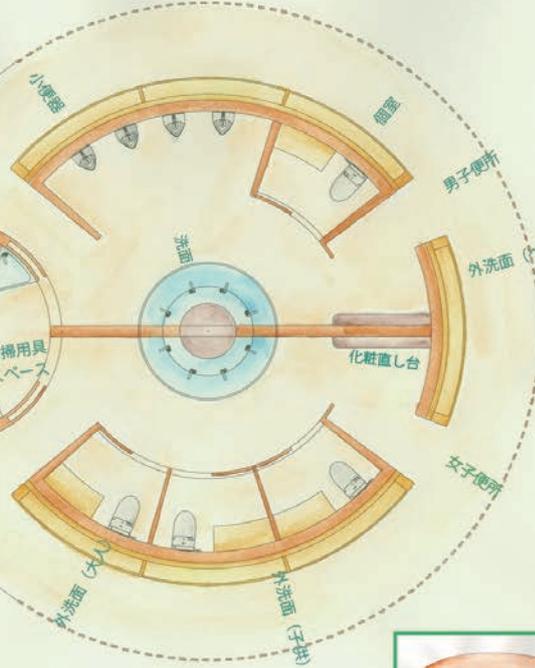


公衆トイレは様々な人が利用するため、隣に立つと気を使ってしまう。そこで、隣り合わせになる便器を約1000mm離し、16°外側に向けてことで視界から少し外れ、隣との距離ができ、気を使うことなく利用できるようにした。

多目的便所
オストメイト
手摺・洗面
背もたれ
おむつ交換シート



多目的トイレ・男子トイレ・女子トイレ
3つのスペースにつながることでできる
清掃用具スペースを設けたことにより、
清掃員の動線を短くした。



外側に洗面を設け、公園で食事をする前や、トイレ内の洗面では少し抵抗があるようなものも洗い、子供だけで手を洗いに行っても見守ることができるような安全性を取り入れた。
また、ベットの足等を洗える場所も設け、多種多様な用途に利用できるようにした。

今回公衆トイレ設置予定場所は、千葉県市川市にあるじゅんさい池という公園。公園の中心には昔じゅんさいが咲いていた大きな池があり、周りは閑静な住宅街となっている。

昼間は親子連れが多く訪れるが、夜は街灯の間隔が道路より開いているため、公園内は真っ暗になる。

警視庁が掲載している性犯罪(強姦・強制わいせつ・痴漢)の場所別発生状況の中で、公園は必ず上位にある。

平成28年の記録では、強姦 6位 (2.2%)
強制わいせつ 5位 (3.2%)
路上では1位と、1人で歩くには危険と言わざるを得ない結果となっている。

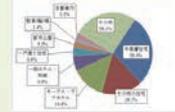
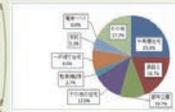
危険が多ある公園だが、このじゅんさい池は管理人もいて、避難場所にもなっているため、より安全であることにより、地域の安心できる場所になれるのではないかと。

現在じゅんさい池には公衆トイレが2か所に設置されているが、使用されているのは1つだけである。

使われていないトイレは利用できるが、「汚い」「臭い」「危ない」「怖い」「暗い」といった要素がすべて含まれているようなとでもきれいとはいえないトイレである。

また、このトイレが設置されている場所は、公園の中央だが、公園の入り口側にある遊具コーナー利用者が多いためあまり利用されなくなると考えられる。

公園中央にあるトイレを良いものにし、じゅんさい池のイメージをよりよいものとする。



設置予定場所 (地図)



公園周辺地図



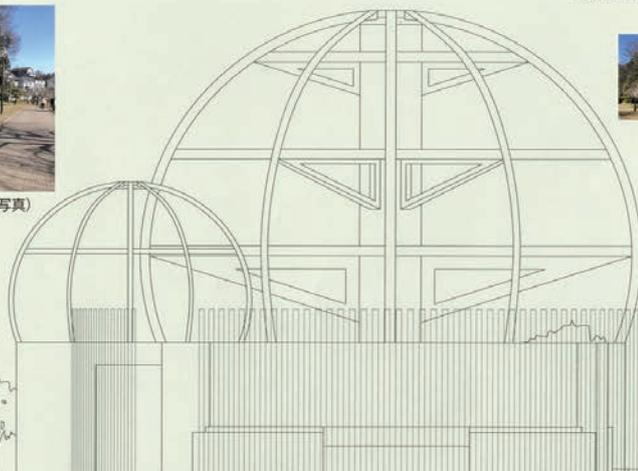
夜間の公園は暗く、安心して通行することが難しくなる。
屋根のガラスを通してトイレ内の光があたりをほかに照らす。



夏には虫取り・ピクニックで手荷物の多い利用者が増加する。
個室の荷物おきスペースを広げ、ゆとりを持って利用できる。



設置予定場所 (写真)



公園は老若男女、障害、国籍を問わず利用されるため、公衆トイレもユニバーサルデザインにした。
子供も安心して利用できる公衆トイレにした。



春には「うめまつり」が開催され、屋台なども出て人が増えるため、トイレや洗面利用者が多くなり、待ち合わせも容易ではなくなる。公園の目印となるようなトイレ。



小山 竜二

こやま りゅうじ

東京電機大学未来科学部建築学科

月島的变化

私は都市で生活することの喜びの本質を探ることを目的とします。現代の均質化する都市に対し、生活の滲み出しや都市空間の住みこなし、都市とプライベートの相互干渉が都市で生活する上で喜びに繋がっていると考えます。東京都の月島は小さい頃からの親しみの場所です。この地域では、生活感が滲み出す生活容態が高層化の波に取って代われ消えてしまう現状があります。対象敷地は中層マンションの建設予定地を選定し、資本論理の強く働くこの地域で重層マンションと対峙可能かつ滲み出す生活感を残す集合住宅を計画します。月島的变化はこの地域にとどまらず中国の都市やアジアの幾つかの都市でも見受けられます。高層化により均質化していく都市の中で高らかに生活することの喜びを謳う都市と生活の関係性の建築化が必要だと考えます。

プライベートとパブリックの襲のような境界を如何にデザインするかをテーマとしているこの卒業設計は、人の生活（営み）が家というプライベートスペースをはみ出す様を丹念にスケッチし、月島に住む人々の生活が空間とどうつながり合っているかを徹底的にリサーチすることから始めている。このような方法で、新たな集住のあり方を追求する姿勢は、大いに共感する。

その先の提案は、かなり尖がっている。既視感があることが気になるが、住戸内の廊下を半共用空間化し、そこに寝室・浴室を含む室をむき出しに配置することで、か

たいセキュリティラインで仕切られている都市居住の構造をぶち壊そうとしている。自己と他者の間にある同心円状の構造を解体することを要求しているのだ。学生らしいゴツゴツしたとても若い感性だと思う。社会人になって、この荒々しさやデザインがどう変化していくのか、楽しみだ。



審査員：安田 俊也



宇津 里緒奈

うつ りおな

日本大学短期大学部建築・生活デザイン科

ふれあいの種

～クラインガルテンが築く人々の輪～

茨城県笠間市は商業と手工業・農業が盛んな町であり、金鉱石の採掘・酒造業・和紙生産などが行われていた。しかし、現在の笠間市は高齢化によって耕作放棄地が増加し、農業は都市化という流れに埋もれ若者から敬遠され深刻化しつつある情勢になっている。そこで、“ふれあい”をテーマとし農業によって(1)耕作放棄地の再生、(2)人との関わり、(3)歴史・文化・美術等との融合を図る、(4)高齢化問題を解く。クラインガルテンの種をまき、地域(文化)とのふれあい・人と人とのふれあい・自然とのふれあい、の実が出来ていき地域活性化という名の花が笠間市全体に咲く。クラインガルテンによって、笠間市に新たな田園空間を提案する。

かつては農業が盛んであった街が高齢化によって廃れていくというのは、日本の地方にいくらかでも存在する問題である。この問題を全く別の手法で解決するのではなく、農業そのものの力で地域を守ろうという素直な計画だ。農業は単に食物を作るだけでなく地域を活性化していく魅力にもなり得るという考えだ。

この農業体験型施設というのはファミリー層を主とした子供向けの施設として昨今増えつつある施設であるが、この作品は利用者がこの地に根付く事を目的としているため、子供だけでなく地元の老人、移住希望者にも

向けた施設として想定している、その着眼点は良かった。しかしそれであれば、もう少し施設の形状や共用部のあり方、農作物と施設との関わり方にもその特徴を反映させて欲しかった。また、クラスターごとに名称が違うので各用途が異なるようだが、その群れ方にも独特のプログラムと作者なりのデザインが加わればより説得力のある作品になったように思う。



審査員：伊藤茉莉子

ふれあいの種

～クラインガルテンが築く人々の輪～

茨城県空間市は商工業と手工業、農業が盛んな町であり、金鉱石の探掘・酒造業・和紙生産などが行われていた。しかし、現在の空間市は高齢化によって耕作放棄地が増加し農業は都市化という流れに埋もれ若者から敬遠され深刻化しつつある情勢になっている。クラインガルテンの種をまき、地域(文化)とのふれあい・人と人のふれあい・自然とのふれあい、のつぼみが出来ていき地域活性化という名の花が空間市全体に咲く。クラインガルテンによって、空間市に新たな田園空間を提案する。

対象敷地

(現状)

- 茨城県空間市
- 森林に囲まれている
- 空間地は日本の経済復興
- 農家は減少し、耕作放棄地が増加
- 周辺に住宅が少なく交流がない
- 若者は県外へ

	農家数	経営耕作面積	耕作放棄地
2000 (H12)	5,043戸	4,538ha	511ha
2005 (H17)	4,669戸	4,170ha	792ha
2010 (H22)	4,374戸	4,051ha	769ha
2015 (H27)	3,859戸	3,694ha	910ha

〈問題提起〉

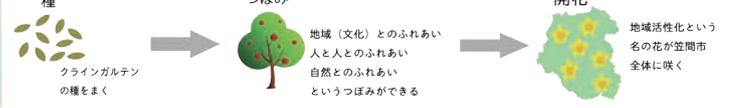
- (1)耕作放棄地の再生
- (2)人との関わり
- (3)歴史・文化・美術等との融合を図る
- (4)高齢化問題

クラインガルテンとは？

日本語に訳すと「小さな庭」であるが、「滞在型市民農園」とも言われている。大小の差は大きいですが、利用者1人当たりの平均面積は100坪(330平方メートル)ほどで、賃借期間は30年。野菜や果樹、草花が育てられ、ラウベ(laube)と呼ばれる小さな小屋が併設されている。



コンセプト



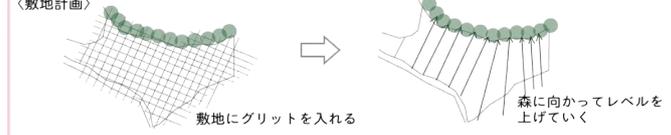
滞在施設



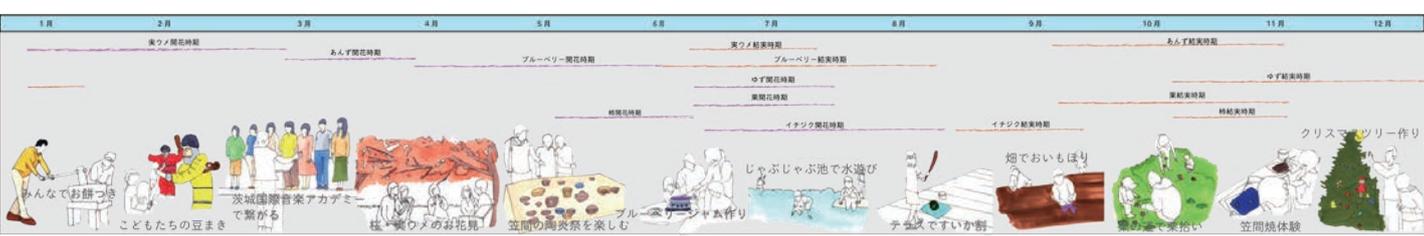
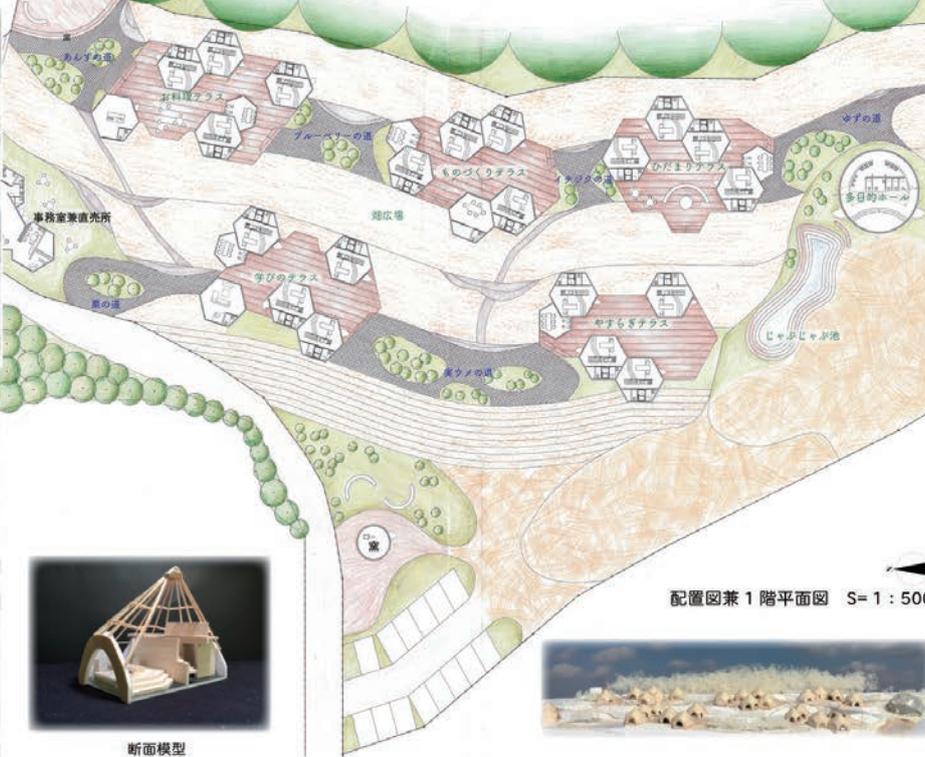
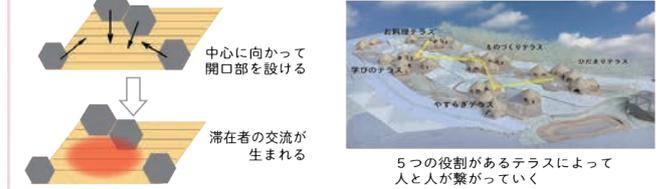
未来計画



配置計画



テラス計画





秋山 竜汰

あきやま りゅうた

東京電機大学情報環境学部情報環境学科

「津波避難公園」の提案・警告

「この街に津波は来るのだろうか？」

2011年3月11日に発生した東日本大震災以来、東京湾沿岸部にある私の住む街では、この小さな囁きを時折耳にします。

この小さな囁きは、怖さと大丈夫だろうという不安定な気持ちを示す囁きであると私は感じています。

この「囁き」に対して、建築にできることは事前津波対策です。しかし、その気持ちに応えるには、建築する必要性を問う必要があります。

本提案は、必ず海に面する終末処理場を自立する公園にすることで建築する必要性を導き、東京湾沿岸部に発生する可能性のある津波に対して、事前対策をする提案です。

また、世にある終末処理場は、津波に対してまだまだ対策が施されていません。

したがって、この提案は終末処理場を有する全ての地域への警告でもあります。

津波避難公園の提案に、終末処理場の津波対策を考慮して提案されている本計画の着眼点は素晴らしいと考えます。避難施設としての機能として、ヘリポートの設置、農園の設置、ソーラー発電による電力の備蓄、給水塔による田畑への散水機能など多機能を持たせています。構造計画上は、四角錐型トラス（8m×8m）構造を採用し、耐震性、耐津波性を確保させています。四角錐型トラスの頂部には給水塔、ソーラー発電設備などが配されています。避難施設として多機能を持たせている計画の提案となっています。平常時の避難施設利用が積極的に

考えられています。少々気にかかる点として、当該施設として千葉市美浜区磯辺町を想定している点です。当該地域は、東日本大震災発生時において、地盤の液状化が発生した地域であり、噴砂現象により周辺地盤が大きく沈下した被災地域であることです。基礎部分について不同沈下を防ぎ、かつ津波による水平力に耐える基礎計画が配慮されておれば、さらに充実した提案であったと思います。



審査員：園部 隆夫



「この街に津波は来るのだろうか？」

東京湾沿岸部にある私の街では、この小さなさやきを時折耳にします。

この『さやき』に対して、建築にできることは事前津波対策です。しかし、『小さな』気持ちに合わせるには、建築の必要性を問う必要があります。

本提案は、必ず海に面するインフラ施設である終末処理場に建築の必要性を導き、東京湾沿岸部で発生する可能性のある津波に対して、事前対策を講ずるものである。

「津波避難公園」の提案・警告

1. 背景・目的

2011年3月11日に発生した東日本大震災では、津波の被害が甚大であった。特に、
①避難時間不足及び避難距離の制約による人的被害
②本造戸建住宅全壊による一時生活場所の不足
の2つは、被害を深刻化した。

東京湾に面する千葉市美浜区磯辺町は、
①階建て戸建本造住宅群が沿岸部に存在する地域である。
そして、今後発生すると考えられる大規模地震は、
東日本大震災と同様に津波被害が生じる可能性がある。

本設計は、千葉市美浜区磯辺町を対象とし、
①津波から安全に避難し、生存すること
②津波避難後の数日の一時生活を保障すること
の2つを目的とし、津波避難公園を提案する。



2. 対象地域課題点

2.1 大規模地震

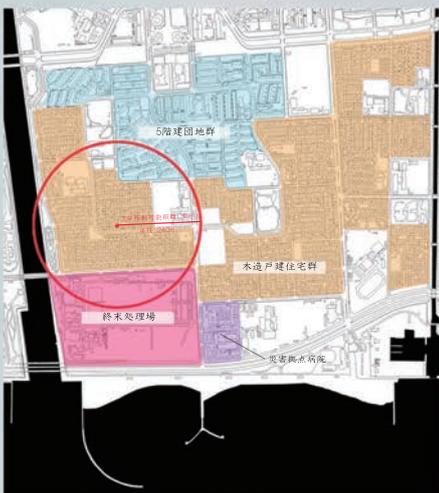
磯辺町は大規模地震(東京湾北部地震)によって、
高さ3mの津波が、地震発生から約5〜7分で到達する
可能性がある。
したがって、平常者の歩行速度(80m/min)と仮定した場合、
避難可能距離は約240m〜560mである。すなわち、
磯辺町は遠く高さ3m以上の避難場所が必要である。
また、東日本大震災では想定外の津波高さ12mを記録した。
これを考慮すると高さ12m以上の避難場所も必要である。

2.2 一時生活場所の不足

磯辺町の高さ3m以下に住む総人口は、約8500人である。
また、磯辺町に指定されている避難所の収容可能人数は、
約150人である。したがって、高さ3mの津波発生後、
約1200人が一時生活場所を得られない可能性がある。

*対象地域について

- ・人口 17707人(平成29年4月1日)
- ・高齢化率 46%(本造戸建住宅群に限る)
- ・海抜 0〜2.0m
- ・海抜15mの高台までの距離 最大3.2km
- ・指定避難所収容可能人数 約150人



3. 敷地選定 (花見川終末処理場)

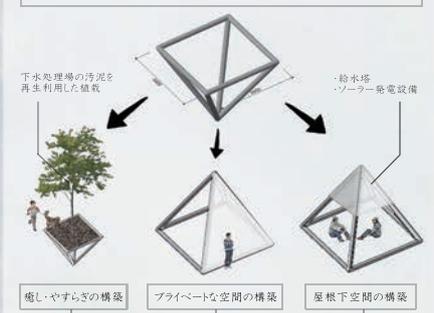
設計する敷地として終末処理場の上部空間を選定した。
終末処理場は、千葉県印旛沼流域の川の汚水の処理、
周辺地域の生活雑排水の処理を行い、
水出し用排水、公園の修繕用水等に再生水を供給する
機能を持つ。終末処理場上部空間は、
野球場・サッカー場・ゲートボール場として整備されており、
地域住民の憩いの場として開放されている。したがって、
津波から守るべき建築体である。
また、磯辺町の戸建て住宅群と隣接する敷地に立地する
建築体である。すなわち、避難距離の制約を減らすこと
のできる敷地である。

また、近隣の環境基準に対応するため、
高度下水処理施設を増築予定である。
本設計は、増築予定の高度下水処理施設の
上部空間を活かした提案である。



4. 設計概要

用途：農園自然公園(平常時)、一時避難・生活拠点(津波発生時)
構造：耐地震・耐津波として優れた四角錐型トラス構造(8m×8mスパン)



本設計は、四角錐で構築される空間を
連続配置し、その空間の間に生まれる
余剰空間を一時生活拠点として活用した。
津波発生後、一時生活拠点では、
水と電気の分配、生活の配置計画を
避難者の構築するコミュニティによって行う。



①平常時：農園自然公園
・ソーラー発電による電力の備蓄
・給水塔による田畑への散水



②津波発生時：避難階段
・折れ階段による安全な避難
・植木を回避する



③津波発生時：ヘリポート
・想定外の津波における避難場所
・負傷者の輸送(災害拠点病院との連携)



新井 育実

あらい いくみ

千葉大学工学部建築学科

とよかん 書 -余白のためのプロトコル-

図書館建築がハードの機能として人のためにできることは何だろうか。
人のための図書館空間の形態を考える。

01 図書館特有のあの居心地は何から生まれる？

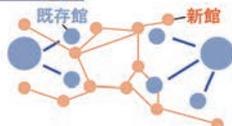
01-1 居心地を生み出す要素 -研究、読書体験、利用者観察から-

物理的形態	無限性・膨大な知識への畏怖の感覚をうむ	開放感・自分の意識が自由になる感覚をうむ	狭さ・安心感・心地よさを与える
主観的現象	匿名感・肩書きを外し、一人の人間となる	優越感・知識を手に入れる可能性への期待	姿勢・自分で生み出す心地よさ
環境要素	光・識字のためだけではない	色・感情を作ることができる	音・静寂、喧騒・・・ 風・今まで図書館になかった

01-2 デザインプロトタイプ -170のスタディを経て-

	無限性	開放感	狭さ	匿名感	優越感	姿勢
光						
色						
音						
風						
匿名感				●プロトタイプの適用の仕方● 1 光、開放感、風・・・ 敷地の特性により、拡張しうる要素を検討 2 選んだ要素を含むプロトタイプを組み合わせる 3 敷地に合わせて具体的な形にする		
優越感						
姿勢						

02 こんな図書館はどうでしょう



現在ある図書館の合間を縫うように、小さな図書館が街中に散らばる。
そこで生活する人、働く人にとって図書館は身近になり、その場所ごとの良さを取り入れた居場所が街中にできる。

また新館どうかが蔵書のやりとりなどをすることで、新しい図書館の関係が生まれる。

図書館建築が、ハードの機能として人のためにできることは何だろう。

人が「居る」ための図書館空間について考える。

貸出が中心であった図書館は、いつからか「滞在型」へと変わり、「課題解決型」「生活提案型」などが増え、人に焦点を向けるようになりつつある。

そして、カフェの併設や商業施設との複合など様々な新しい図書館が生まれている。その中で、人が「居る」ための空間としての形態についてはあまり考えられてこなかったように感じる。

そこで、図書館の中で人が何を感じ取っているのかを考察し、それらを元に空間を作っていく方法を考えた。そしてデザインプロトタイプ及びモデルプランを作成した。

いくつかの居心地の良い小さな図書館を、街の隙間に埋め込み、徒歩圏内に図書館があるネットワークを提案するこの卒業設計は、「図書館が本当に好き！」というオーラを体全体から発散している新井さんが、自分のために発想したものと思いましたが、一方、図書館の役割が大きく変わってきている現代的状況を的確に捉えています。

サードプレイス、ザワザワしている図書館、つながる図書館・・・これらは最新の図書館の特徴を表すキーワードですが、ITやバーチャルな世界によって孤独感が拡大する社会において、いつでも好きな時に利用できる図書館は、本という実体を持った情報が行きかい、人と人がFace to Faceで向き合える、居心地の良い交流・居場所としての役割が重要視されるように変化しています。都市の隙間が持つ空間特性を活用した小さな図書館が至る所にあり、仕事に疲れた時にカフェに寄るような感覚で訪れられる。そして、匿名性がありながらもつながりあう都会的人間関係を育てていく。そんな未来の図書館像を、作者は示したのだと思う。



審査員：安田 俊也

03 モデルプランの作成

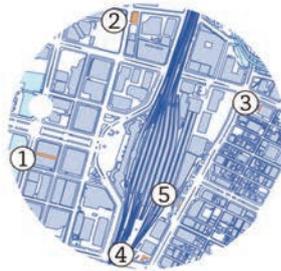
計画地：東京駅周辺

計画地は、東京駅を中心に半径 500m 以内とした。この範囲の端から端まで歩いたとしても、人の徒歩圏 (1km) に収まるようにするためである。

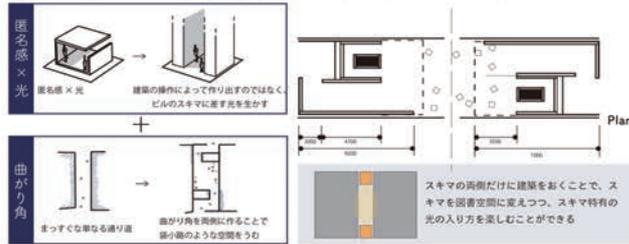
敷地調査の結果より、この範囲から右図の5つの敷地を選定した。また、この地域はオフィスワーカーが多く、服装などが皆似ていること、人が多く大衆に紛れる感覚があることから、匿名感をデザインの軸としてプロトタイプを使用していく。

●敷地調査結果の概要

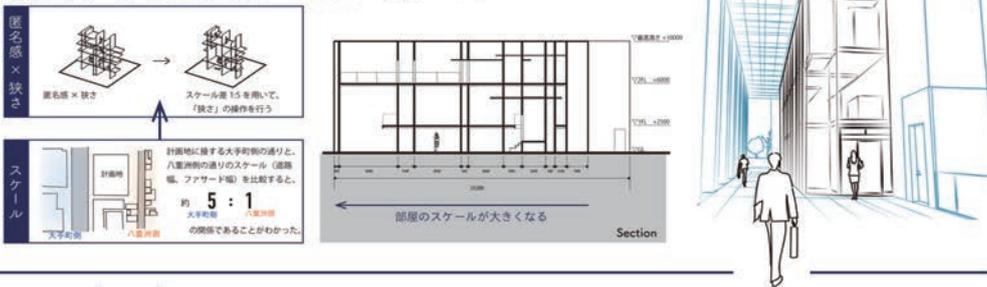
- ・歩行者にしかわからない地形がある
- ・徒歩 5 分圏内に最寄駅がある
- ・公開空地の利用が求められている



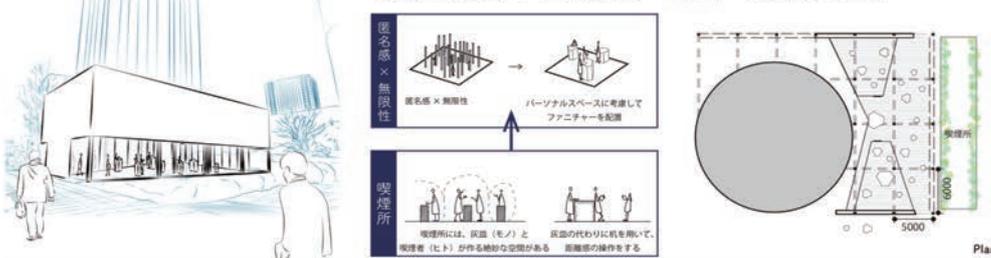
①スキマの図書館 - 匿名感 × 光 + 曲がり角 -



③大きさの図書館 - 匿名感 × 狭さ × スケール -

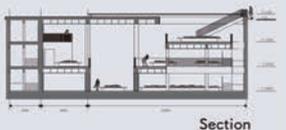


④距離感の図書館 - 匿名感 × 無限性 + 喫煙所 -



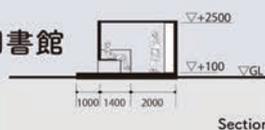
②穴場の図書館

匿名感 × 音 × 優越感



⑤隠れ蓑の図書館

匿名感 × 姿勢 × 風





街並玄関孔

敷地の中だけで建築が完結し自分たちのみ良い環境を作ることとは、都市をつまらないものになっていると感じる。そこに建築が建つとき、敷地境界を越えて考えることがより新しい空間の可能性を生むのではないだろうか。

孤立した街を一つの建築と見立てた時、そこであまり担保できていない都市活動や補足すべきプログラムを集約させ、街の人が常に使い続ける街の玄関としての新しい関係性を生む建築を提案する。

今埜 歩

この あゆみ

東京理科大学理工学部建築学科

都市における公共施設のあり方として、敷地周辺だけでなくもう少し大きなスケールで俯瞰して完成後のその建築の存在意義を考えることは非常に重要である。この作品は街に対して積極的に「越境」することで分断化された街を繋ぐという公共建築のあり方を模索している。単に中央に大きくヴォイドをとるのではなく、多方向に風が吹き抜けるように設けたヴォイドが空間の複雑さ、面白さを生んでいる。平面だけで完結せずに立体的にかつ分散させて設けられたこの街に求められている共用空間が、平面的な人の流れを立体的なものへと変え、この

街での活動が内部のヴォイドや外部へとあふれ出す様が非常に面白い。分断されて行われていた活動が、このヴォイドに接して配置されることで、活動同士が相まって新しい何かを生み出すことが期待できると思う。「街並玄関孔」というタイトルが一言でこの作品の意味、都市へのあり方を表しているようで作者のセンスを感じさせる。

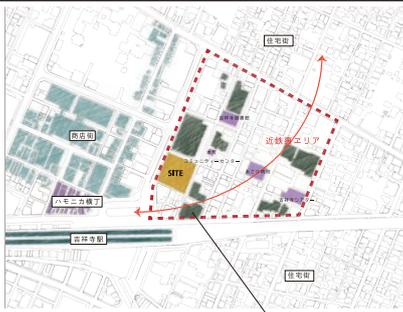


審査員：伊藤茉莉子

01. はじめに

建築が敷地の中で収まり自分達のみ良い環境を作っていくことは、街並みを画的にさせつづまらないものにしていくと感じている。そこに建築が建つとき、敷地境界を越えて考えることがより新しい空間の可能性を生むのではないだろうか。

02. 吉祥寺で孤立するエリア



東京都武蔵野市吉祥寺、近鉄裏。かつて風俗街が乱立し、現在でも環境が悪く吉祥寺の排除したいエリアとして存在している。歩車分離された大きな道路に囲われたこのエリアは吉祥寺の中でも孤立していると感じた。

03. 変化する街並みの中で



“近鉄裏”は現在、老朽化により建て替えの時期を迎える建物が多く存在し、再開発されていく中で街並みが大きく変わりつつある。敷地は現在駐輪場が多くとられ、今後再開発されるであろうエリアを選定する。

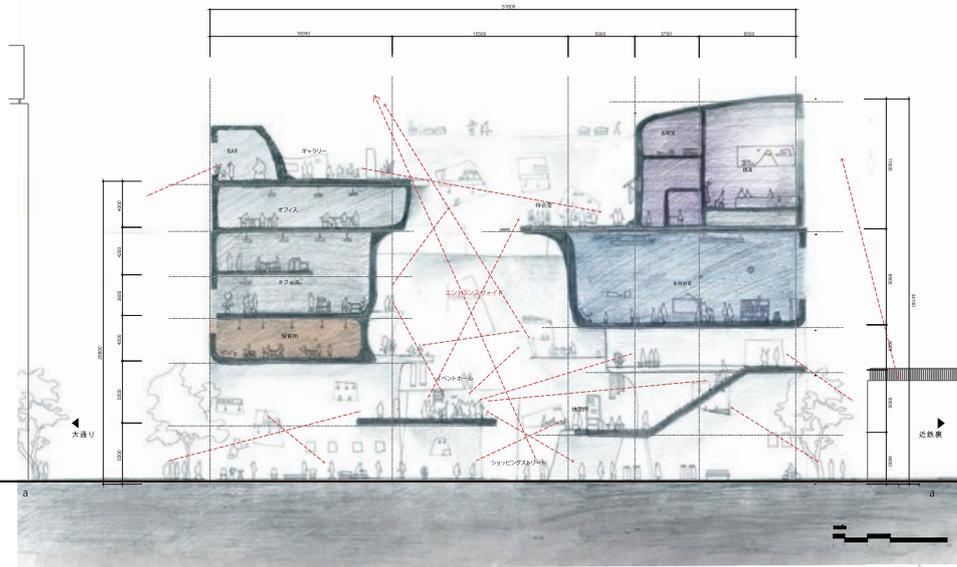
吉祥寺の再開発
吉祥寺では、大きな街区に対して再開発が行われている。その中で、近鉄裏には昔から愛されてきた小さな店舗も多く存在し再開発の中できえつつある。

04. 近鉄裏を一つの建築ととらえる



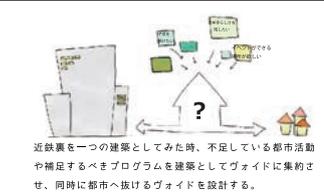
近鉄裏は駅からの至近であり、住宅街との間にある。近鉄裏を一つの建築と考えた時、ただ延床を増やす事に価値を見出すのではなく孤立した街に対して街の人が常に使い続ける街の玄関としての建築がこの敷地にはあるべきだと考える。

街と連続した、ただ通り抜けるだけではない空間立体性



基盤の目的吉祥寺の街区に対し、斜めは道を引き込むことでこの建築は近道となる

05. 近鉄裏と吉祥寺をつなぐ玄関孔



近鉄裏を一つの建築としてみた時、不足している都市活動と補足するべきプログラムを建築としてヴォイドに集約させ、同時に都市へ接するヴォイドを設計する。

06. 断面図ダイアグラム



都市へのエントランス 都市の共有空間が追加されるヴォイドがある。ヴォイドが分岐する。

空間としてのヴォイド 余剰空間はスラブが自由に入り、オフィスや店舗となる。

07. 空間構成



エントランスヴォイド、大空間のヴォイド、大空間のヴォイド、余剰空間のオフィス、店舗3つの空間で構成される。ヴォイドは下層階では内側にファサードを上層階では外側にファサードをつくる。



まちなみげんかんこう
街並玄関孔
都市の風景に一つの巨大な風穴が空いた時、それは街の玄関となり分断されていた都市と都市を結びつける。



ヒューマンスケールを超えた共有する都市のワルルーム空間



ヴォイドを通し本来無関係の吉祥寺の活動までも隣接していく

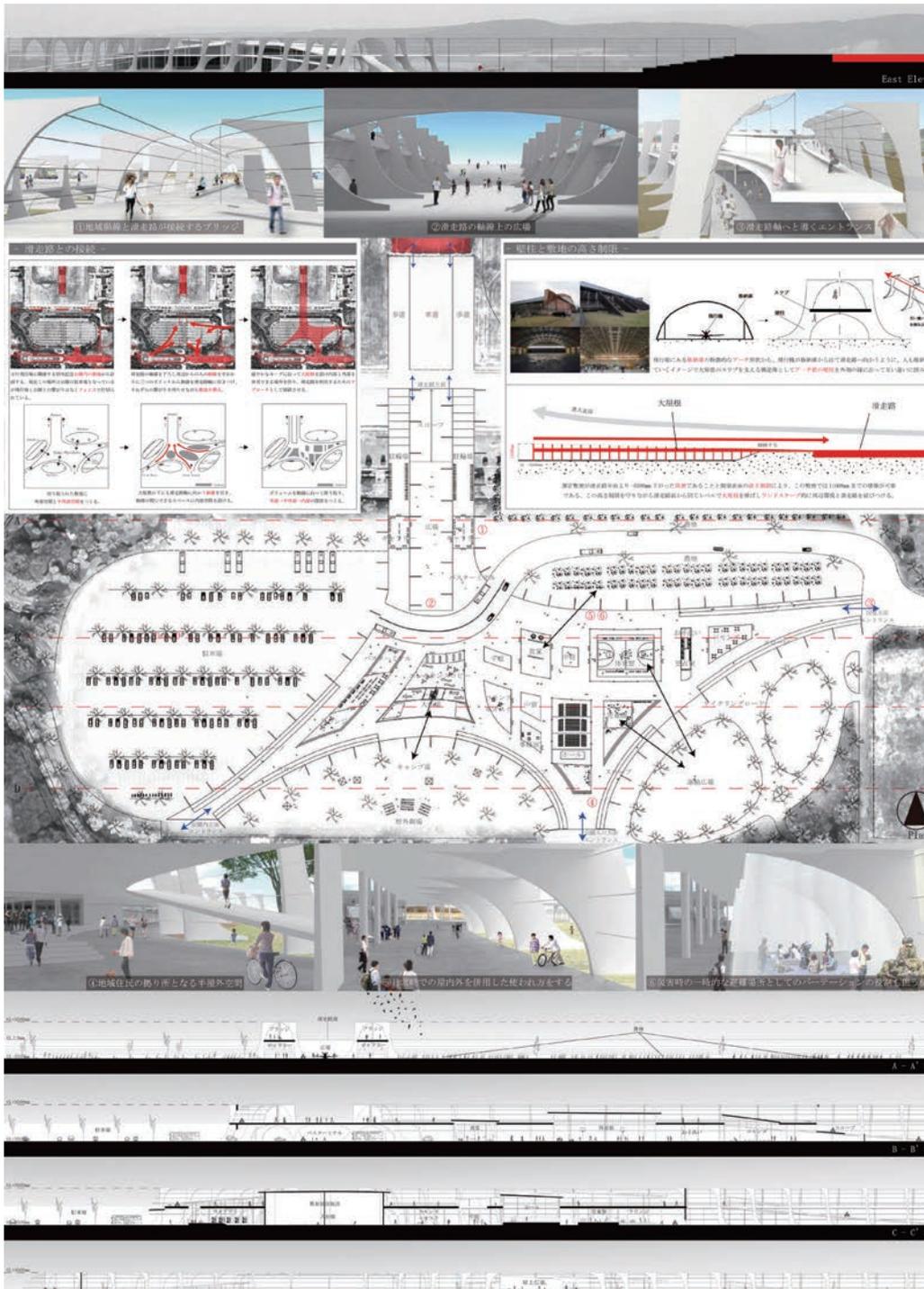
ヴォイドは内へ外へと裏表なく展開していく。

広がりのある水平面に対し外部空間を介し一体的に平面を使う動的プログラムが展開する。3つの空間が混ざり合うことで、本来得られない需要を生み出すことができる。

Runway

—街の高揚—

都市空間において広大なスペースをもつ滑走路のあり方を見直したい。私の地元の街である東京都立川市には陸上自衛隊立川駐屯地の一部に全長約 1,300m の滑走路があり、ヒューマンスケールを超えた大らかな風景に幼い頃から愛着がある。この場所は現在有事以外での日常的な飛行機の離着陸が行われておらず、街の大きな空地となっている。周辺地域からネガティブなイメージももたれるが、空地であることをメリットにそこが日常的に街の公共空間として利用され周辺環境との関係性をつくることを目的としたい。街と滑走路の境界に点在する建築が人々の大きな受け皿として拠り所をつくり、街の新しいネットワークを生み出す。そしてこの空地は残り続ける。



都市空間において広大なスペースをもつ滑走路のあり方を見直したいという挑戦的なテーマだ。その意欲と熱意は伝わったが、私には、その意欲を超えるような創造的な建築提案の魅力を感じるに至らなかった！と、作者の今後の成長のためにも、あえて厳しい意見を言おう。敷地は立川駐屯地の全長約 1,300m の滑走路エリア、その滑走路に徹底して向き合うことを避けるかのように、提案は、「滑走路」そのものはイベント行為に留まり、滑走路周辺部に焦点を移して、関連施設（コミュニティ施設など）をつくるに留まっている。「滑走路」から逃げたのではないかと感じてしまう。「滑走路」上に建築としてつくることは前提としないまでも、むしろ、「無理やりつくらないことの意味」を探求し、かつ強化できなかったのだろうか。例えば、環境技術（地熱利用、クールピット、遮熱耐熱舗装、路盤での太陽熱利用、地下シェルター利用）を抱き込む方法もあったのではないか。近未来の「建築 + 環境 + 構造とランドスケープと土木」が融合した、新しい都市のあり方を示唆するところまで、提案が届けば、さらに良かったのではないと思う。



審査員：鳴海 雅人



児玉 大樹

こだま だいき

千葉職業能力開発短期大学校住居環境科

時の駅

ローカル鉄道でひらける町の駅舎

チバニアンの発見により、観光地としての注目がますます多く集められている市原市。そんな市原市には小湊鉄道というローカル鉄道が市全体を縦断するように伸びていて、観光地を巡るための重要な交通手段となっている。そこでは人と人がふれあい、どこか懐かしくゆったりとした時間が流れている。しかし近年、小湊鉄道の利用者は年々減少し、小湊線沿線の地域における少子高齢化によって市原の豊かな田園風景が失われようとしている。そこで小湊鉄道の利用を促し、市全体を活性化させるような新たな駅舎を計画する。

本計画では、駅を二つの対象的な空間に分け、その対比によってまるでタイムスリップしたかのような空間を作り、小湊鉄道の利用を促すような提案を考えた。

小湊鉄道は終点の駅の一つである五井駅はJRと私鉄を結ぶ異なるスケール感の駅が共存するイメージがあります。駅を二つの対象的な空間に分け、対比するという着眼点は大変興味深く、楽しいアイデアだと感じました。しかし、その棲み分けは少し、短絡的でデザインをまとめていくための方法が安易に感じた事と、そのような二つのテーマに対してもう少し、掘り下げてデザインにこだわると、他の楽しみが見つかったのではないかとも思いました。また、一番チャレンジしてもらいたかった空間としては、その二つの対比空間をつなげるブリッジ、

駅そのものがどのようにあるべきなのかを創出してもらいたかったと感じました。発想を具体化していく中でもう一度初めのコンセプトと向き合い、そのコンセプトがしっかりと伝わるデザインになっているかを、見つめなおせるとより、魅力的な駅舎になったと思います。



審査員：磯野 智由

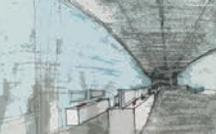
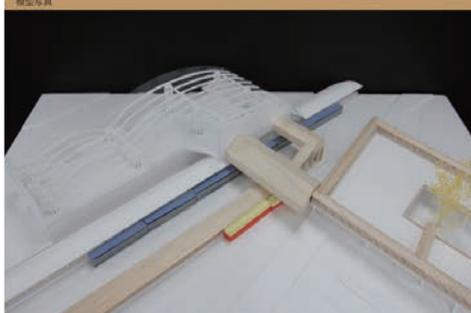
平面計画

<p>展示資料館 展示資料館は展示室、受付カウンターを併せて、1階に設けられた。展示室は展示資料を展示するためのスペースであり、受付カウンターは展示資料の受付と案内を行うためのスペースである。</p>		<p>レストラ 展示資料館の隣にレストランを設け、展示資料館と一体となった空間を創出した。</p>	<p>アートギャラリー 展示資料館の隣にアートギャラリーを設け、展示資料館と一体となった空間を創出した。</p>		<p>アトリウム 展示資料館の隣にアトリウムを設け、展示資料館と一体となった空間を創出した。</p>
<p>小規模展示室 展示資料館の隣に小規模展示室を設け、展示資料館と一体となった空間を創出した。</p>	<p>2階内装飾ホール 展示資料館の隣に2階内装飾ホールを設け、展示資料館と一体となった空間を創出した。</p>	<p>エントランス 展示資料館の隣にエントランスを設け、展示資料館と一体となった空間を創出した。</p>	<p>特産品売場 展示資料館の隣に特産品売場を設け、展示資料館と一体となった空間を創出した。</p>	<p>小規模展示室 展示資料館の隣に小規模展示室を設け、展示資料館と一体となった空間を創出した。</p>	<p>広場 展示資料館の隣に広場を設け、展示資料館と一体となった空間を創出した。</p>

断面



シーン

 <p>アートギャラリー</p>	 <p>展示資料館</p>	 <p>模型写真</p>	 <p>レストラン</p>	 <p>アトリウム</p>
 <p>展示資料館</p>	 <p>レストラン</p>		 <p>展示資料館</p>	 <p>アトリウム</p>



奨励賞



小池 翔太

こいけ しょうた

千葉工業大学工学部建築都市環境学科

表出する感覚

—歪んだ建築空間—

19世紀末、ただ広だけの何も無い空間で眩暈や不安感にかられる「広場・空間恐怖症」が流行した。現代はどんな場所でも心地よく安心して利用している。私はこの状態を「広場・空間安心症」と呼ぶことにする。

「まち」、「歴史」などといったテーブルから抑制されたものは徐々にそのテーブルから落ちてゆき、忘れ去られてゆく。

私は、歴史の観察者となり、そのまちを探ってゆく。

どんなに栄えているまちでも、どんなに賑わっているまちでも、人々がいないがしろにし、捨ててきた小さな風景や環境は存在する。

人々は見て見ぬふりをした。

私は、忘れ去られた歴史を繋ぎ合わせ、表出させてみる。それは、怖さや、気持ち悪さとは少し違う。置き去りにした記憶が蘇ってくる。

私たちの次の行動や、明日を少し変えるような。

まちに『ささやかな建築を添えて。』

荒川修作とマドリン・ギンズの養老天命反転地が最近イメ映えするという事で脚光を浴びているという。この提案はこうした、体験型アートと少し共通点があるのを感じた。都合が良い環境に慣れてしまうとその環境の良さに慣れ、気づくことができなくなる人間の欲望。不都合があることで気がつく、建築の大切な意義。都市に潜む記憶の片鱗を基に都市的にその概念を展開していくことで生まれる何か、普段感じることのない何かを感覚的に感じ取る装置の提案。そのような仕掛けを作る一つの方法論を提案している。なかなか哲学的な発想であり、

その結果生み出される何かがもう少し伝わってくるとより高い評価につながったのではないかと感じます。不都合で不思議な建築が都市に点在されたとき、街づくりに活かされるビジョンが少し見えづらかったようにも思える。今年は解り易くシンプルな提案が評価された様な気もあり、残念な結果になってしまいましたが、着眼から構想、デザインに客観性を持たせる手法やプレゼンまで力を感じます。



審査員：磯野 智由



00. はじめに

ある日の夕暮れ時、私は散歩をしているとふと換地を見つけ立ち止まりました。人気がなく、庭には手入れのされていない植物が縦横無尽に生え、街灯が二階の部屋の一角を軽く照らしていました。私は、「なんだか抽象でもいるのではないかと」と怖い気持ちになると同時に人が住んでいた痕跡を当然のように感じ、なんだかとても不思議な感覚になりました。

私たちは、高情報、高デジタル化の真只中に位置し、建築もまた同じように複雑化しています。そんな中、根元的な人間の感覚や刺激は普遍化され、感じる事が難しくなっています。例えば、SNSで誰かが「美しい」と投稿すれば、その場所は美しい場所へと変換されるのです。不思議なもの。

私がある日ふと感じた感覚は誰にでもあり、その感覚が自ずと表出するようなそんな建築が必要であると考え、本研究の題材としました。

01. 問題提起

19世紀末、「広場・空間意識」という言葉が流行しました。ただ広い空間や、自由すぎる空間では何をしたいのかわからなくなり、不安や不快感を感じさせるものでした。

一方現代は、そのような自由な空間に慣れず、居心地の良い空間として安心して利用しています。私はこの状態を仮に、「広場・空間安心症」と呼ぶことにします。これは、個人の感覚や刺激を刺激し、何が自分のかをわからなくしています。私はこのような状態を打破する建築が必要なのではないかと考えました。



広場恐怖症の時代



広場安心症の現代

03. 選定地域

全国的に見て、埋め立てられベッドタウン化した地域は町や人の変化に気づかず、「安心」になりやすい場所であると考えます。そこで、私が選定した地域は千葉県安房郡です。この町は、水産資源地の元町、埋め立てられベッドタウン化した新興、南・工業地域で構成されています。

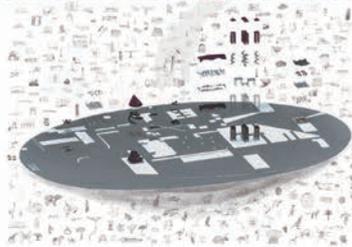
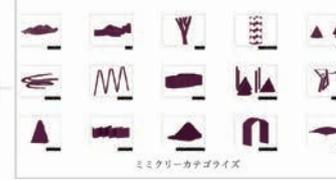
この町はそれら3つの地域が分断され、人々は互いに開きを取りとれません。

選定する千葉県安房郡の全体に点在するように、8つの個人の感覚が表出するような小さな建築を提案します。



04. 設計手法

町の中で、忘れられた痕跡(トマソン)を市内から165個探出し、15個にカタゴライズしたものと、人々が暮らしやすくなるために探出した環境(ミミタリー)をスケッチや考察の中から15個にカタゴライズしたものを表出させ、組み合わせることで生成しています。

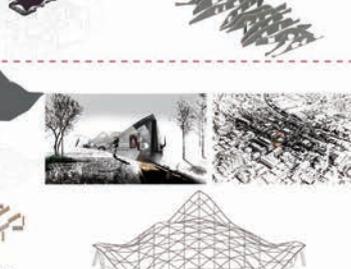
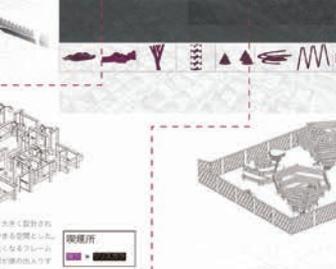
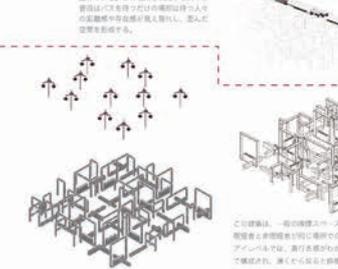
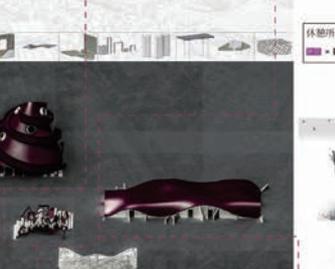
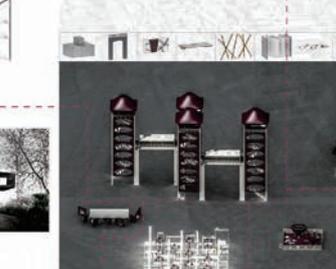
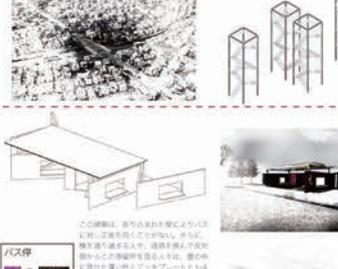


「まち」「歴史」などといったテーブルから抑制されたものは徐々にそのテーブルから落ちてゆく、忘れられてゆく。

私は、歴史の観察者となり、そのまちを探ってゆく。どんなに呆れているまちでも、どんなに賑わっているまちでも、人々がながいしに、捨てた小さな風景や記憶は存在する。

人々は見て見ぬふりをした。私は、忘れられた歴史を繋ぎ合わせ、表出させてみる。それは、懐きや、気持ち悪さとは少し違う、置き去りにした記憶が蘇ってくる。

私たちの次の行動や、明日を少し変えるような、まちに「ささやかな建築を添えて。」





池羽 七海

いけば ななみ

明海大学不動産学部不動産学科

選手村からサポート村へ

東京 2020 選手村の大会時利用と大会後利用を考えた共同住宅の提案

近年の日本は出生率が減り続け人口減少超高齢化の中、空き家は増加傾向にある。それをスポーツを通じて解決する。本提案では既に存在する原案から住棟配置や住棟規模は踏襲し、東京 2020 のオリンピックレガシーに沿って象徴的な 1 棟として計画した。選手村利用時に必要とされる用途機能から、大会終了後に継続的な価値を付加する要素や対象者、それに対する出資者も選定する。共同生活で顔を合わせやすい選手村のつくりを継続利用し大会終了後もコミュニケーションを積極的に図れる環境をつくる。対象者が明確な役割を担うことによりお互いにポジティブな影響を与えることはレガシーの延長である。モノとしての計画にとどまらず無形提案も加え選手村後を、スポーツを軸に支え合うサポート村として提案する。

東京オリンピック選手村に建てる選手用住宅を、一時的な利用を目的でつくるべきではなく、長期的に公共住宅として使用するために設計された作品である。行政が生活者をそして生活者同士が、サポートする・サポートされる関係性を生み出しやすいプリンニングが展開されている。

良質なインフラとしての住宅整備という視点は、少子高齢化をすでに迎えている日本にとって、重要なテーマである。



審査員：関谷 和則

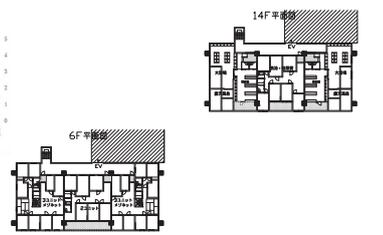
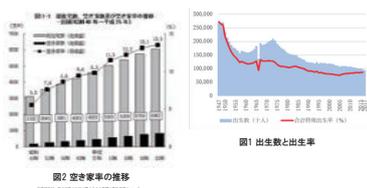
選手村からサポート村へ

東京2020選手村の大会時利用と大会後利用を考えた共同住宅の提案

背景

過去のオリンピックで使用された選手村の多くは、大会後、民間住宅として利用されることを前提として建てられてきた。東京2020もその予定だが、それに伴う問題が2つある。

1つ目は、日本の人口が減少し出生率の大幅な上昇が見込めなく(図1)、空室が増加する一方(図2)なのに居住目的の建物を建設するという点だ。東京2020の選手村利用プロセスは、東京都民間事業者から整備中(スタート状態)の住宅を一時的に借り受け選手村用の施設として内装工事を行い、大会終了後はスタートに戻し民間事業者が一般住宅として再整備するもの(図3)で、再整備にかかる廃棄物と時間の面で非常に無駄を感じた。



設計プロセス



自身の競技生活経験

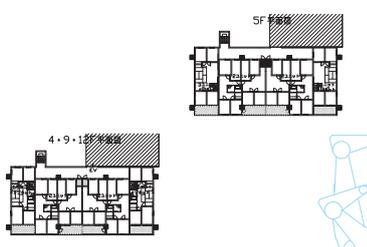
- 一部のトップ選手を除き、競技に集中できる住環境を得る難しさ
- 治療や栄養摂取(食生活)の重要性とそれらにアクセスすることの難しさ
- 大会で結果求められる選手はもっと快適なべきである

設計方針

- 大会時から大会後まで使い続けられる建物の計画(ハード)
- スポーツを通じて人がつながる関係性の計画(ソフト)

設計条件

- 公開されている既存家から、住棟配置、必要戸数の条件を引き継ぐ
- 既存家数のうち、1棟を設計する



コンセプト

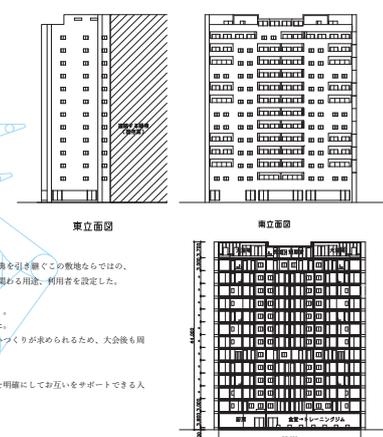
本提案では、選手村が必要とされる用途機能や利用者を検討して、スポーツの整備を引き継ぐこの敷地ならではの、エリアに継続的な価値を付加する要素として、<運動><栄養摂取><治療>に隣接する用途、利用者を設定した。

【大会時から大会後まで使い続けられる建物の計画】

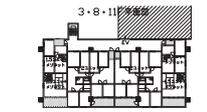
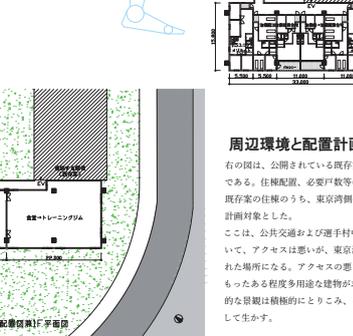
- 廃棄される設備削減のために、契約できる部分は集約して設けた(大浴場など)。
- 大会前後に求められる用途として、治療、栄養、食事、ジム、大浴場を設けた。
- 大会時には、各国の様々な地域人が共同生活をしながら、備わった施設やサービスが求められるため、大会後も周囲とのコミュニケーションを積極的に促される建物となる。

【住人がつながる関係性の計画】

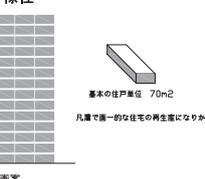
- このエリアの利用者が運動、栄養、治療などスポーツを通じて結びつき、役割も明確にしてお互いをサポートできる同居者とした。
- 収益のしくみも提示した。



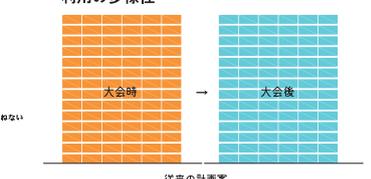
周辺環境と配置計画



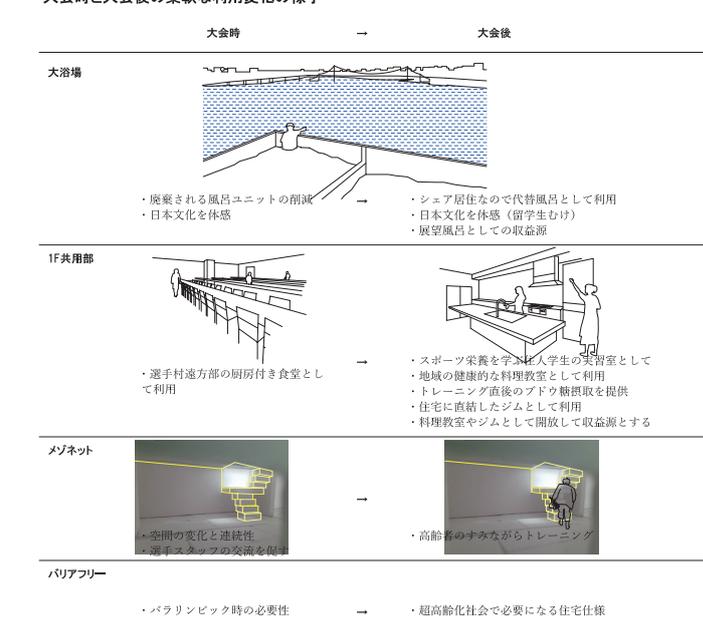
形状の多様性



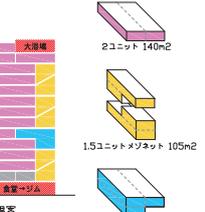
利用の多様性



大会時と大会後の柔軟な利用変化の様子



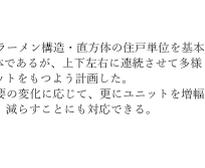
従来の計画案



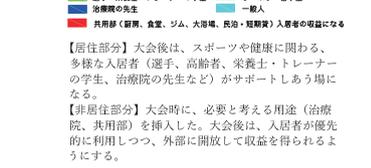
従来の計画案



今回の提案



今回の提案

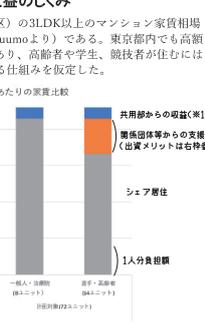


従来と同じラーメン構造・直方体の住戸単位を基本とする構造体であるが、上下左右に連続させて多様な住戸ユニットをもつよう計画した。将来的な需要の変化に応じて、更にユニットを増幅することも、減らすことも対応できる。

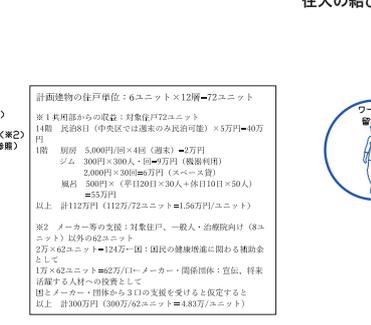
【居住部分】大会後は、スポーツや健康に関わる、多様な同居者(選手、高齢者、栄養士・トレーナーの学生、治療院の先生など)がサポートしあう場になる。

【非居住部分】大会時に、必要と考える用途(治療院、共用部)を挿入した。大会後は、同居者が優先的に利用しつつ、外部に開放して収益を得られるようにする。

費用負担と収益のしくみ



住人の結びつき



住人	大会時	大会後
選手	選手村生活	選手村生活
栄養士・トレーナーの学生	選手村生活	選手村生活
高齢者	選手村生活	選手村生活
治療院の先生	選手村生活	選手村生活
その他	選手村生活	選手村生活

審査経過



審査コーディネーター

佐々木 達郎

第30回千葉県建築学生賞は、昨年より6作品多い、23作品（7大学 12学科）で競われた。大学名を伏せての公開審査は、出展者への質疑応答を踏まえた、8名の審査委員間での討議、投票、挙手による丁寧な審査により行われた。

〈公開プレゼンテーション〉

12:00より、大型プロジェクターを利用して、1作品あたり持ち時間5分のプレゼンテーションを登録番号順に行った。2名（作品番号12.16）が欠席であったが、すべての発表者が、作品の要点をまとめ、思いが伝わるプレゼンテーションを行った。

〈審査委員による作品巡回〉

プレゼンテーション終了後、14:20より15:00まで審査委員が個別に、各作品のプレゼンテーションブースを巡回し、作品をさらに読み込んでいく質疑応答の時間とした。各審査委員が気になる作品に対し、質疑応答により作品の理解を深める重要なプロセスとなった。

〈1次審査：2次審査に進む8作品を選出〉

15:00より1次審査を開始した。全23作品を登録番号順に、8名の審査委員が、気になる作品に対し、批評していく形式で全作品へのコメント、批評後に、1回目の投票を実施（審査委員持ち点/8作



第30回千葉県建築学生賞展		一次審査								結果	
		投票 1-1									
No.	タイトル/サブタイトル	中野	鳴海	安田	関谷	園部	蒲生	磯野	伊藤	集計	結果
1	烈風のマディーナ 大地を縫い広がる街	2	0	0	0	2	2	2	0	8	
2	人間の棲 無数の空間的アフォーダンスを含む地形	0	2	2	0	0	0	2	0	6	
3	新都の船壁 バングラデシュにおける新たな複合施設の提案	0	2	2	0	2	0	2	0	8	
4	Seamless Market ベトナムに開かれた卸売市場の提案	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
5	めんめを育てる -南海トラフ地震での津波に備える孤児院の提案-	2	2	2	2	0	2	2	2	14	通過
6	flow 月と海のリズムと呼応する助産院	2	2	2	0	2	0	2	2	12	通過
7	新宿区立大久保小学校建て替え提案 小規模校の魅力を引き出す形	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
8	アーティストのための音楽ホール 響心堂	1	0	0	0	2	2	0	0	5	
9	・・・テミル。 人生をリセットする探案と思想の水族館	2	2	2	2	0	0	0	2	10	通過
10	熱海の玄関口となる、コミュニティの掘り所	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
11	わんどの庭 -海・工芸・人が結ばれる場所-	0	0	0	0	0	2	0	0	2	
12	選手村からサポート村へ 東京2020選手村の大会時利用と大会後利用を考えた共同住宅の提案	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
13	大きな樹	0	0	0	0	0	2	0	0	2	
14	月島の変化	0	0	2	2	0	0	0	2	6	
15	ふれあいの種 〜クラインガルテンが築く人々の輪〜	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
16	藍海の廻廊 海洋ごみで成長する洋上都市の提案	0	0	0	2	2	2	2	0	8	
17	「津波避難公園」の提案・警告	0	0	0	0	2	0	0	2	4	
18	園（としよかん） 余白のためのプロトコル	2	2	2	2	0	0	0	2	10	通過
19	街並玄関孔	2	2	0	2	0	0	0	2	8	
20	Runway -街の高橋-	0	0	0	0	2	2	2	0	6	
21	時の駅 ローカル鉄道でひらける町の駅舎	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
22	表出する感覚 -歪んだ建築空間-	2	2	0	2	0	0	2	0	8	
23	振る舞いを紡ぐ -変わりつつある商店街の未来-	2	1	2	2	2	2	0	2	13	通過

品に2点、準ずる1作品に1点) 15点得票1作品(作品番号5)、14点得票2作品(作品番号6.23)、13点得票2作品(作品番号9.18)の5作品を選出した。

その後、2回目の投票を実施、4点得票1作品(作品番号19)を選出し、3点得票5作品(作品番号3.14.16.20.22)が並んだため、審査委員8名が5作品に対し、各2作品を挙手する形で絞り込みを行った。結果6点得票2作品(作品番号16.20)を選出し1次審査を終えた。23作品と出展作品数が多い中、1次審査で8作品に絞り込むため、23作品全てに対し、十分な時間をかけ審議を行った。

〈2次審査：8作品から4作品を選出〉

2次審査は、選出された8作品を審査会場の中央に並べ、模型を囲みながらの審議を行った。

各審査委員の気になる作品へのコメントから、審査委員間討議を全8作品に対して順不同で行った。8作品全てに対し、一部作者への質疑も行いながら、密度の濃い討議を行った。その後、投票を実施し、23点得票1作品(作品番号5)、15点得票1作品(作品番号23)、10点得票2作品(作品番号16.20)という結果となった。

〈3次審査：2次審査投票結果から最優秀賞1作品、優秀賞2作品を選出〉

2次審査の得票結果に明確な優劣が出たことから、大差の23点得票を獲得した「めんめを育てる(5)」が最優秀賞に選出され、次点の15点得票を獲得した「振る舞いを紡ぐ(23)」を優秀賞に選出した。残りの優秀賞1枠を8から10点得票と均衡した4作品(作品番号6.9.16.20)を改めて各審査委員が1作品を挙手する形で選出、3点得票を獲得した「・・・テミル(9)」が優秀賞に選出された。

〈特別賞審査:20作品から2作品を選出〉

特別賞は、上位3作品を除く全ての作品を対象に、総合評価軸では上位3作品に及ばなかったものの、ある評価軸について抜きん出た優秀な作品を選定する賞である。

審査委員長から各審査委員に、特別推したい作品の有無が確認された。その上で、2次審査投票結果、3次審査結果を踏まえ、最優秀賞、優秀賞に次ぐ投票を獲得した2作品、「flow(6)」「塵海の廻都(16)」が順当に選出された。

〈JIA出展:3作品を選出〉

最優秀賞、優秀賞の上位3作品が、JIA全国大会出展作品に選出された。

投票1-2											二次審査											受賞
中野	鳴海	安田	関谷	園部	蒲生	磯野	伊藤	集計	挙手	結果	投票2											
中野	鳴海	安田	関谷	園部	蒲生	磯野	伊藤	集計	挙手		中野	鳴海	安田	関谷	園部	蒲生	磯野	伊藤	集計	挙手		
1	0	0	0	0	0	0	0	1			-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
0	0	1	0	0	0	0	0	1			-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
0	1	1	0	0	0	1	0	3			-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
0	0	0	0	0	0	0	0	0			-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
-	-	-	-	-	-	-	-	-		通過	2	6	4	5		4	2		23	-	最優秀賞 JIA出展	
-	-	-	-	-	-	-	-	-		通過						6	3	9	2		特別賞	
0	0	0	0	0	0	0	0	0			-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
0	0	0	0	0	1	0	0	1			-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
-	-	-	-	-	-	-	-	-		通過	3		2					3	8	3	JIA出展	
0	0	0	0	0	0	0	0	0			-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
0	0	0	0	0	0	0	0	0			-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
0	0	0	0	0	0	0	0	0			-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
0	0	0	0	0	1	0	0	1			-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
0	0		1	1	0	0	1	3			-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
0	0	0	0	0	0	0	0	0			-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
0	0	1	0	1		1	0	3	6	通過			4	1	5			10	2		特別賞	
0	0	0	0	0	0	0	1	1			-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
-	-	-	-	-	-	-	-	-		通過	1									1		
1	1	0	1	0	0	0	1	4		通過	4									4		
0	0	0	0	1	1	1	0	3	6	通過				7	1	2		10	1			
0	0	0	0	0	0	0	0	0			-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
1	1	0	1	0	0	0	0	3	4		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
-	-	-	-	-	-	-	-	-		通過	4		2	3	2			4	15		JIA出展	



大学作品リスト

- | | | | | | |
|---|---|--|----|--|--|
| 1 |  | <p>烈風のマディーナ
大地を纏い広がる街</p> <p>小室 昂久 (こむろ たかひさ)
日本大学生産工学部建築工学科
一次選考結果 二次選考結果
— —</p> <p style="text-align: center;">奨励賞</p> | 7 |  | <p>新宿区立大久保小学校建て替え提案
小規模校の魅力を引き出す形</p> <p>富山 瑛太 (とみやま えいた)
千葉工業大学工学部デザイン科学科
一次選考結果 二次選考結果
— —</p> <p style="text-align: center;">奨励賞</p> |
| 2 |  | <p>人間の棲
無数の空間的アフォーダンスを含む地形</p> <p>近藤 俊暢 (こんどう としのぶ)
東京電機大学情報環境学部情報環境学科
一次選考結果 二次選考結果
— —</p> <p style="text-align: center;">奨励賞</p> | 8 |  | <p>アーティストのための音楽ホール 響心堂</p> <p>田中 章仁 (たなか あきひと)
千葉工業大学工学部建築都市環境学科
一次選考結果 二次選考結果
— —</p> <p style="text-align: center;">奨励賞</p> |
| 3 |  | <p>新都の船壁
バン格拉デシュにおける新たな複合施設の提案</p> <p>赤堀 厚史 (あかぼり あつし)
日本大学理工学部海洋建築工学科
一次選考結果 二次選考結果
— —</p> <p style="text-align: center;">奨励賞</p> | 9 |  | <p>・・・テミル
人生をリセットする探索と思想の水族館</p> <p>小野 詩織 (おの しおり)
日本大学生産工学部建築工学科
一次選考結果 二次選考結果
○ ○</p> <p style="text-align: center;">優秀賞</p> |
| 4 |  | <p>Seamless Market
ベットタウンに開かれた卸売市場の提案</p> <p>下泉 浩太 (しもいずみ こうた)
千葉大学工学部都市環境システム学科
一次選考結果 二次選考結果
— —</p> <p style="text-align: center;">奨励賞</p> | 10 |  | <p>熱海の玄関口となる、コミュニティーの拠り所</p> <p>松本 竜太 (まつもと りょうた)
千葉工業大学工学部デザイン科学科
一次選考結果 二次選考結果
— —</p> <p style="text-align: center;">奨励賞</p> |
| 5 |  | <p>めんめを育てる
—南海トラフ地震での津波に備える孤児院の提案—</p> <p>小島 帆南海 (おじま ほなみ)
千葉大学工学部都市環境システム学科
一次選考結果 二次選考結果
○ ○</p> <p style="text-align: center;">最優秀賞</p> | 11 |  | <p>わんどの庭
—海・工芸・人が結ばれる場所—</p> <p>山内 颯 (やまうち はやて)
日本大学短期大学部建築・生活デザイン学科
一次選考結果 二次選考結果
— —</p> <p style="text-align: center;">奨励賞</p> |
| 6 |  | <p>flow
月と海のリズムと呼応する助産院</p> <p>山名 美月 (やまな みづき)
東京理科大学理工学部建築学科
一次選考結果 二次選考結果
○ ○</p> <p style="text-align: center;">市民賞</p> | 12 |  | <p>選手村からサポート村へ
東京 2020 選手村の大会時利用と大会後利用を考えた共同住宅の提案</p> <p>池羽 七海 (いけば ななみ)
明海大学不動産学部不動産学科
一次選考結果 二次選考結果
— —</p> |

特別賞

なの花賞

市民賞

JIA 全国大会出品



大きな樹

下野 真緒 (しもの まお)
千葉職業能力開発短期大学校住居環境科
一次選考結果 二次選考結果
— —

奨励賞



月島的变化

小山 竜二 (こやま りゅうじ)
東京電機大学未来科学部建築学科
一次選考結果 二次選考結果
— —

奨励賞



ふれあいの種 ～クラインガルテンが築く人々の輪～

宇津 里緒奈 (うつ りおな)
日本大学短期大学部建築・生活デザイン学科
一次選考結果 二次選考結果
— —

奨励賞



塵海の廻都 海洋ごみで成長する洋上都市の提案

黄 起範 (ふあん りの)
日本大学理工学部海洋建築工学科
一次選考結果 二次選考結果
○ ○

特別賞



「津波避難公園」の提案・警告

秋山 竜汰 (あきやま りゅうた)
東京電機大学情報環境学部情報環境学科
一次選考結果 二次選考結果
— —

奨励賞



園 余白のためのプロトコル

新井 育実 (あらい いくみ)
千葉大学工学部建築学科
一次選考結果 二次選考結果
○ —

奨励賞



街並玄関孔

今埜 歩 (このの あゆみ)
東京理科大学理工学部建築学科
一次選考結果 二次選考結果
○ —

奨励賞



Runway 一街の高揚一

石井 亨和 (いしい あきかず)
東京電機大学未来科学部建築学科
一次選考結果 二次選考結果
○ —

奨励賞



時の駅 ローカル鉄道でひらける町の駅舎

児玉 大樹 (こだま だいき)
千葉職業能力開発短期大学校住居環境科
一次選考結果 二次選考結果
— —

奨励賞



表出する感覚 一歪んだ建築空間一

小池 翔太 (こいけ しょうた)
千葉工業大学工学部建築都市環境学科
一次選考結果 二次選考結果
— —

奨励賞



振る舞いを紡ぐ 一変わりつつある商店街の未来一

石井 康平 (いしい こうへい)
千葉大学工学部建築学科
一次選考結果 二次選考結果
○ ○

優秀賞

JIA 全国大会出品



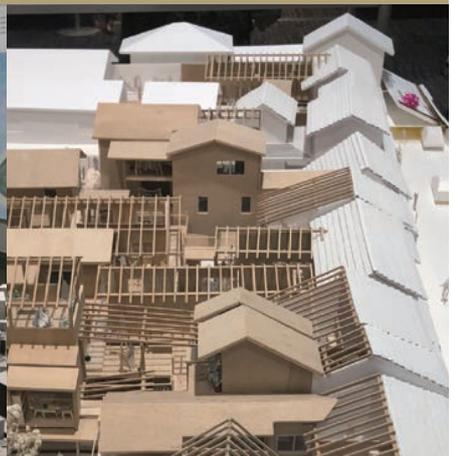
審査結果・なの花賞



最優秀賞

めんめを育てる

小島 帆南海



JIA 全国大会出品

小島 帆南海

小野 詩織

石井 康平



なの花賞

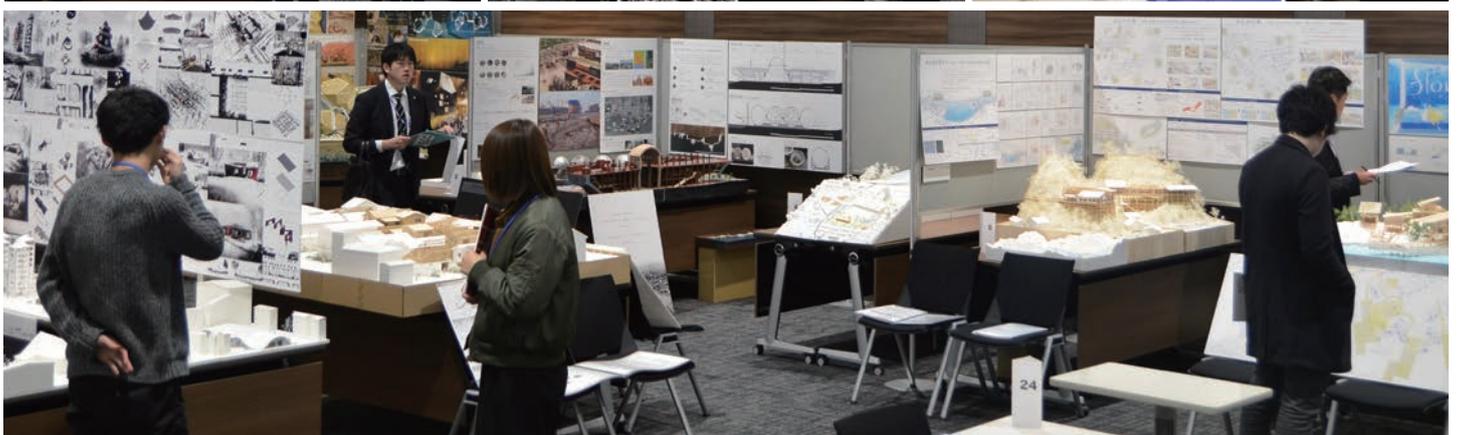
flow 山名 美月

なの花賞は、過去の千葉県建築学生賞への出展者で構成する会員のなかで、審査会当日に発表を公聴したり作品を見た人達が、審査会終了後に投票し討議して決定する賞である。一人ひとつ選びコメントを記入してもらう。その結果作品番号3、6、22、23が票を獲得したが、そのなかで群を抜いて票を集めたのは6番だった。6番へのコメントには「女性ならではの着眼点」や「ランドスケープと呼び出した美しい情景」などがあった。

6番の「Flow」は、壮大な自然の摂理を手がかりに美しい建築を導きだしており、その展開は秀一である。全体の様子は複数の建築が分散した配置だが、ひとつひとつの建物は屋根+ボリューム+栈橋デッキという単純な要素でできており、一見複雑そうにも見えるが、様々な向きに集合しながらやわらかな構成になっている。斜面に立体的に展開しているが各居場所の役割や行動範囲についての説明があり、人の動きがしっかり想定されている。模型を見ると1本1本緻密につくられた木軸の表現が、本人が発表の中で触れていたように繊細ではかない雰囲気を作り出しており、どこか神聖さとリゾート地のような開放感を同時に感じさせる。宇宙が作り出す神秘から生命を宿す建築へとつながり、優しいイメージに帰着している。この作品から自然に抱かれるような気持ち良い感覚を多くの人が感じ、共有できるのではなかろうか。

堅実で確かな設計の力が有ると感じた作品で、よって賞に値すると思われる。

(第5回出展 佐久間達也)



高校の部 審査総評



千葉県建築学生賞協議会 副審査委員長
鳴海 雅人

記念すべき第30回にして、始めて試みた「高校の部」からのスタート

駅伝に喩えると、第1走者が、区間新記録を出したに匹敵する、驚きと鮮烈な印象を受けたのは私だけではないと思う。大学生をはじめ、多くの関係者や通りすがりのオーディエンスが見守るなか、最初のプレゼンティターは、京葉工業高校の上谷君だ。

タイミング良く、テーマも第1走者に相応しい「てをとりあって」これは、まさに、30回に及ぶ学生賞の運営を象徴するかのような、感慨深い素晴らしい言葉、まさに、「てをとりあって」私たちはこの場に集まり、みんなで、今を共有している。

メッセージは続く。「何か、「意味」を持った集合住宅を作りたい」なるほど、建築は意味をカタチするものだ。するどい。そしてメッセージは続く「その「意味」に「こども」を結び付けることにした」

なるほど、意味に、今の社会の課題をつなげたのだ。素晴らしい。さらにメッセージは続く「今の「こども」の社会問題、少子高齢化、出生数と待機児童数関係を根拠に、近所付き合いのない、住むだけの役割に近い、今の住宅建築に課題がある」

なるほど、未来を背負うこどもを育てるのに相応しい建築の問題でもある。



さらにメッセージは続く「こどもを家庭的に保育サービスを行う「チャイルドマインダー」が手を取り合い、成長を見守る、新しいスタイルの集合住宅を提案する」

なるほど、新しいスタイルの空間を見出そうとしている強い気持ちを感じた。
ここまでは、大学生以上とも言える思考のプロセスであり、素晴らしいスタートだ。後段の建築空間提案については、放射状の囲まれ感や見守り感のある空間構成は、今後、設計の精度を上げればもっと良くなると思う。

第2走者は、市川工業高校の小田君。

「まちをめぐる まちをめぐる」は、既存のお茶の水の街を（多様な視点で）めぐり、街を巡るスポットとしての魅力的な建築を提案している。

第3走者は、市川工業高校の小島君。

「黄金比の図書館」は、パルテノン神殿やサクラダファミリアにも通じる「神の比」。日頃、建築のプロポーショナルを試行錯誤している私から見ても、美しいプロポーショナルを目指して図書館建築を作ろうという試みは素晴らしい。

第4走者は、市川工業高校の小田君。

「自然に奪われて、祝われて」は越前高田市の「軌跡の一本松」＝象徴的な頼りをきっかけに、祝祭空間に辿りつくシーケンスを独自のスケッチで見事に表現している。

第5（最終）走者は、東総工業高校の浅見君。

「旭市立美術館」はまさに、旭市の地勢や風土を読み取り、美術館のなかで、旭市の特産物や郷土料理などが味わえる、コミュニティミュージアムとして新たな建築に挑戦している。

5人全員が大学生も顔負けの思考プロセスで、プレゼンが行われたのだ。

最後に建築に落とし込むところでは、高校生らしい、決して緻密とは言えない設計精度が出てしまったのは、やむを得ないだろう。審査会においては、すべての5作品においては、大きな差異はなく、基本的には、全員が銅メダル以上を獲得した。微差のレベルで、金銀銅にさせていただいた。

高校生を指導していただいた教官も、今まで以上にレベルアップした教え子の姿を見て、驚いているのではないかと思います。考える道筋、モチベーションなど、

建築に向かう適切な指導がなされたのではないかと思います、感謝申し上げます。

第31回においても、高校生らしい、かつ、高校生を超越した、社会に問う「意味」のある建築提案がプレゼンされるのを、今から心待ちにしている。

金賞

高校



小田 瑞葵

おだ みずき

千葉県立市川工業高等学校 建築科

まちをめぐる、まちをめぐる

～街の回遊性を高める空地的建築群～

御茶ノ水の街をめぐって見えたものは『楽器街』だ。
御茶ノ水の楽器街をめぐって見えたものは『回遊性』だ。
お茶の水・神田地区は、楽器、古本、CD、カレー、スノーボードやそのほかにもたくさんのお店が存在する。趣味に特化した素晴らしい街である。しかし、それらが個々で存在し、うまくいかされていない。現状の街の下に隠れている素晴らしいストックを、出現させるためにめくってみた。

楽器屋さんが点在するお茶の水の街をさらに魅力的なまちにするために、「街をめぐる」をコンセプトした5つの小さな建物を挿入する良作である。軽音楽部のバンドマンとして、お茶の水の楽器屋さんをめぐる自らの経験に基づき、どうすれば「街を回遊する面白さ」をさらに強化できるかを考え、カタチに昇華させている。まちのスケール感に調和させるデザインを展開しており、高校

生ながら都市空間に対して「建築に何ができるのか」をきちんと考えており、素晴らしい。



審査員：関谷 和則

まちをめぐるまちをめぐる ～街の回遊性を高める空地的建築群～

御茶ノ水の街をめくって見えたものは『楽器街』だ。
御茶ノ水の楽器街をめくって見えたものは『回遊性』だ。

御茶ノ水の楽器街の現状

1. 基本的に売られているものを『見る』『買う』以外のアクションが街になく音楽に特化した性質を生かし切れていない。
2. 街の特徴から似た趣味の人々が集まりやすい傾向にあるが、それらの人々をつなげる場としての機能はない。
3. 店をめぐる楽しみがあるが、店の件数から長時間滞在をすることが多い。しかし小休憩する場がなく疲れる。

解決策

1. 『見る』『買う』以外の新しいアクションを持つ施設を与え、より音楽に特化した街にする。
2. 趣味をつなげる場を設け、新しいコミュニティの形成を図る。
3. 小規模の施設を街に点として配置することで、以前から持つ街の『めぐる楽しみ』を損なわず、高める。

お茶の水・神田地区は、楽器、古本、CD、カレー、スノーボードやそのほかにもたくさんのお店が存在する。趣味に特化した素晴らしい街である。しかし、それらが個々で存在し、うまくいかされていない。現状の街の下に隠れている素晴らしいストックを、出現させるためにめくって見た。



楽器街を支える施設を分散させることで街の回遊性を高めたいと考えた。

今までは、楽器屋さんを
巡ったら帰るだけだった...

これからは、たくさんの
ルートができる。

- 凡例
- 楽器屋さん
 - カレー屋さん
 - 公園
 - 古本・中古CD
 - 今までの歩き方
 - これからの歩き方

A) ポップアップショップ



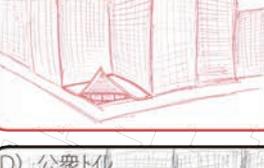
物の溢れている御茶ノ水の楽器街。ここで短い期間で入れ替わり違うものを売る。楽器街という安定した『いつもあるもの』に加えて、この限定的な『今日この日、来た時にしかないもの』があることによって特別感が出る。この特別感を求めて、今までにない回遊のルートが生まれる。

B) 音楽スタジオ



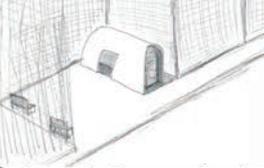
楽器街に弾くという行動を加えた。それにより、さらに楽器街としての特色が色濃く鮮明になる。長時間の利用ではなく比較的短時間での利用にすることで、気軽に利用できる街に繰り出す時間も増える。

C) 工房



楽器街に『作る』という行動を加えた。ここでは、簡単な弦の交換や周辺用品の取り換えなど軽作業を行うことができる。上から覗き見ることができ、その作業が見える。また、作業スペースを区切らないことにより、他の人の作業も見え、そこに新しいコミュニティが生まれる。

D) 公衆トイレ

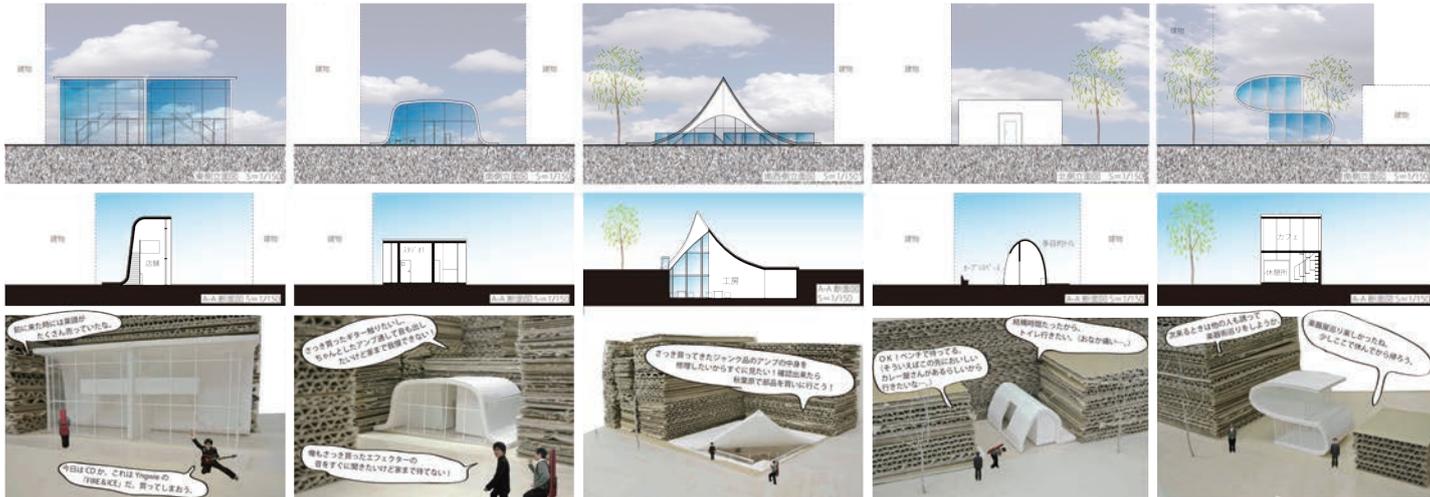


駅から離れた楽器街の先端に当たる場所にある。この先にはウィントースポーツ街や神保町の古本屋、カレー屋などが並んでいる。トイレを誘ませベンチで小休憩をほさんだ後、人々は別の趣味の世界へと入っていく。

E) 休憩所&カフェ



1Fが休憩所、2Fがカフェになっている。休憩所の壁面には音楽雑誌が多く入っている本棚があり、訪れた人々は本のページをめくりながら休憩する。そこで、より深い共通の趣味の人と出会う新たなコミュニティが生まれる。





水野 誉也

みずの もとや

千葉県立市川工業高等学校 建築科

自然に奪われ、祝われて

自然の猛威によって大切な人、大切な故郷を失った人々の悲しみは、どんなに時間が経ってもどんなことをしようとも完全には無くならないであろう。しかし、幸せを感じることで、ほんの少しだけ悲しみが軽くなるのではないか。人に祝ってもらった瞬間は誰でも幸せな気持ちになる。美しい自然に囲まれて、誕生日やちょっとした記念日、結婚式などを祝ったり祝われたりすると、きっと悲しみよりも幸せの方が大きくなるはずだ。

この作品のプレゼンテーションを目にした時、本当に高校生の作品なんだろうかと素直に思った。物語を描くように建物へのアプローチが計画され、実際にこの足でその地を歩いているかのような錯覚にさえ覚える。スケッチと着彩により震災の悲しみの記憶とは真逆の美しい世界が表現されている。震災の事を永遠に忘れぬよう慰霊碑や祈りの空間とするのではなく、祝いの空間としたことが作者独特の慰霊の方法なのであろう。悲しみを幸せを感じることによって軽くしてあげたいその発想そのものがこの作品を美しいものへと変えているのだと思う。コンクリート造と木造を巧みに使い分け、構造にまで考

えが及んでいることが完成度の高さを示している。力強いコンクリートの壁は自然に開かれた形状で配置され、軽やかな木造の屋根がそれを包み込む。屋根の頂点が震災時の津波の最高高さを表しているという記憶の刻み方が何ともさりげなくて好感がもてる。

作者が大学で建築をより学んだ後に発表する卒業設計はどんなものになるのだろうか。今から楽しみで仕方ない。



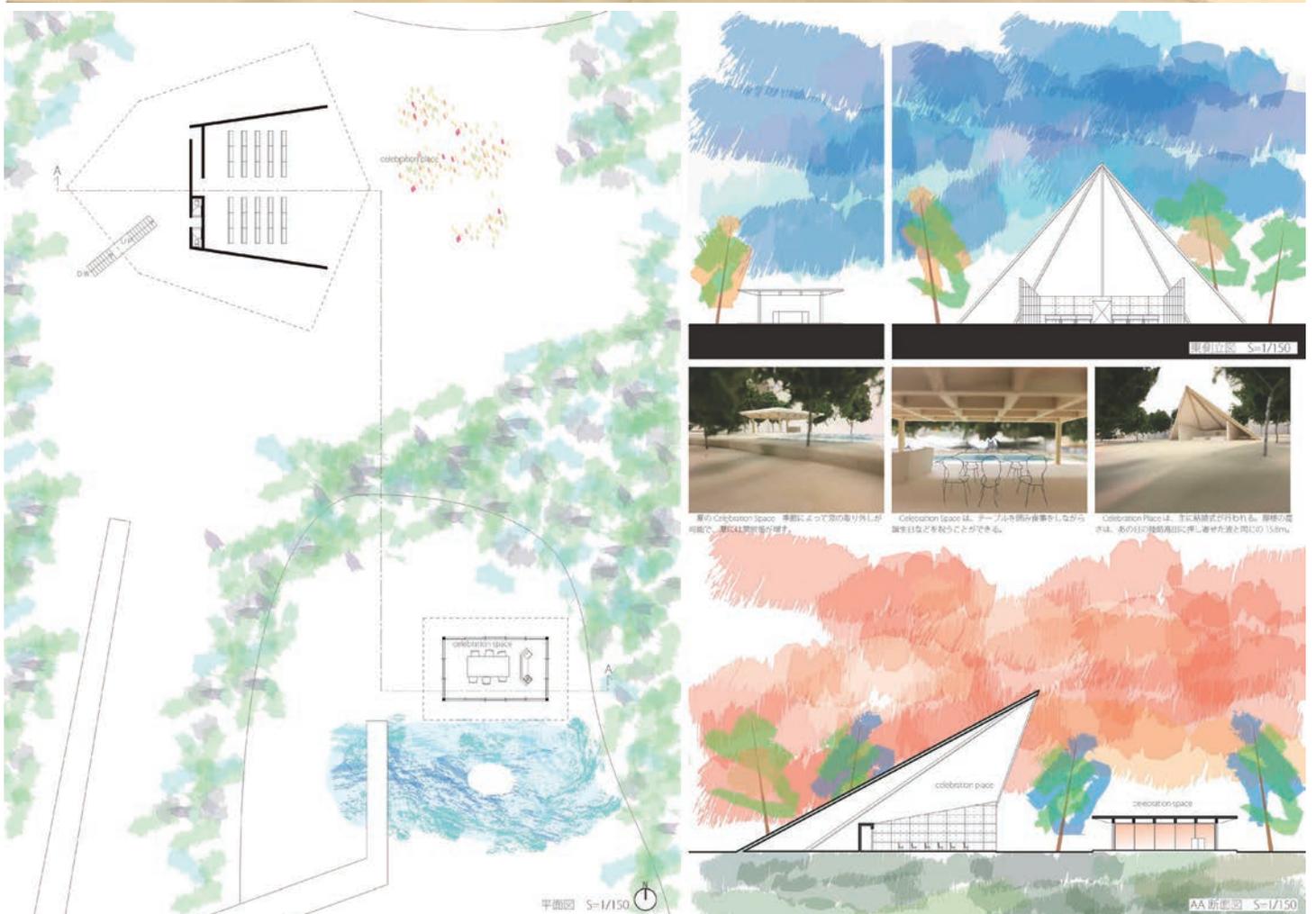
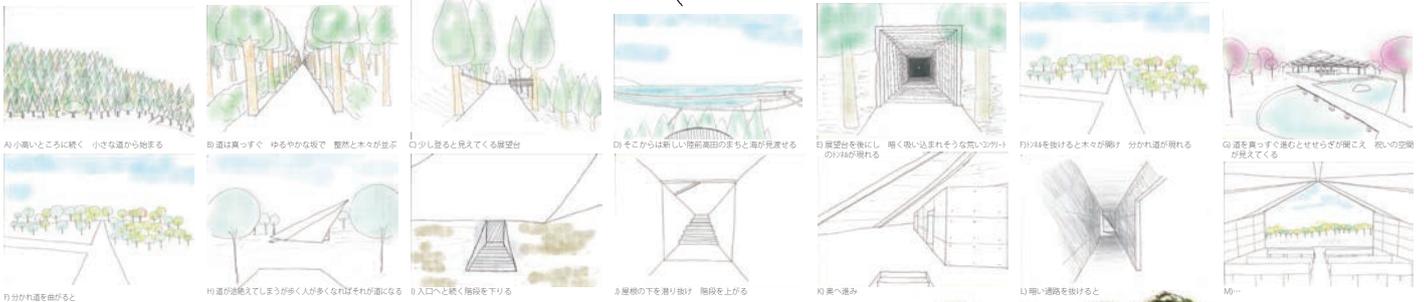
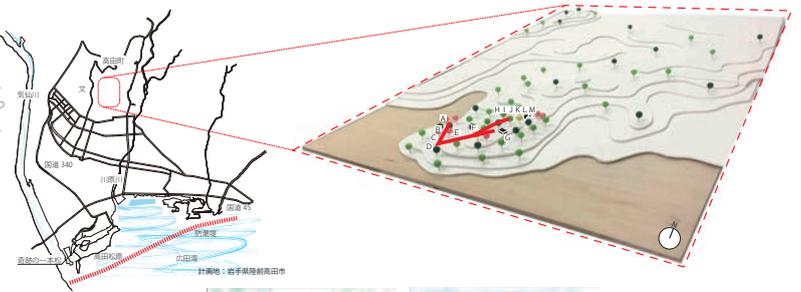
審査員：伊藤茉莉子

自然に奪われ、祝われて

自然の猛威によって大切な人、大切なもの、大切な故郷を失った人々の悲しみは、どんなに時間が経ってもどんなことをしようとも完全には無くならないであろう。しかし、幸せを感じることで、ほんの少しだけ悲しみが軽くなるのではないか。その幸せを感じる建築が「祝いの場」だ。人に祝ってもらった瞬間は誰でも幸せな気持ちになる。美しい自然に囲まれて、誕生日やちょっとした記念日、結婚式などを祝ったり祝われたりすると、きっと悲しみよりも幸せの方が大きくなるはずだ。そんな幸せを感じている時に見た自然の風景は、まるで祝福しているかの様である。

あの時咲いていた花を見るたびに、幸せな瞬間をふと思い出すであろう。

2011年のあの日から7年経つ。今もお東北では復興が進められている最中だ。わたしはそんな東北の人々のために何か心の支えとなる建築を作りたいと考えた。



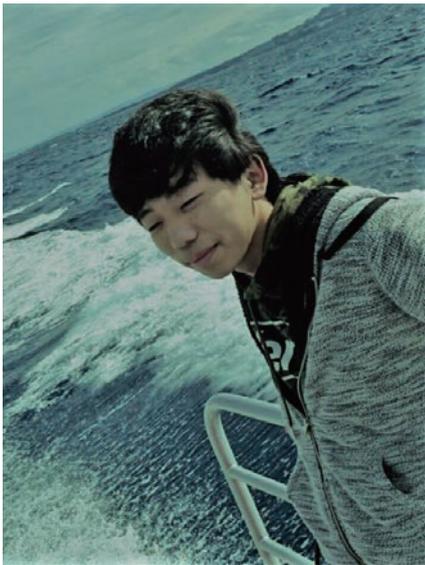
平面図 S-1/150

AA 断面図 S-1/150

銀賞

市民賞

高校



上谷 虹熙

かみたに こうき

千葉県立京葉工業高等学校 建設科

てをとりあって

～チャイルド minder を利用した「こども」を育む集合住宅～

今、社会では待機児童などの「こども」の問題が多くある。また、現代の集合住宅は近所付き合いが少なくただ住んでいるだけのように感じる。

そこで、自宅でこどもを家庭的な保育サービスを行う「チャイルド minder」と取り入れることで、昔の長屋の住人のように手を取り合い、協力しながらこどもの成長を見守るような関係を築く。

また、こどもが成長し、帰って来ても一丸となって温かく迎え入れてくれる、こどもにとって第二の家になるような集合住宅を提案する。

千葉市内の住宅が多く建設されて若い世帯が増える地域に建設する集合住宅の計画である。

意味をもった集合住宅を設計したいところから始まり保育施設が不足していることから、出生数と待機自動の数をグラフにより示し社会性をテーマとし設計されているところが素晴らしい。ここに三人程のチャイルド minder（自宅や訪問による少人数による家庭的保育）が居れば両親は安心して仕事に集中できるであろう。

一般集合住宅では隣近所との付き合いが希薄になるがコモンスペースの公園を中心としてウッドデッキを中間に挟みリビングとつなげていく自然なつながりでデッキが

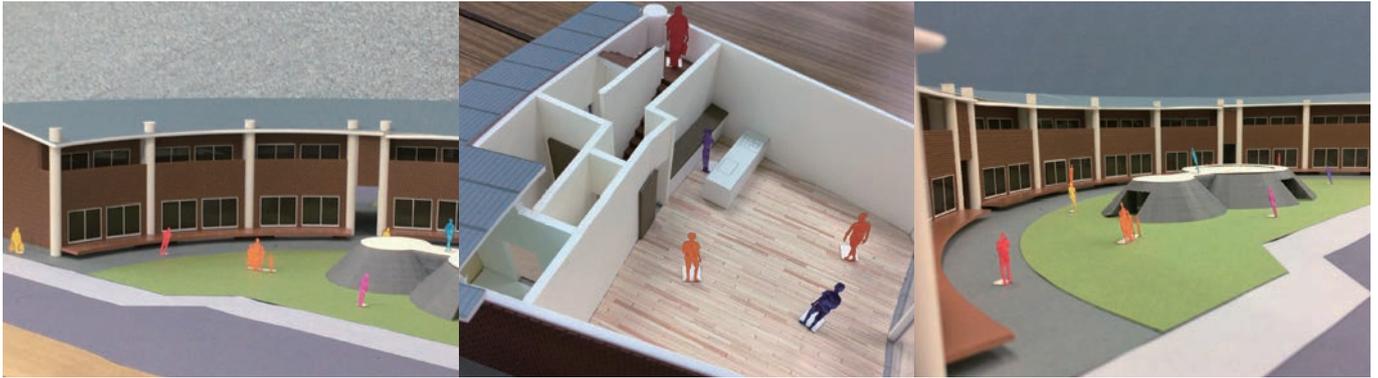
廊下となり住戸連続し隣との交流が必然的に促進されることが伺える。逆にプライバシーがどうかと思うがここはてをとりあい「こどもを育む」目的をもった住人が集う共同住宅なので問題がないであろう。上階にはプライベートな寝室が配置されてバルコニーは公園からの視線を遮るものとなっている。良く出来た円形建物の模型からも、公園中央から見るコンクリートの円柱はこどもにとって柔らかい印象を与えており、列柱がシンボリックで屋根から突き出るデザインも綺麗で設計者としての可能性を感じられる。高校を卒業してからも将来がとても楽しみである。



審査員：蒲生 良隆

てをとりあって

チャイルドマインダーを利用した「こども」を育む集合住宅の提案

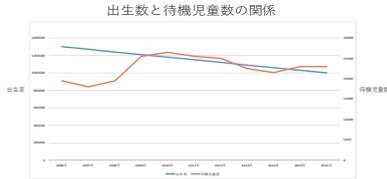


1 設計趣旨

何か「意味」を持った集合住宅を作りたい。
↓
「意味」に「こども」を結び付けることにした。

・今の「こども」の社会問題

近年、少子化社会で子供が減っている一方、保育施設が足りず、待機児童が減らない社会問題がある。



・今の集合住宅は近所付き合いが少なく、住むだけの役割のように感じる。



そこで、自宅などでこどもを家庭的に保育サービスを行う「チャイルドマインダー」を取り入れることで、集合住宅内に住むチャイルドマインダーがてを取り合い、協力しながらこどもの成長を見守る。また、こどもが成長し、帰って来てもみんな一丸となって暖かく迎え入れてくれる、第二の家のような今はない新しいスタイルの集合住宅を提案する。

2 対象敷地



敷地は住宅の多い千葉県千葉市若葉区千城台北駅周辺。この近隣には住宅が多く建てられ、若い世帯が増えると考えられる。そして、働く人が増えると待機児童も増えると考えられる。しかし、この近辺は保育施設が少ないので対象敷地とした。



・千城台北小学校



・千城台北駅

3 イメージ



チャイルドマインダーたちが公園を中心にてを取り合い、伸び伸び遊ぶ子供を見守るイメージ。

4 ダイアグラム



こどもが遊ぶ公園。

中心に広い公園があり、こどもがのびのび遊べる。



保育施設の保育室の役割を果たすリビングが公園をぐるっと囲む。

各リビングの前には広いウッドデッキがあり、ここで靴を脱いで直接中に入れる。

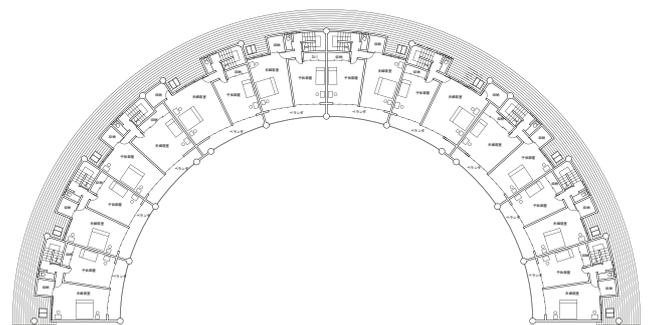
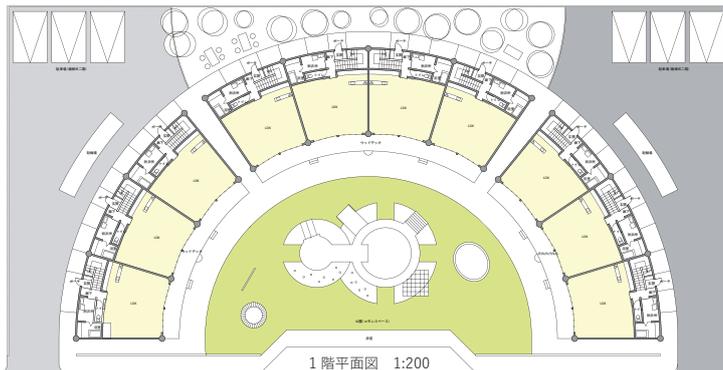


外側にプライベートスペースを設け、プライベートもしっかり守れるようにした。



リビングは広く、部屋で遊べる。また、窓も大きいので、室内にいても公園で遊ぶ子供を見守ることができる。

リビングのドアを出てから2階までプライベートスペースになっており、子供が遊ぶ場所としっかり分離されている。





小島 海月

こじま みつき

千葉県立市川工業高等学校 建築科

黄金比の図書館

「黄金比」というものをご存知でしょうか？「黄金比」とは、「 $1 : 1 + \sqrt{5}/2$ 」、近似値 $1 : 1.618$ 、約 $5 : 8$ の比をいいます。この比は、「最も美しい比」、「神の比」と言われています。

そこで私は黄金比を元に設計しました。1階あたりの高さを5m、柱のスパンを8mにしました。また、縦横を32m、56mにして比を近づけました。

ほかにも、上から見ると「黄金長方形」という、黄金比を応用した、相似な図形になるようにしました。

黄金比を利用して建物を構成していく、高校生の設計課題としては実によいスタディにも感じました。デザインの基本構成とも言える構図で、最も美しいといわれる比率を感覚的に利用できることになること。これはとても大切で、この感覚を身に付けておくと、今後のデザインワークに大きな影響を与えてくれると思います。本人もスタディしていく中で、古代のパルテノン神殿やサグラダファミリアも、そのひとつであると例を挙げていましたが、現代でも建物のみならず、広告やロゴデザインなど、さまざまな分野で利用されています。彼の案では黄金比 $1 : 1.618$ で建物を構成構成していくこと。縦、横、高さ、においてその比率で構成し、部屋もそのグリッドの

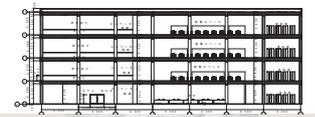
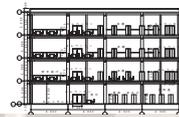
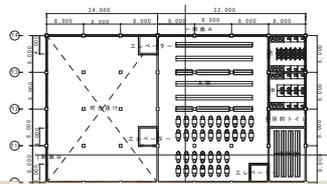
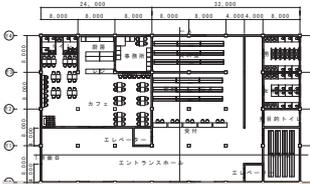
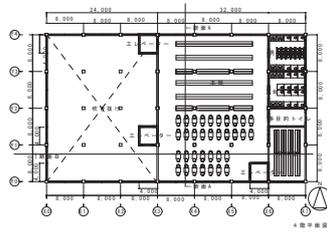
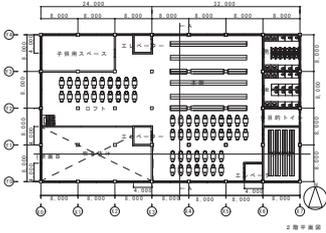
中に収めていた物です。平面図や立面図を改めてみると整然としたその間取りや構成は、非常にシンプルで興味深い図面に見えてきます。かなり割り切った考え方をしないと、こうしたシンプルでありながらダイナミックな構成はできないと思いますが、上手にまとめたと思います。もう一押し検討してもらいたかったことは、出来上がったから全体を見つめなおして、自分が一番何をしたかったのか、きれいな比率のモノリシックなBOXをどう見せたかったのか。見る人の視点を取り入れてみると、よりコンセプトチャルな設計になったのではと感じています。



審査員：磯野 智由



～黄金比の図書館～



コンセプト

皆さんは、「黄金比」というものをご存知でしょうか？
「黄金比」とは、「 $1:1+\sqrt{5}/2$ 」、近似値1:1.618、
約5:8の比をいいます。

黄金比の起源は紀元前・古代ギリシャから存在します。
この比は、「最も美しい比」、「神の比」と言われており、
パルテノン神殿やサグラダ・ファミリアにも使われてい
われています。

そこで私は黄金比を元に設計しました。例えば、1階あ
たりの高さを5m、柱のスパンを8mにしました。

また、縦横を32m、56mにして比を近づけました。

ほかにも、上から見ると「黄金長方形」という、黄金比
を応用した、相似な図形になるようにしました。





浅見 遊

あさみ ゆう

千葉県立東総工業高等学校 建設科

旭市立美術館

～旭の街を知る～

千葉県の北東に位置し、自然に囲まれた旭市。千葉県内や県外の人々はどれだけ旭市のことを知ってくれているのだろうか。

「ひとが輝き 海とみどりがつくる健康都市 旭」

旭市の将来都市像である。旭市には豊富な特産物があり、刑部岬や屏風ヶ浦の景色は素晴らしいものだ。このような自然の産物や景観に優れた旭市の街を知ってもらいたい、旭の街に足を運んでもらいたいと考え、ここに美術館の設計をした。

美術館をテーマとしたこの卒業設計の特徴は、作者が持っている旭市に対する強い愛情をベースに発想されていることです。それは、旭市特産の農作物を販売するマルシェと美術館を結びつけることで、特定の人のための美術館をみんなが集まる美術館に変えるという、大変ユニークな提案を生み出しました。

あたりまえの話ですが、建築の敷地とは大地のことです。豊かな大地が人間の生活や社会を育んできたからこそ、街や建物が存在しているのです。建築の設計をするということは、今の姿を形作った大地と人間の歴史について、

深く理解することがとても重要です。そこから新しいデザインが生まれてくるといっても過言ではありません。場所に対する深い愛情から生まれた浅見君の卒業設計は、そんな重要な種を内包しています。せっかくの種ですから、これからその種を大事の育ててください。そして、個性的な花を咲かしてください。期待しています。



審査員：安田 俊也



旭市立美術館

～旭の街を知る～

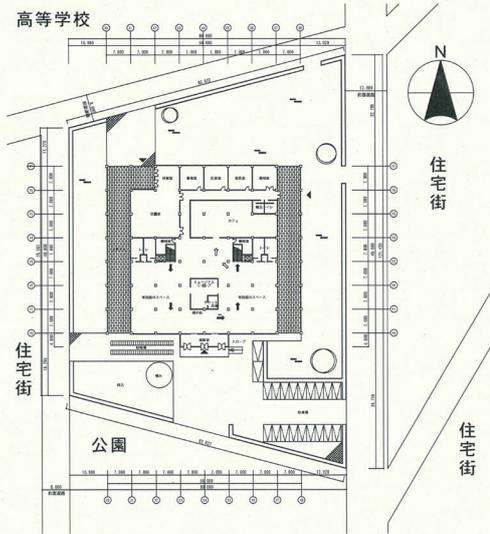
千葉県東北に位置し、自然に囲まれた旭市。千葉県内や県外の人々はどれだけ旭市のことを知っているのだろうか。

「ひとが輝き 海とみどりがつくる健康都市 旭」

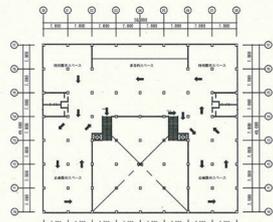
旭市の将来都市像である。農産物、畜産物、水産物を軸に豊富な特産物がある。また、飯岡灯台のある刑部岬やイギリス・フランス間のドーバー海峡に似ていることから、東洋のドーバーと呼ばれる屏風ヶ浦の景色は素晴らしいものだ。このような自然の産物に優れた旭市の街を知ってもらいたい、旭の街に足を運んでもらいたいと考え、ここに美術館の設計をした。

敷地周辺には学校や公園があり、地域の人たちが集いやすいように四方から敷地内に入ることができる。敷地内に入ると、広大な土地に駐車場、駐輪場、噴水、植込など様々な形で有効に活用することも旭市の特徴だ。旭市には盆地が多いことから、風が吹き抜けるように建物の両側にピロティが設けられている。ピロティでは、旭市が誇る特産物を市場のような形で販売するスペースを確保している。

高等学校



配置図兼1階平面図 1:500



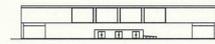
2階平面図 1:500

面積表

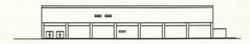
敷地面積	8,000m ²
建築面積	2,800m ²
延床面積	4,858m ²

館内に入ると、催事に関するスケジュールやポスターが掲示してあり、エントランスは吹抜けになっているので館内全体に明るさを与え、開放的な空間となっている。右側には旭市の、左側には千葉県の歴史や文化、自然、行事などを知ることができる常設展示スペースがある。1階中央のカフェは、地域の方々のコミュニケーションの場として利用することができ、旭市の特産物を使った料理を食べることができるので地域の人でなくても楽しむことができる。

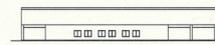
順路を進み2階へ上がると、企画展示、特別展示、多目的スペースがあり、企画展示と特別展示では春夏秋冬様々な季節を楽しむことができる展示スペースとしている。多目的スペースは体験イベントなどが開催できるように大きな空間を確保し、ステージを作った。ステージの下には収納スペースを設け、体験イベントがない普段の時には机や椅子を配置し、学生たちの学習の場としても利用できるようにした。



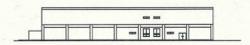
南立面図



西立面図

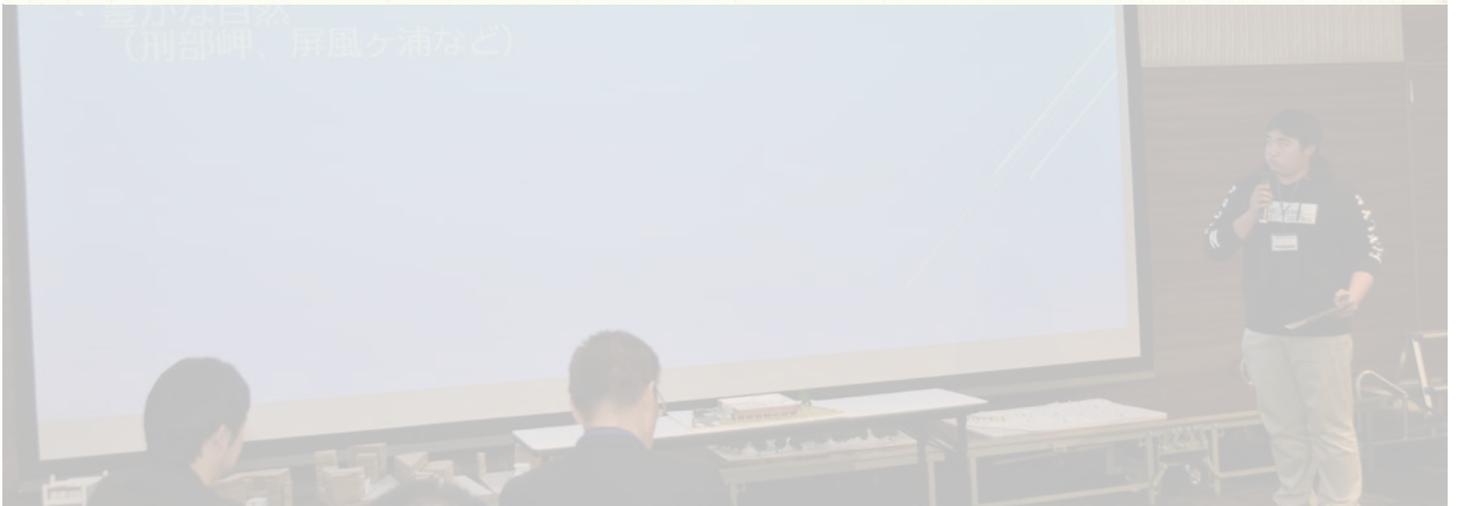


北立面図



東立面図

立面図 1:500



高校作品リスト・審査結果

高校

1



てをとりあって
 ～チャイルドマインダーを利用した「こども」を育む集合住宅～
 上谷 虹熙 (かみたに こうき)
 千葉県立京葉工業高等学校 建設科

銀賞 市民賞

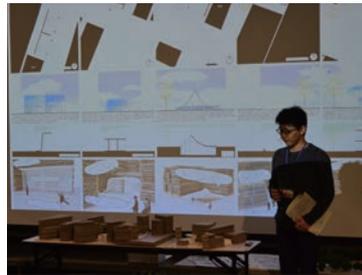


2



まちをめくる、まちをめぐる
 ～街の回遊性を高める空地的建築群～
 小田 瑞葵 (おだ みずき)
 千葉県立市川工業高等学校 建築科

金賞

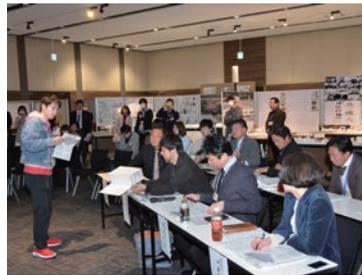


3



黄金比の図書館
 小島 海月 (こじま みつき)
 千葉県立市川工業高等学校 建築科

銅賞



5



自然に奪われ、祝われて
 水野 誉也 (みずの もとや)
 千葉県立市川工業高等学校 建築科

金賞



6



旭市立美術館
 ～旭の街を知る～
 浅見 遊 (あさみ ゆう)
 千葉県立東総工業高等学校 建設科

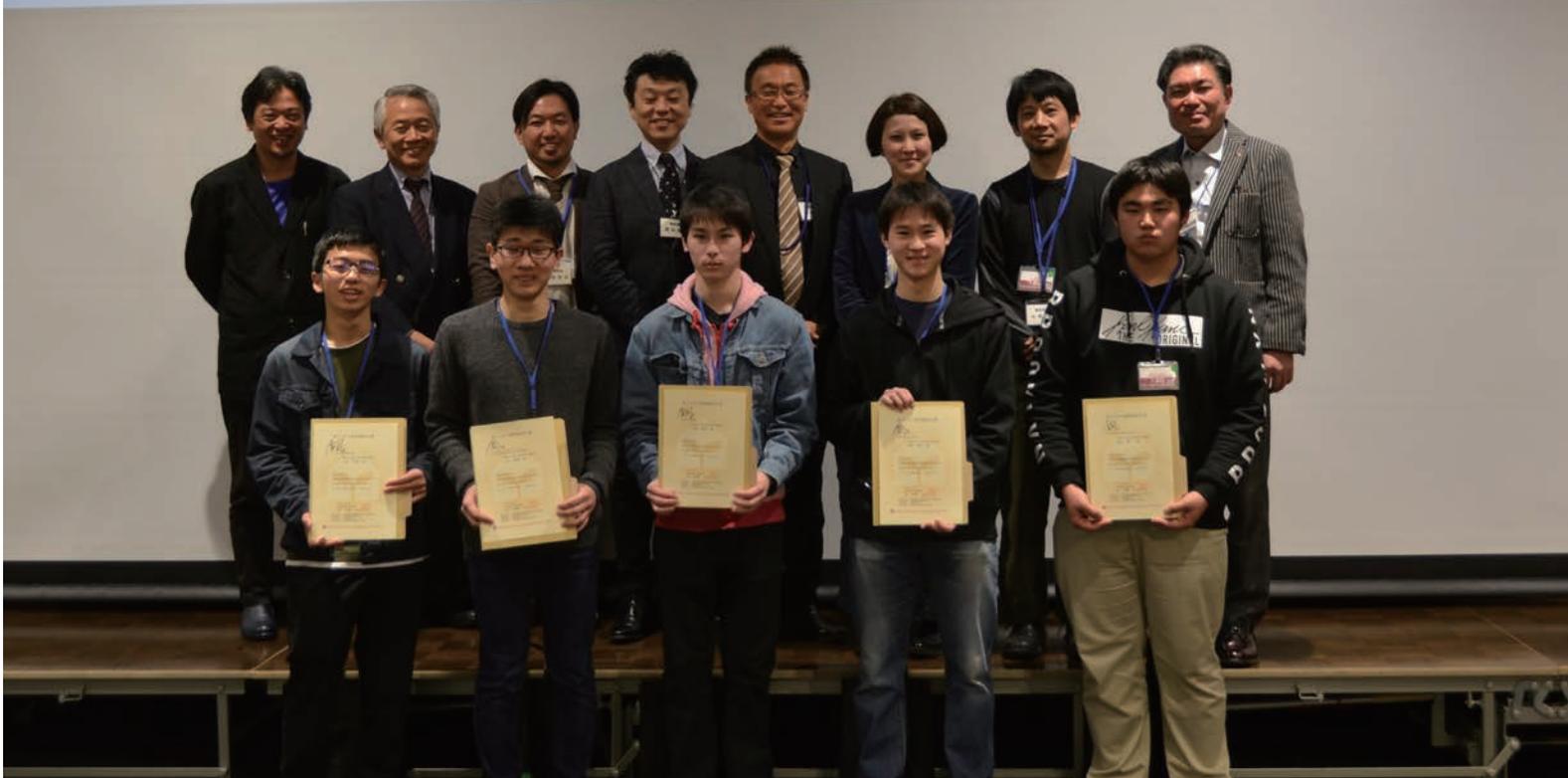
銅賞



審査講評



第30回千葉県建築学生賞 — 高校の部 —



審査委員長



なかの まさや

中野 正也

出向元：(一社) 日本建築学会関東支部
なの花会 (出展者の会)

1974 京都府京都市生まれ/1997 千葉工業大学工学部建築学科卒業/1997～2000 株式会社野生司環境設計/2001～2013 株式会社デネフェス計画研究所 取締役副所長/2001～2014 千葉工業大学工学部建築都市環境学科 非常勤講師/2014～株式会社 neuf works(ヌフ・ワークス) 設立/2016～千葉工業大学工学部都市環境学科 非常勤講師
船橋 S ビル、船橋 M 邸、幕張本郷の家、清澄白河 project、代官山 project (2019.1 竣工予定)

■皆さんの作品から多くの面白さや可能性について気付かされ、とても多くの刺激をいただきました。楽しい時間をありがとうございました！



副審査委員長



なるみ まさと

鳴海 雅人

出向元：(一社) 日本建築学会関東支部

1958 青森県生まれ/1980 芝浦工業大学建築学科卒業/1980～株式会社佐藤総合計画 (旧佐藤武夫設計事務所) / 現在 執行役員アーキテクトサークルプリンシパル

日本建築学会、JIA 日本建築家協会登録建築家 CASBEE 評価委員公共建築のコンパ・ポロ・ザルから設計監理まで実作は 100 件以上に関わる。

グッドデザイン賞、BCS 賞、建築学会選奨、JIA 賞、図書館建築賞など多数

著書に「人生は満たされなかった建築で溢れている」「人生は満たされつつある建築で溢れている」(鳴海雅人著書・青弓社)「予感の形式 (共著・日刊建設通信新聞社)」「触発する図書館 (共著・青弓社)」「つなぐまちづくりビルディングデザイン (共著・日刊建設通信新聞社)」「ほんものづくり」(共著・建築ジャーナル)

■モットー「生き方を楽しむ」

審査姿勢「学生賞を楽しむ。学生も学生賞を楽しめ、そしてちばこうぎようだいがく何かを掴め。



高知県・高知市統合図書館



世田谷区庁舎・区民会館プロポーザル (模型写真) 特定案 (2024 年 12 月・全体竣工予定)

審査委員



やすだ としや

安田 俊也

出向元：(一社) 日本建築学会関東支部

1959 千葉県生まれ/1981 早稲田大学理工学部建築学科卒業/1981 株式会社山下設計 / 現在 山下設計 プリンシパルアーキテクト

市川市新庁舎、2020 年竣工予定、高崎アリーナ、ナセ BA (市立米沢図書館+よねざわ市民ギャラリー)、なみきスクエア (香椎副都心公共施設)、KUSTE (勝浦市芸術文化交流センター)、尾張一宮駅前ビル (図書館を中心とした複合文化施設)、東部地域振興ふれあい拠点 (耐火木造の公共施設)、アイシン AW 技術センター 他

■社会や地域の課題の中から、どのような「かたち」を立ち上がらせるのか？

みなさんの自由で柔軟なアイデアを楽しみにしています。



KUSTE (勝浦市芸術文化交流センター)



なみきスクエア (香椎副都心公共施設)

ナセ BA (市立米沢図書館+よねざわ市民ギャラリー)



アイシン AW 技術センター



せきや かずのり

関谷 和則

出向元：日本建築学会

1971 群馬県生まれ/1994 日本大学理工学部海洋建築工学科 卒業/1996 日本大学理工学部大学院修了/1996～竹中工務店 東京本店設計部/2014～日本大学理工学部建築学科 非常勤講師
東京建築賞 東京都知事賞（代沢レジデンス）、グッドデザイン賞（代沢レジデンス）、中部建築賞（養命酒健康の森 記念館）、BELCA 賞（養命酒健康の森 記念館）、日事連建築賞 優秀賞（養命酒健康の森 記念館）、グッドデザイン賞（養命酒健康の森 記念館）、グッドデザイン賞（くらすわ）、北陸建築文化賞（くらすわ）、日本サインデザイン賞 優秀賞（新宿東宝ビル）、グッドデザイン賞（新宿東宝ビル）、BCS 賞（新宿東宝ビル）他

■卒業設計作品には、今日の社会的な課題に対してどのように向きあったかが求められます。公開審査を通じて、自分の作品を客観的に分析し、さらに完成度を高めるきっかけにしてください。



新宿東宝ビル 東京都新宿区（2015年）



くらすわ 長野県諏訪市（2010年）



がもう よしたか

蒲生 良隆

出向元：（一社）千葉県建築士会

1961 東京都生まれ/1984 日本工業大学工学部建築学科卒業/1984 株式会社協和建築設計事務所/1986 株式会社マキノ建築設計事務所/1955 がもう設計事務所 開設/2011～株式会社がもう設計事務所 設立。
ボルボ・カー柏ショールーム、ビジネスホテル五井温泉新築工事、なの花保育園新築工事、美しが丘保育園新築工事、古谷式典北習志野斎苑新築工事、アリビオ八千代台西新築工事 他

■学生のときにしか発想出来ない夢のある作品を期待しています。学生の皆様と共に学生賞を楽しみたいと思います。



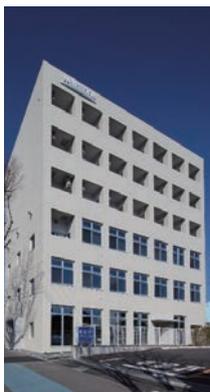
ボルボ・カー千葉中央



英進幼稚園



あすなろ保育園



ウエルストン設計本社ビル



ゆいまき斎苑



そのべ たかお

園部 隆夫

出向元：（一社）日本建築構造技術者協会

関東甲信越支部サテライト千葉（JSCA 千葉）
1948 茨城県水戸市生まれ/1973 日本大学大学院理工学研究科建設工学修了/1973～1998 株式会社フジタ 構造設計部/1999～株式会社 S P C 設計
文化服装学院、文化女子大学校舎、フジタ本社ビル、橋本駅北口地区再開発、周西及び君津中学校屋内運動場、住友不動産成増駅前計画、大宮ソニックシティ（共同設計）他

■安全性と安定性を確保しつつ、夢ある空間を実現するためにどのような配慮がされているか楽しみに見せていただきます。



月島計画



フジタ 本社ビル



周西中学校屋内運動場新築工事



文化服装学院・文化女子大学校舎

審査委員



いその ともよし

磯野 智由

出向元：(公社)日本建築家協会(JIA 千葉)
 1974 千葉県生まれ/1997 明治大学理工学部建築学科卒業/1999 明治大学理工学研究建築学専攻博士前期課程修了/1999 株式会社榎本建築設計事務所入所/2004 一級建築士事務所 STYLELAB 創設/2014～一級建築士事務所 STYLELAB 株式会社 第23 回日新工業建築設計競技入賞(新建築'98.1)/建築学生設計大賞 準大賞(新建築'99.3)/第24 回 INAX デザインコンテスト アイデア賞/大多喜町庁舎建設設計業務プロポーザル 優秀賞 共同提案：NAP 建築設計事務所 中村拓志/大多喜町立老川小学校(文部科学大臣賞)/富山町ハイウェイオアシス富楽里「道の駅」/知的障害者更生施設 山武みどり学園(建築文化賞)

■卒業設計として学生ならではの創造力と熱意、現実のとらわれないのびのびとした作品を期待しています。また、プレゼンでは如何に人を惹き付ける表現ができるか楽しみにしています。



倉庫コンバージョン



中庭のある家



多目的格子の家

審査委員



いとう まりこ

伊藤 茉莉子

出向元：なの花会
 2005 日本大学生産工学部建築工学科卒業/2005～2014 谷内田章夫/ワークショップ(現：株式会社エアリアル)/2013～会津大学短期学部 非常勤講師/2014～KITI 一級建築士事務所 設立「清澄白河の集合住宅」グッドデザイン賞ベスト100(谷内田章夫/ワークショップ在籍時)
 共著書：「矩形図で徹底的に学ぶ住宅設計《木造編》、《RC 編》、《S 編》」オーム社/「世界で一番美しい名作住宅の解剖図」他

■私がそうであったように、思い入れの強い程、卒業設計の作品と製作に打ち込んだ日々は学生時代の強烈な思い出となり、今後の建築人生にも影響を与える事になるでしょう。皆さんの熱い想いを共有する事を楽しみにしています。

※は谷内田章夫/ワークショップ在籍時の担当作品



目黒中央町の家



鴨川の集合住宅※



清澄白河の集合住宅※



軽井沢の別荘※

審査コーディネーター



ささき たつろう

佐々木 達郎

出向元：なの花会
 1979 北海道生まれ/2002 千葉工業大学工学部工業デザイン学科卒業/2004 千葉工業大学大学院修士課程修了/2004～2013 東環境・建築研究所/2013～株式会社佐々木達郎建築設計事務所 設立/現在 千葉工業大学デザイン科学科 非常勤講師
 星のや軽井沢※ ARCASIA Awards Gold Medal, AACAA 賞, JIA 環境建築賞優秀賞, グッドデザイン賞/星のや東京※ グッドデザイン賞/星のやバリ※(※ 東環境・建築研究所在籍時の担当作品)/House-AN グッドデザイン賞/三浦電機新社屋 日経ニューオフィスデザイン賞, 北海道知事賞

■思いの強い様々な作品に出会い、私自身も刺激を受けました。今の思いを忘れず、作品をつくり続けて下さい。活躍を期待しています。



星のや東京

星のや軽井沢/星のやバリ



三浦電機新社屋

協賛

一般社団法人日本建築構造技術者協会 JSCA 千葉	260-0013	千葉市中央区中央 3-1-7-1-1011	tel: 043-310-3824
三協立山株式会社三協アルミ社 千葉支店	261-0023	千葉市美浜区中瀬 1-7-1 幕張テクノガーデン B 棟 20 階	tel: 043-296-3292
株式会社鈴木ユニット	262-0012	千葉市花見川区千種町 2-4-1-1	tel: 043-257-5754
株式会社総合資格 東関東本部	273-0005	船橋市本町 5-4-2 森ビル 6 階	tel: 047-425-8941
有限会社佐藤建基	262-0019	千葉市花見川区朝日ヶ丘 4-1-1-5	tel: 090-3202-2780
有限会社巴工業	130-0002	東京都墨田区業平 1-9-4	tel: 03-5608-4582
株式会社桑田建築設計事務所	261-0001	千葉市美浜区幸町 1-2-2 桑田ビル内	tel: 043-241-7511
千葉県建設防水工事業協同組合	260-0013	千葉市中央区中央 4-1-4-1 千葉不動産ビル 2 階	tel: 043-222-4751
株式会社千葉県建築住宅センター	260-0013	千葉市中央区中央 4-8-5 建築会館 2 F	tel: 043-222-0109
日本 E R I 株式会社 千葉支店	260-0028	千葉市中央区新町 3-1-3 千葉 TN ビル 3 F	tel: 043-203-8551
株式会社レスト 東京支店	167-0043	東京都杉並区上萩 1-5-8 直長ビル 4 F	tel: 03-5335-6263
三和シャッター工業株式会社	260-0843	千葉市中央区末広 4-1-9-1 6	tel: 043-265-3030
株式会社建築資料研究社 / 日建学院	260-0032	千葉市中央区登戸 1-2-2 0	tel: 043-244-0121
日本ファイリング株式会社	101-0062	東京都千代田区神田駿河台 3-2 新お茶ノ水アーバンビル 8 F	tel: 03-5294-3011
児玉コンクリート工業株式会社	171-0022	東京都豊島区南池袋 1-16-2 0	tel: 03-3971-7195
有限会社松原組	344-0022	埼玉県春日部市大畑 9 日神パレスステージ 112	tel: 048-734-4583
武藤工業株式会社	154-8560	東京都世田谷区池尻 3-1-3 MUTOH ビル 2 F 首都圏営業所	tel: 080-6583-6196
西松建設株式会社	105-6310	東京都港区虎ノ門 1-2-3-1 虎ノ門ヒルズ森タワー 10 階	tel: 03-3502-7625
塚本總業株式会社 千葉支店	260-0005	千葉市中央区富士見 2-3-1	tel: 043-227-8527
株式会社岡村製作所 千葉支店	260-0027	千葉市中央区新田町 1-1	tel: 043-204-5790
コクヨマーケティング株式会社	260-0045	千葉市中央区弁天 1-1-5-1 細川ビル 4 F	tel: 043-207-5581
株式会社日立ビルシステム 東関東支社	260-0031	千葉市中央区新千葉 1-4-3 WESTRIO 千葉オフィス棟 6 階	tel: 043-241-1295
協同組合千葉県鉄骨工業会	260-0031	千葉市中央区新千葉 2-1-6 第一石橋ビル 3 階	tel: 043-247-2631
千葉県室内装飾事業協同組合	260-0014	千葉市中央区本千葉町 10-25 D I K マンション 703	tel: 043-222-6575
一般社団法人千葉県建設業協会	260-0024	千葉市中央区中央港 1-1-3-1 建設業センター 5 F	tel: 043-246-7624
有限会社荒井設計事務所	299-1152	君津市久保 4-4-2 0	tel: 0439-52-2555
株式会社丸昭建材	277-0861	柏市高田 1116-3 2	tel: 04-7143-0263
株式会社礎積算	339-0074	埼玉県さいたま市岩槻区大字本宿 232 番地	tel: 048-790-5112
日章興株式会社	263-0043	千葉市稲毛区小仲台 6-1-8-1-406	tel: 043-287-1211
日本ベース株式会社	116-2351	東京都荒川区西尾久 4-2-2-6	tel: 03-3810-2351
日軽パネルシステム株式会社 関東総括支店	260-0028	千葉市中央区新町 18-14 千葉新町ビル 5 F	tel: 043-302-7177
株式会社メント	132-0021	東京都江戸川区中央 3-5-5	tel: 03-5879-5470
岡部株式会社 本社営業部 木造戸建部材 C	131-8505	東京都墨田区押上 2-8-2	tel: 03-3624-5401
株式会社ブルーテクノ	273-0046	船橋市上山町 3-5-14-8	tel: 090-3816-8283
アイカ工業株式会社 千葉支店	260-0023	千葉市稲毛区緑町 1-1-8-9 新日本オフィスビル 4 階	tel: 043-241-2181
ノザキ建工株式会社	261-0002	千葉市美浜区新港 2-3-3	tel: 043-243-0606
株式会社角藤 千葉支店	260-0031	千葉市中央区新千葉 2-7-2	tel: 043-246-1131
株式会社イトーキ 千葉支店	260-0013	千葉市中央区中央 1-1-1-1	tel: 043-227-8766
立川プラインド工業株式会社 千葉支店	260-0044	千葉市中央区松波 2-8-1	tel: 043-252-2821
TOTO 株式会社 東関東支社	263-0016	千葉市稲毛区天台 1-5-5	tel: 0570-023301
東リ株式会社	260-0843	千葉市中央区末広 4-1-8-1	tel: 043-208-1381
リリカラ株式会社 千葉営業所	275-0023	千葉市花見川区幕張本郷 5-2-2-11 アトレ幕張 101	tel: 043-382-3375
ユニーアイ確認検査株式会社 千葉支店	260-0026	千葉市中央区千葉港 2-1 千葉中央コミュニティセンター 10 F	tel: 043-203-6870
有限会社ミノル商事	260-0001	千葉市中央区都町 1-9-2 植草ビル	tel: 043-231-8450
株式会社須藤黒板製作所	132-0035	東京都江戸川区平井 7-1-7-3 5	tel: 03-3617-8701
株式会社青井黒板製作所	165-0026	東京都中野区新井 1-1-5	tel: 03-3387-3330
株式会社技研基礎	260-0843	千葉市中央区末広 5-8-6	tel: 043-266-6812
孝和建商株式会社	260-0034	千葉市中央区汐見丘 16-1-2	tel: 043-245-4111
株式会社恩田商工	260-0023	千葉市中央区出洲港 9-1-0	tel: 043-242-1377
株式会社千興商事	264-0003	千葉市若葉区千城南 4-1-1-5	tel: 043-236-3211
株式会社千葉測器	260-8567	千葉市中央区都町 2-1-9-3	tel: 043-232-2541
株式会社 L I X I L 関東支社	260-0842	千葉市中央区南町 3-2-2-1 3	tel: 043-209-2871
ディックブルーフィンク株式会社	151-0053	東京都渋谷区代々木 3-2-4-3 新宿スリーケービル 5 F	tel: 03-6859-5020
前田製管株式会社 千葉支店	260-0007	千葉市中央区祐光 4-7-1 0	tel: 043-221-2051
日本高圧コンクリート株式会社 千葉営業所	260-0021	千葉市中央区新宿 2-1-2 0	tel: 043-242-4311
文化シャッター株式会社	264-0025	千葉市若葉区都賀 3-3-3-2 3	tel: 043-231-2100
株式会社裕設計	262-0024	千葉市花見川区浪花町 5-3-1-1	tel: 043-272-4193
株式会社がもう設計事務所	274-0815	船橋市西習志野 3-2-6-8 ファインコート北習志野 2 B	tel: 047-463-9901
株式会社サンゲツ 東関東営業所	261-8501	千葉市美浜区中瀬 1-3 幕張テクノガーデン D 棟 7 F	tel: 043-276-8000
昭和フロント株式会社 東部支店 千葉営業所	260-0843	千葉市中央区末広 4-1-9-1 6	tel: 043-266-2050
田島メタルワーク株式会社	170-0013	東京都豊島区東池袋 4-4-1-2 4 東池袋センタービル 3 F	tel: 03-5396-7629
昭和建産株式会社	370-0603	群馬県邑楽郡邑楽町中野 1-4-5 3	tel: 0276-70-2071
三和タジマ株式会社	171-0014	東京都豊島区池袋 2-7-7-5 フォーラムアイエスビル 1 F	tel: 03-5954-5866
株式会社セレコ	265-0074	千葉市若葉区御殿町 2-5-2 9-6	tel: 043-308-5120
タニコー株式会社 千葉営業所	261-0005	千葉市美浜区稲毛海岸 2-1-2 8 5	tel: 043-248-0791
ロンシール工業株式会社	130-8570	東京都墨田区緑 4-1-5-3	tel: 03-5600-1866
田島ルーフィング株式会社 千葉営業所	260-0032	千葉市中央区登戸 1-2-6-1 朝日生命千葉登戸ビル 9 F	tel: 043-244-3711
ユニシ株式会社 千葉営業所	260-0044	千葉市中央区松波 2-1-3-2 0 オフィス松波	tel: 043-305-5970
浜田商事株式会社	160-0022	東京都新宿区新宿 5-1-5-1	tel: 03-3352-0441
明智 克夫			

主催者団体

“わたしたちは、千葉の建築学生を応援しています。”

(公社) 日本建築家協会 (JIA) 千葉地域会

Tel: 043-225-7881

建築の設計監理を行う千葉県内の建築家の団体。会員は、日本建築家協会の会員。専門建築設計事務所の主宰者、共同者、所員、官公庁、学校等に所属する建築家。

(公社) 千葉県建築士事務所協会

Tel: 043-224-1640

建築士法により開設された建築士事務所の団体。会員は、建築設計事務所、建設会社の設計事務所、工務店設計事務所、不動産会社設計事務所、プレハブ業建築設計事務所等。

(一社) 千葉県建築士会

Tel: 043-202-2100

建築士法により設立された一級建築士、二級建築士、木造建築士の団体。会員は、建設業、設計事務所、工務店、官公庁、学校、建材業、不動産業、プレハブ業に勤務する建築士。

(一社) 日本建築学会 関東支部 千葉支所

Tel: 043-202-2100

建築に関する学術・技術・芸術の促進発展を目的とする法人。全国に9支部36支所。会員は、研究教育機関、設計事務所、建設業、官公庁、公社公団、メーカー、コンサルタント、学生等多岐にわたる。

企画・発行

会 長

審査委員長

副審査委員長

審査委員

審査コーディネーター

得点表示委員会

作品受入委員会

広報委員会

会場委員会

表彰式委員会

編集委員会

市民賞アンケート委員会

JIA 出展委員会

高校委員会

ポスター・チラシ委員会

協賛委員会

交流委員会

オブザーバー

執行委員会

歴代会長会

事務局

千葉県建築学生賞協議会

中野 正也

中野 正也

鳴海 雅人

安田 俊也・関谷 和則・蒲生 良隆・園部 隆夫

磯野 智由・伊藤 茉莉子

佐々木 達郎

伊藤 哲也

佐久間 達也・田端 友康・萩原 進・桑田 浩司

古里 正・寺川 典秀

井桁 正昭・加藤 文男・大岩 義充・神成 健・飯沼 竹一・伊藤 哲也

皆川 拓

柳田 富士雄・安達 文宏・遠藤 啓史・佐倉 桂・岡松 利彦

牧野嶋 彩子・笠原 由希

田端 友康・岡田 学・萩原 進・高嶋 章男

鈴木 雄介・星野 治・河原 泰

森田 敬介

林 祐介・高旨 清仁・徳野 淳哉・首代 昌紀

曾根岡 拓路・岡松 利彦

鈴木 周二・平宅 武司・鈴木 克則・野村 優太・山田 紀夫・坂本 浩史

野口 賢二・川原 武美・白井 信玄・降旗 勝義・吉浪 弘之・高瀬 俊輔

平宅 武司

寺川 典秀・柳田 富士雄・森田 敬介・須田 正美

柳田 富士雄・森田 敬介・星野 治・古里 正・大岩 義充・神成 健

加藤 文男・安達 文宏・寺川 典秀

明智 克夫・清水 怡・麓佳 正・櫻井 修・宇野 武夫

佐竹 良造・寺川 典秀・加藤 文男・森田 敬介・星野 治

古里 正・大岩 義充・柳田 富士雄・安達 文宏・神成 健

公益社団法人日本建築家協会千葉地域会 矢内 美恵

〒260-0013 千葉県千葉市中央区中央4-8-5 建築会館5F

TEL 043-225-7881



千葉県建築学生賞協議会

CHIBA ARCHITECTURE GRADUATE'S PRIZE 2018